

る者なり其幽玄を能く味ふ可し

時に此五常の缺ける所無く能く守る事に至ては則ち大道を履むの人と成りたる者也、又其足らざるを補ふには先づ其好む所と其器量とに随ふて以て善きを移さずんば是を補う事なるへからず、其好む所も器量も年々歳々に異なる也故に人生れてより長するに随ひ年々歳々に其心の居る所と物を望事杯の其器量の變化する荒ましを是に記す

第三項 出産後の養育法則

第一節 當歳より二歳までの變化及之が養育の方法

夫れ人は生れて乳を呑み初る事則ち物を思ふの初也、然れども其百日の中は物を見るときも見ざるも無く心は雲歟霧の如し

「細註」其百日の中は譬ば實植したる松の地中を出たるに齊し

百日を過ぎてより二歳近く成るに随ふて惠顔も聲を發して笑ふ事に至る也、是れ則ち漸々に心の心たる事に至る所以也、故に見聲事に漸々力を得て其氣質の用の種と成る事の盛となるも亦是に順ふ以下皆是に倣ふへし

「細註」其心の生長したる事松の地中を出て則ち松の形作りたるが如し

第二節 二歳より三歳まで

二歳と成りては物の名、黒白の名を知らすといへとも黒白を見別け或は物音に驚く事杯有る事に至ては其見聞事の方も亦漸々強く成るなり

「細註」是れ松にして則ち形の顯はれたる頃の如し

第三節 三歳より四歳まで

三歳近く成るに順がひ笑ふ顔と怒かる聲とを見分け聞分くることに至る也、或は三歳と成りては物を言ひ初め或は歩行初めることに至て則ち心の心たることに至りたるもの也故に見聞くことに思惑有り

「細註」是れ松にしては二葉極りたる頃なり故に四歳近く成るに隨ふて松にして松の體極り明れば枝を出すの潤を持たる頃の如し

第四節 四歳より五歳まで

四歳近く成るに須ひ則ち才智の萌を能く備る頃也

「註」故に此四歳と成る迄の中に其心に移す事則ち所謂氣質の用の種と成る者の本元也と知るべし、然れば其移す風に依て其行の善惡邪正を顯す事の本来も亦是に窮まるへし

「細註」故に子を育る者は必ず先づ大ひなる法を極て以て是を移す可しと云ふなり、才と智とは相混じたる者なれども性質聖人に

第六章 兒童教育 第三項 出産後の養育法則 第一節 當歳より二歳までの變化及之の養育の方法 第二節 二歳より三歳まで 第三節 三歳より四歳まで 第四節 四歳より五歳まで 一章

あらざる者の才進む時は必ず智後るゝものなり故に必らず先づ智を元として才は必らず末として育るを宜しとす可し、又云ふ才より智を勝しむるには必らず先づ寛柔を以てして俗に云ふ馬鹿のよふに育て可し、然るに於ては才に尠るゝ事なければ智の後ろゝ事も無かる可し

又云愚俗の性質なる者杯を若し利口を以て育るに於ては或は物に浮れ杯俗に云ふ輕るはずみをして家身を亡す者擧て敷ふ可からず見て知る可し、故に器量無き者は猶さら利口を必ず其身の敵と心得べし、亦愚俗の目には馬鹿と見ゆるとも仁に近きを宜しとすべし、是れ則ち家名相續の大事なり

四歳と成りては萌したる才智の芽をふき出すの頃也故に物を辨へる事に至る也

「細註」松にしては始て枝の出たる頃なり是れ亦枝々の精の善し悪しもつちかひ肥しの上と下手によつて枝振の善惡も出来るなる可し、人も亦是の年迄の氣質の用の種善ければ其所爲も善き事を辨るなり亦若し其種の惡ければ其思ひ附事皆惡し能く試み其幽芝を能く味ひ知る可し

第五節 五歳より六歳まで

五歳近く成るに順ひ漸々才氣舒る故所謂種の本元の善惡に依りて其父母兄弟等に對しても其云ひ作す事に善惡の差ひ則ち的前に顯るゝ事見て知るへし

「細註」松の枝ぶりよからわとて漸々の事に出たるばかりの枝を切る時はその木痛み屈して舒難かる可し、人の子も亦是に似たる

味ひ有り其所以は才智初めて顯はれ漸々に言ひ爲す事の宜しからればとていたく是を制する時は其制せらるゝ困り思ふ事も云ふ事も唯々捨塊るばかりにて才智屈して舒る所以無し、是に於て所謂氣質の用の種と成る幽芝を能く味ふて以て世の人の行ひに大に善惡邪正の顯るゝ證據も亦眼前にあるを見て知るべし才智の増舒と屈る所以十五歳迄は皆此意に徴ふ可し

五歳と成りては陽氣惣身に満ち渡る時にして才氣の舒る事も亦盛なる時なり、然れとも其才氣は舒る事盛なる耳にして善惡邪正を辨る程の器量にあらざれば人の教も誠も更に心に止まらず唯々己の發る儘に心の働く耳の頃也

第六節 六歳より七歳まで

六歳近く成るに順ふて其勢ひ益々盛んなれば心の移り替る事も亦是に隨ふ

「細註」故に智を増さしむるに甚だ六ヶ敷大事なるときなり、また此の五六歳の中に捨塊れものにして、才智を打屈るもの甚だ多し、見て知る可し

「註」又云ふ人十五歳迄は常に見覺へ聞覺へたる事其時其儘直に思ふ事の種と成りて以て其言ひ出る事も亦思惑も日々に才ばしる者也、道を知らざる人は其子供之才奔るを智恵附たりと心得違てはう笑む者也、童兒も亦人の我にはうゑむを見て嬉し氣に其圖に乗る者也、中にも五歳六歳の頃は物に才はしる事騎馬の如し故に才耳舒ひて智を増すいとまなし是を以て唯所謂出過る事の種ばかり生る也、是を才に尠ると云ふ亦是につるて愚俗は六歳迄の中に水氣の萬物を潤す如くなる尊き其智を

失はしめ利口がましく育る者萬にして九千九百九十九人なるべし

「細註」夫れ如斯所謂馬鹿の如く育るに於ては才氣靜かなれば其才に勉るゝ事も無かる可し然るに於ては智漸々増むとも微るゝ事無かる可し、又才はしる事無き童子扱は他人と雖も是を愛す其愛にあつかるに於ては捨塊る事も無き故に能く人の教を用ゆるなり是れ則ち智なり、然るに於ては人に打風めらるゝ事無ければ才も直ちに舒ひて愈々智を増し馬鹿と成る可きいはれ無し其幽玄を能く味ふ可し、松に譬て是を言へば智を肉にして増者なり故に目に立ぬなり才は丈に舒る者なり故に目立つなり

又云ふ松も丈に舒る事盛んなれば必ず肉増さす疲て枝葉とも茂らぬ者なり是等の木二三十年も育て風杯の爲に吹き折られ杯して功能薄し、せゝこましく植込す唯々問原に植て健に仕立たる松は肉太にして立體具足する故其舒るとも目には立すと雖も其枝葉も茂り幾丈舒るとも危からず千歳ふるとも年ふる程年々歳々に世の用と成るなり

人も則ち其の如し幼稚の時才舒る事盛んにして智の微れざる者稀なる可し、亦智微れて才耳丈たる者は必ず疾ひを引出す事世俗を見て知る可し故に必ず先づ智を増せしむる事耳能くして以て才是に隨ふて育る時は則ち五常自らに具足するなる可し其年長するに順ふて年々歳々に要有るとも疾ひは無かる可し此幽玄を知らずして子を育るは危し

六歳にして女子は稍々人心地付く故に此頃に至ては小々しく世話する事杯を好む氣味有り其人心地付くに順ひ人を妬み猜むの志出て來る頃也

男子は陽氣多く寛なる徳の備り有る者也故に六歳にして未だ人心地盛んならず唯見聞く事に才はしる真の頃也

第七項 七歳より十歳まで

男七歳と成りてはことに入れては遠慮する氣味有りまたことに入れては才はしること有るとの兩端也

「細註」是れ亦八歳迄の中に人と成りて後の我儘の種と成ること多し

女は七歳八歳と漸々と妬猜の強く來る頃也或は及も無き人の心を己が心の底にて推察し或は年丈たる男子に對るとも懼れたる振りにて心の底に捨塊有る頃也

「細註」此誠めずして實る男子を恐るゝ事に育てざれば其年丈て必ず氣隨の種と成るなり

男八歳と成りては則ち人心地付さ少しく人の心を問ふ氣味有り亦年丈たる男子に對する時は少し臆するの氣味あり

「細註」此年丈たる男子に對面爲さしむる時は必ず情愛薄き人に對面爲さしむ可からず其幽玄を能く味ひ知る可し

女九歳と成りては人に對して何歎物思ひの面持有る事多し其人の心をさぐるの氣味有故也故に其れ相應に邪痴を専らとする頃也

「細註」尤も女子は氣重く物思ひの面も持有時は其心のそこに邪痴有事多しと知る可し

人を能く育ひ試したる者ならでは是等のことは或は感ひ或は迷ふて其の幽玄は必らず知り難かるべし

女十歳と成りてより漸くに面柔らかき言葉やさしく成る頃也又た稽古事などは能く手に入り初る頃也

〔細註〕尤も女子は嫉妬偏執のみ多くして智無き者なれば此頃迄に善惡邪正を辨する杯は其年長せるに順ふて人の善き噂する杯の種と成るなり別して民家の幼女の咄し上手杯は年取て後の人の噂する種なり試し見る可し

男九歳より十歳の中は唯だ忙然として、心に執り止め無く、唯だ存するが如く、亡ふが如くの頃なり

〔細註〕尤も男子は所謂健かなる者なれば此頃は其心唯其儘なり

第八節 男子十一歳より十四歳迄

男十一歳より物學びの志に力を得るの頃にして二十三十四歳と漸々學びの力を得る頃也

〔細註〕男子は所謂寛なる者なれば物に凝る事鮮し故に育て方の悪き子は必ず學ぶ事の緩き者なり、然れども教へ方善ければ其れ相應に知るなり是れ亦陽物の徳なり、唯々偏執の種と成る事と臆病に育る事勿れ

第九節 女子の十二歳

女子十三歳と成りては一婦人たるの能力を備へ唯人の形振り杯は目を配り或は俗に云ふ耻ケしき面はせ多し又其風姿に偏執する故悉く氣弱く成る者也

〔註〕女子一婦人たるの、機能を備へるに至りては、則ち人と成りたるものなるゆゑに、十三歳ま

でに見聞きたることは、皆おもふことの種と成るなり、則ち其の常に見聞きたることの風に心の居ると知るべし

第十節 男子の十五歳

男子十五歳と成りて人の父たるの能力を具備し此時に至りて氣強く成る者也

〔註〕是れ亦此十五歳迄の其常に見聞きたし事則ち思ふ事の種と成りて其思ふ事の器量相應に其行の善惡邪正を顯はす也

又云ふ男子は十五歳女子は十三歳迄の中に人の感る程の頓才有る者杯は道たる所以をも知らしめずして唯其儘に育るにおゐては其中年に至りて或は公事訴訟或は分不相應の事を巧み杯して終に不孝不義、非義非道を行ふ者世に多きを見て知るべし危々々

〔細註〕若し幼稚にして頓才なる子を持ちたる者は斯くの如く悪行に陥る事有るを恐れて必ず其頓才を悦ぶ事勿れ必ず愚鈍に似たる事有るを見出し是を悦ぶべし然る時は其幼稚の心自ら能く鎮り智を増すべし、其幽玄は筆端に及び難し故に是を能く味ふて其行ひを勉め試る可し

又愚鈍なりと見ゆる程の者は利口にたに育てざれば危き事少かる可し、別て頓才有る童子には道杯を必ず口先にて教ふる事勿れ必ず常に道たる行ひを勤め見せる事こそ大事なる可し

第四項 士以上の兒童教育法

抑々我朝は勇猛の國にして人の氣風押なべて義強し、然ども其勇猛の氣質の者若し偏執する種の生る時は激する事常と知るべし故に人に及ばざる事有れば則ち激して却て其勇氣を失ひ臆病發り物を學ぶことだにも退屈する有り或は臆病の疑り塊愈々激することの甚しき時はことにふれて夏の虫の飛で火に入るに齊しき類ひの擧げて數ふべからず、是れ等は皆偏るより發ることなり、拙きことなるべし

〔細註〕 勇氣激して臆病と成り臆病激して人を殺す杯其危き幽玄を能く知り能く心得べきなり

然れども男子は陽氣盛なれば所謂四の拙きを以つてすることなどは偏執する種だに無ければ、勇氣の國の陽徳には則ち智を増し才を育て自から三徳備り五常を能く守ることに至るべし

〔細註〕 亦唐國と日本の三徳のくらべ合せて雜書三卷に在り見る可し編者云ふ雜書の著無し

又た云ふ我朝の士以上方におゐては所謂四の拙きこと杯は見たることも無く聞きたることも無き故に其の拙きことをば思ふべき所以無し唯だ其常見聞くことは則ち諸侯の諸侯たること耳に被り又大夫の大夫たること耳見聞きて其種に其の威徳自らに備はる證據は此の以上の子を育てる法りを見て識るべし

第五項 大夫以上の胎内養成

我朝におゐて諸侯の諸侯たる心の備はる所以は先づ子母の胎内に居る中第一は其君より所謂仁徳を以て其母たる者の心を育て以て寛容に持たしむるなり

〔註〕 時に婦も亦た其の君の仁恵を稟け其の寛容なる心として其の側女等の中にも局、中老の役を重んじ其のもの言を能く用るなり、又た其のものどもの私し無きを愛し或ひは眼前のことに迷はざるものを感じ杯

〔細註〕 其愛し感る心にして口に出さず其役をもんする風は實に寛容なる者なり

〔註〕 して其數多の側女等の心自ら眞實に成る事杯を心に懸て是を樂と

〔細註〕 其の心に至らしむるには、其の君常に別を正しくして以つて、其の十月の中になを別を正しくして以つて慈惠の中に一言し右となむ

〔註〕 て暮す也故に其胎肉の子は其母君の其仁恵を尊敬する心と其穩にして靜かなる氣を稟て其氣質は則ち智を備へて生る也

〔細註〕 如斯母の心を穩に靜に居らしむる事則ち其君の心に有るなり故に俗にはば借物と云ふ則ち此の所以なり

又云ふ婦の氣廻り勝ちなる者夫の言ひにあらすんば如何に備らざるの心に居る事のみならんや如斯子胎内に有る中よりして子を好くするの道有り、然ば庶民と雖も臆胎の女若し廻る機との見へたる時は其不敬失禮する事に至らざる中に必づ先ず其心を穩かに

持たしむること分相應の仁と云ふ可きなり

第六項 大夫以上の出生後の養育方法

其子生れて其刻より暗き所に居らしむる事無し又敷居の外へ出てす又抱歩行の靜なる事は其子の爲には疊の上に座し居るに齊し且其近習の者に高聲高笑ひを許さず亦百日を過ぎて敷居の外へ抱き出るとも照る日に向はしむる事無く、吹く風に向はしむる事無く、音響に向はしむる事無き等に注意すべし

「註」 如斯に育る故に既に述る所の聰明睿智を能く守る事に至る也、士も亦其中に勤住す故に常に其上に近き士ひ程なほ寛仁威義に移り則ち利して杯ふ也

「細註」 是に於て庶人と雖も其相應の法を定め相應の禮和を以て子を育るに於ては富貴をたしむる事有るの陶芝を能く味ふ可し
「註」 又云ふ以上は斯の如く唯其常に道の道たる行ひを見聞きて自らに得たる者故に人に對しても是は天下の道也是は其理也杯と一言半口も語る事無し且求て行ふこと無し唯自らに天下を治ることを能くする耳

「細註」 其の旨宜しきしるしには神道は神道、儒道は儒道の一方を以て脩るでなければ見識が無ひ杯と瘦慢心や疲我慢は無き故に儒道に神佛の道を交へるが、いやじやの神道に儒道の道を交へるが、いやじやのとせ、穢き魂生は無きを見て知る可し

「註」 蓋し唐國の禮道を口に専ら述る事は儒者の役儀也

亦官服も禮讓の式も我國は我國の風有りて神代以來の禮を機き今 神君の御法に隨ひ天下の禮道を預るは以上の君也

「細註」 道を行ふは斯くの如くなる者なり故に心焉に無き者は聖人の書を讀むと雖も其行ひを勤め試みざれば國も時の風に隨ふて治る大道の大道たる活用の味ひ杯は知る可きいわれ無し、唯々行ひを勤むること大事なる可し

「註」 又云ふ行ひを勉る事は能くせざる者といへども唐國の古語を明らかに述る役儀の者の名を今我朝におゐては儒者と云ふ也、斯くの如く紛も無き定りの有るとも知らず高慢學者のはり合に乘せられて天下の道は儒者の預る所杯と思ふ者もあるはおかしき者也、然ども遊藝に至る迄今上みより扶持する事におゐては第一は其種の亡はん事をおしみてとなん、又世の藝事の好く有るに至つては天下を治むるの力と成らざる事無し中に言ひても聞きても天下を治むる事の力と成る長ある者は經書也故に博覽の者は大劔を帯るとも御答無きなり、然ば行ひを勉むる事能はざる者といへども博覽して是を以て多くの人を教諭するにおゐて士に順格たる者也

「細註」 然ども亦行を勤むる事を能するの書を博覽しながらも其身に其行ひを勉むる事を得ざる風情にては何そ人に其行を勤る事を得さしむる事のあらむや又其風情として我は聖人の言を博覽したれば百姓町人の樂をするも智慧の無き事なり杯思ひ或は其樂みを楽しみとして我は則ち君子なり杯思ふ者の有るも亦つな者なり

情々世俗の常を見るに分相應の道をも知らず唯一旦に大金を得る時は必ず其子孫滅亡の種と成るをも知らず夢中に金の勝に乗り傍若無人に慢心して貧賤下愚の佞ひに諂るを敬せらるゝと心得て俗に所謂自分官に我尊しと快はしけなる面持を見て諂ふ愚俗も陰言に嘲笑ふとも知らず博覽の人さへも金を持ぬ者なれば塵歟芥の如くに慢る事に至りては滿て忽に覆り未だ其身の存生の中に漸く其金を失ふて歎き困つて死る者擧て數ふべからず

〔細註〕 是等君子を育るの規矩無き中に育ち金と遊と酒とを結構なる者と思ふ時は必ず其身の敵たる事を知らざる者の業なり世俗を見て知る者ならば必々遊と酒と金とに深く執心せざるよふに子を育てべし

亦云ふ富も貧さも押なべて今にも亡ぶるの種と成りたるをも辨へず唯眼前の事に心を痛め困みて一日安きに居る事も無く所謂修羅道に生涯を困むこそ是非も無き事也是に九は文盲の者の常也故に讀ましむべきは經書也

然ども亦少し人に勝る事の有る時は忽ち慢心する杯を耳見聞して育ちし者若し博覽する時は傍若無人に慢心して天下丸呑の大言を吐き己が博覽に誇る如きの其己が拙きをも知らずして文盲の人若し經書の義理に叶ふたる行ひを勉むる事有りとも是を稱する者も無く心廣く體寬なる人にては文盲なれば小人と耳疎じ小々固く瘦我慢する風情の者にては博覽なれば大人と稱る者多し斯くの如くの僻人と成

りては分相應に叶へて行ふ者又險約を能くする者杯を吝嗇杯と嘲り我は金銀如き心に心を勞る者にあらず杯愈瘦我慢の爲に亡ぶる杯有るは皆覺も無くて慢心する中に育ちし者なるべし見て知るべし

又云ふ其樂みを樂みとする中に育ちし者四書五經と漸々讀書の數を重るに隨ひ或は詩歌連俳杯に氣を奪はれては酒宴遊興の種蒔なるべし其慢に狂者は立身出世は掌の中に有る杯思ひ或は士ひ奉公と變化して我身を亡う其類ひ亦多し

〔細註〕 是れ皆勝氣の張りたる育ちと慢心する風に育ちし者なす所なり物に少し心を用る人は皆知る所なり

又古しへの事は知らず

神君以後の以上におゐては所謂規則有りて育ち宜敷故博覽せずといへども道を知り其心焉に有る故博覽してもさまで穢く慢心せず

〔註細〕 是れ亦以上近く出る人は皆知る所なり

故に予が友人達の子達に其外の遊藝は先づ捨て、必ず慢無き師を選びて書を讀ましむべし若し慢學に乗る時は大事たる分相應の道を忘れて夢にも及び無き聖人歟將軍の氣と成り古學は廣し朱子學はせまふして大人の學にあらず杯と大言を吐く事に至りては甚だ危し、古學も朱子學も皆聖人の語なれば唯分相應の道を守る事を得る爲に讀む書なり、又分相應に道の行ひ安き法を極めて以て其行を得て然

る後ち聖人の語を味ふ時は其助と成る事鬼神の如し亦其心焉に無くして讀む時は聖人の教も先刻承知の事と思ひ杯空しく無益なるべし行を能く動むる人の教を受けてすら道は行ひ難き者なれば行の惡き人の教を受くる時は猶々行ひ勤め難し却て其惡きを稟る事多し又理を説く人だにも行ふ事能はざる事故其教へを受くる身分として唯其口の先の説を聞て是を行ふ事を得べきいはれの何ぞあらんや故に必ず師を選ぶべしと云也

又云ふ書は教へ方に爲すといへども然れども育柄悪くして心焉にあらざれば其是を行ふ心にはならざる者なるべし、又禮の大ひなる理を説く人は多しといへども禮を立る事を能く教ゆる者鮮し故に選び用ゆべき師は實に鮮し故に必ず先づ子を能く育てる事也

注意幽玄考中一四二頁七行ヨリ十行迄一四三頁四行五行十四行十五行一四四頁一行ヨリ五行迄十二行ヨリ十四行迄一四五頁一行一四六頁十二行ヨリ十四行迄一四七頁行ヨリ十一行迄ノ細字ハ本文ニ付キ訂正ス

第二卷 微味幽玄考終

第三卷 道德百話

一 性は天地の和なり

夫れ性の大ひなるや天地の和則ち性、性は則ち天地の和にして其儘なるものなり其土々々に依つて形氣も風も異なりと雖も北極星を見る國も南極星を見る國も天地の和する所以のもの一つにして性たる所以のもの亦同じ蓋し人は天地の和の別神靈の長たる者故天地の和の萬物の之き及ぼす如くの養道を行ふこそ人の人たる道とす中庸首章に所謂天の命之謂性率性之謂道修道之謂教此の性道教の三つの之の字をユクと訓して以て其幽玄を明らかにむるときは先萬物自ら生じ自ら育はるゝ所以を知るべし故に之の字は天の陽氣の萬性に之き和する所以を指すなり然らば性は則ち天地の和の別神靈なるものなり。夫れ斯の如く性は天地の和なるが故に萬國に通じて同一なりと雖ども其土々々の形氣の風に隨ひ能く味ひ學ばずんばあるべからず然らざれば幽玄必ず知り難かるべし、其所以は 天照皇大神も釋迦如來も父母なきはなし又天地の和にあらざるはなく唯日月の恵む所霜露の墜つる所人力の及ぶ所皆天地の和の一に性有り以て分つべきの所以無きなり性は理にして萬物育るの自然而已なるものな

り故に天地自然の理を能く味ふべきものなり

二 率性之謂道の之の字は分相應器量相應に

道を行ふべきことなり

性道教の之の字は天の陽氣の萬物に之を和する所以を指すなり又性は天地の和の別神靈なるが故に人猶萬物に之を育ふ所以のもの暫くも無きことなし以て其器の儘に能く導き能く育ふ事の須臾も離れずして其の育ひの之を施す中ちには愚者文盲と雖ども其相應は君臣の中には自ら義と賞すべき志發るなり其心焉に有る時に至りて猶分相應器量相應に廣さを施す時は己れと己れが道心に本づき漸々と心廣さに至て自然と敬讓發るなり親別順信の自ら發る所以も皆同じ是を以て率性之謂道の其の之の字は分相應器量相應に導き育ふ事の止まるを指すなり然らば道とは天下を治むるよりして不肖者の修身齊家に至る迄唯養ひ育ふ事を能くすべきなり

三 人心と道心

上智より下愚に至る迄て人心と道心とは相混じて有るものなり故に道心の人に對するときは下愚と雖ども道心自ら發り亦道心の微なる人に對するときは下愚は愈々道心微にして人心知らず人慾の私と

成て貪慾不義非道を行ふ事に至るべし危し〜士ひ以上に於ては守る事を能くする備へ有る故無道に移る事稀なり斯の如き身分の者すら多くの無道に襲はるゝに於ては知らず是に移る事有り故に君たる者は先づ己れを性の儘に備へて以て天下の民の爲めに其器々々に導ひ育ひ導くことに暫くも離れざる故に性の徳として其育ひに被る者自ら道心見はるゝなり其時に至て尙亦其の器量相應に職を昇進せしめ杯するに於ては禮道自ら立ちて言葉以て教へずと雖ども臣は君の君たるを尊び君は臣の臣たるを快び子は父の父たるを尊び夫婦昆弟朋友等斯の如くなるに至りては其己れが心より自ら生じたる禮なれば所謂誠自ら成りたる所以にして其用能く和するものなり

己が心の穢れたるを清くし常に道心に居らむと欲する者は必ず所謂人心と道心とを能く別け知るべし一言にして是を言へば不偏は道心にして偏よるは人心なり人心とは暑さとか寒さとか唯自分の身而已思ふ事を云ふ其狭き志故寒を愁ひて或は飲酒衣服を肆にし遂には其樂みを樂みとし其利を利とするに至り知らず識らずの間に奮り生じて微祿するに至るものなり又窮するを甚しく悲み利を得んと而已に戀々として吝嗇強慾専らと成り終には孽を招く等數ふべからず是れ皆人心の危きことを知らざるが故なり道心とは人の爲に己が身を思ふ暇無く暑き時は人も暑からんと思ひ寒き時は人も寒からんと思ひ我身を省み慎しみ人を愛し憐れむの志故自然と家も齊ひ慶も來るべし常に道心を行はんと志す者は

我知らず善き事而已に氣の付くもの也若し偶々惡き事に氣の付く事あるとも道の爲に氣を配り急ぐ敷遂に私の勝手を忘るゝもの也之に反し人心専らなる者は善事に心付すして我れ知らず人の爲にも我が爲にも惡事而已心付き偶々善事に氣の付く事あるとも人慾の私の爲に善事を遂には忘るゝもの也

四 道を行ふ者は稀なり

世の學者道を學ぶ書を読みたる者は多しと雖ども學ぶことを得たる者は鮮なし是れ心焉に無きが故なり偶々學ぶ事を得て是を行ふと雖ども節に中らざる事多くして空しく惑亂に漂ふて終に口の先きの學者に流るゝ者多し是れ道を行ふ心法の極め無きが故なり道を行はんとする者は其節に中ると中らざるを味ひ心法を極めざるべからず

五 道を行ふには安きよりすべし

道は人の履むべきものにして人慾の私無き者は容易なるものなり故に道を餘り六ヶ敷思ふべからず道を六ヶ敷思ひ過るときは行を勤る事を廢するに至るものなり故に余が道友達は其の相應に知り安き勤め安きことより漸々に學びて而して至善の地に至るべきなり、又學問を修め知ること有るとも我至れりと思ふべからず至れば至る程猶大なるは道なり然りと雖ども道は必ず廣遠に而已走るべからず必らず近きより漸々といひ進むべきなり最とも道は得難けれども入ることは安きものなり道を行はんと

する者は決して休むべからず今日は道を行ふて見よう哉否急多性だから道を行ふことは止めたの亦面白く無いから休みだの氣の揉めるから否だのと云ふ事あるべからず

六 道は偏るべからず

世の中に道たることは偏らざるものなれども道の明らかならざる人は偏て自己が學ぶ道の外は或は是を言ひ破らんとする者有るべし何を狭きの甚だしき道を學ぶは君に事へ親に孝を盡し一家一村を善くするにあり故に余が道友達は何れの道を學ぶとも君と親とに事る事をば忘るべからず捨つべからず必ず必ず偏らずして子々孫々迄も道に離るべからず中庸に道者不可須臾離也可離非道也との語を能く味ふ可し

七 忠 恕

忠恕とは天の陽氣の施すが如く已れに欲して願はざる所は人に施すこと無く受ざる所をば施さず天の陽氣の漸々に之き及ぼすと同じくせざるべからず夫れに非ざれば忠恕の道と謂ふことを得ず

八 道を學ぶに僻を去らずんばあるべからざる

ことあり八遠説に曰く

- 一 何事に限らず一つ二つ人に増る所有る者は自分の増れる所と他人の短所と比較するが故に自ら道遠し
- 二 人を助けたる者は自分程人を救ふた者は無きなどと思ふが故に道遠し
- 三 當て氣の有る者は自分の爲せし事があたる様な氣がして道遠し
- 四 固り性な者は偏固な故に道遠し
- 五 用心性な者は馬鹿用心の意味有り故に道遠し
- 六 怪力有る者は怪力の爲めに道遠し
- 七 己れは死んでも生きて居ても善いと斗り自分而已極め付て居る者は此れが爲めに道遠し
- 八 自分而已忠義を盡すつもり者は是れが爲めに道遠し

九 道は一なり

仁義禮智信の五常能く備れば則ち天下の道に達することを得べし智仁勇の三徳備れば以て天下の徳に達することを得べし五常も三徳も之を達する所以の道唯誠の一有る而已仁とは自分の私慾を去て人を恵み其の危きを救ひ其交あるや慈悲ある心にして義とは如何に富貴なるも常に節儉を守りて驕奢に

流れず財寶を積み天災地變に際して是に施し天に謝り地に踏し何事も能く忍耐へて無暗に諍はず謙を守り相讓るの心にして禮とは長を敬ひ幼を愛し上に居て侮らず下として猥さず能く秩序を保ち常に規律的になす心にして智とは諸文を學び故きを尋ねて新しきを知り能く其味を知り是非分明なる心にして信とは心正しく意誠にして非道を行はず至善の地に到りて動かす勤め行ひ而して其行ふ所其曰ふ所と符節を合するが如く一致する事にして勇とは五常を行ふに當り如何なる悲境に沈倫するも亂れずして偏せず倚らざるの心にして是を行ふには誠の一なり誠は真心と云ふことにして吁詐偽りの無きことを謂ふ此の真心こそ五常三徳を行ふ所以なりとす

一〇 善惡の標準

世の人皆善人なりとか惡人なりとか曰ふも善惡を能く分け知るもの少かるべし善惡は是れを明らかに分つこと甚だ六ヶ敷きものなり本來より謂ふときは善も惡も無きものにして無なるものなり善と謂ひ惡と謂ふも作爲の結果に依るものにして人によりて善惡の標準も異なるものなるべし例へば道を行はんと欲する者にして儒教を信じて其道傳播の爲め佛敎を誹謗する時は儒敎に探りては善なりと雖も佛敎に於ては惡なるべし然らば如何なる者が善にして如何なる者が惡なるや此理明解し難き者なり釋迦以來の説法に依れば涅槃界に入る者は善にして然らざる者は惡ならん孔子の所説に依れば至善の地

に止まる者は善にして之に反する者は悪なり是れ善の極地より見たる者にして惡の極地より見る時は石川五右衛門の如きは惡にして其他は善なりと謂ふべし斯く兩極端より善惡を分つべき者に非ずして必らず分り安き標準を求むべきものなりと信ず善きも惡きも人の行ひによりて定めるものなれば善惡の標準極て見安く道友一同の利益を計り道友と共に其樂みを樂み共に其患を患ひ過福吉凶是非得失共にすべきを以て善なりとなし之に反して他人の事を顧みず自分而已樂み自分而已其利を貪らんと欲する者は惡なりと定め如何なるはり合にも惡きに移らずと心掛くべきなり善惡を分つに餘り六ヶ敷思ふべからず其所以は餘り六ヶ敷思ひ過ぎて的無しになるは行ひを善くする所以にあらざるなり理論は如何に幽邃高尚なるも是を行ふと能はざれば善行と謂ふとは能はざるものなり善惡共に行ひの上に於て分るべきものなれば常に道心をして一身の主となし良き事而已を行ふ事を心掛ざるべからず

一一 禮は分相應に準て之を行ふべきものなり

禮は分相應と云ふことを知らざるべからず分相應を知りて其分に應じて禮を行ふにあらざれば禮の本體を失ふに至るべし、蓋し禮とは分相應の敬讓規矩の外形的表標なりと雖とも誠心誠意内心より之を行ふに非ざれば虚禮となるものなり虚禮なれば何を以て自然に感通することを得んや

禮は行爲の外形的表標なるが故に人に採りては最とも必要なりとするも其身分に相應せざる行ひを

なすが如きは禮にあらざるなり例へば大夫にして士の禮を行ひ士にして大夫の禮を行ふときは禮にあらざるなり故に士たる者は士の禮を行ひ大夫は大夫の禮を行ひ百姓は百姓相應の禮を行はざるべからずと雖とも同じ百姓にても其身代の大小によりて多少方法を異にせざるべからず其分相應を知らずして禮を行ひ分に不相應の服を着し又分に不相應の言葉を使ひ又或は分に不相應の佳食を爲すは甚だ見苦しさものなり敬讓の意をも分に應せぬ言葉を使ひ分に應せぬ行ひをなしたるが故に却て人の感情を害し人に悪くまれ遂には孽を招くに至るべし又分相應を知らずして其の分に過ぐるときは驕奢に流れ家計の生活難を惹起すに至るべし故に過きたるは及はざるに如かずと云ふ如く禮は其分を過ぎて驕奢に流れんよりは寧ろ其分に及ばずして儉なるに如かざるなり和合は一村一家は論を俟たず一郡一國と雖ども和を以てせざれば其の隆盛は得て望むべからざるなり和合を求むる禮にあらざれば何を以てせんや禮を以て其分に應せざれば何を以て之を望むことを得んや和は天下の大本なると雖ども禮を以て其行爲を節するに非ざれば何を以て之を行ふべきや故に我道友達は能く分相應を知り禮の本體を味ひ考へ行ふべきものなり分相應と云ふことは天子より庶人に至る迄其身分其地位に準て定むべきものにして其の分に應せざるは禮に非ずして却て災の基をなすものと知るべし

一二 禮を立つべし

己に克て禮に復り而して以て始めて仁に達することを得べし克己は則ち自分の利慾に克て往くことを謂ふなり自分の利慾而已を以てするときには忽ち衝突を來すものなり此の度合をつけるものは即ち禮なり此の如く禮は大なる効力を有するものなりと雖ども禮を立つる者少なし故に余が道友達は必ず禮を立て之を行ふべきものなり

一三 分相應の規矩を守り私慾を全ふすべからず

情々世の有様を見るに分相應の道をも知らず唯一旦に大金を得る時は必ず子孫滅亡するの種と成るものなりと雖ども之を知らずして夢中に金の勝に乗り傍若無人に慢心して貧賤下愚佞ひに被る諂るゝを敬せらるゝと心得て俗に所謂自分官に我れ尊しと快ぶ者有り又諂ふ愚俗も陰言に嘲り笑ふとも心付かず妄に慢心する事に至ては滿れば忽に覆るものにして其身の存生中に漸々と其金を消費して家身をも滅亡するに至るべし其の慢に狂する者は立身出世は掌の中に有りと思ひ富家の主人も奉公人と變化するものなりとす

一四 分相應を知らざれば道を行ひ難し

人分相應を知らざれば如何程學ぶとも慢學に陥るものなり傍若無人に慢心して一切人を知る事も得ざることあり又聖人君子の如く道を行ひ勤め度思ふは善しと雖ども其の分相應に氣の附かぬ故に自分

官に君子氣と成る時は我知らず奢りに進み其驕慢の勢ひに乗じて或は父母の分相應を守り質朴なる行ひをなすを見て之を吝嗇なりと思ひ遂に父子の間に争を生ずることあるべし是皆分相應を知らざるが故なり

一五 分相應の緒を知らんと欲する者は中庸に

志すべし

先づ己が心を磨きながら行ひを勤め試し以て人を養ふ事を始め遠く慮ることを能く得るときは世の人其身分と器量の異なるに依て其の常に心の有る所も亦同じからざる所以の悉く知れるなり是を知る時は心の有る所の異なるものなれば變化も亦異なるの幽玄をを明らか知ることを要す是を知れば分相應器量相應に心の有る所相應に育ひ導く所以悉く異なると雖ども理は一つたる幽玄を明らか知れるなり是を知ることに至ては一ツ以て萬に通すべき所以を能く知り得るなり是に至て漸く中庸に志すことに至るべし是亦分相應の精一を學ぶの緒なり

一六 己れ節儉して人に損毛掛くべからず

自分は如何に粗食し又三度の食事は二度に減じ着物は如何に破れたる物を着るとも他人よりの借金

は之を返し小作米は其期日に納め決して壹厘と雖ども損毛を掛くるべからず

節儉は自己の行を檢束し放縱僭濫に流れざる様にするに於て財用を節するも時間を儉するも皆然らざるはなし人節儉すれば金錢を貯蓄することを得べく又仕事の手廻良くなるべし儉すれば萬事此れに由りて井然たる秩序を整頓し室内の諸品盡く其所を得て清麗雅知あるが如くなるべし故人常に是を見るときは其精神誠に清かるべし然るに若し是に反して金錢を節せず時間を儉せざるときは倨傲尊大にして他人を賤視し又長者を輕侮し他人を罵倒嘲笑するに至るものなり而して自己は勞働せずして消費し時間是不規則となり家内の和合得て望むべからず其の甚しきに至りては他人の物に目を掛けらるるべし危しし是皆儉せざるより生ずるものなりとす他人の物を盗むも又人を欺きて金錢を詐取するも自分の費すべき金錢無きが故なり是れ皆奢りの爲す災なりとす人足ることを知らざれば奢りに限りは無かりけり故人たる者は節儉を守り奢りに耽けるべからず勤儉は人をして經濟上の獨立を得せしむるのみならず道徳上の行ひを完全ならしむるものなり即ち勤儉は心身及び社交の上に於て不羈獨立の志氣を有する良民を造り得べきものにして常に財を貯へ居る故に不事の災難に遭遇するも後患の憂無きに至るものなり

農業を爲すにも商業を營むも必要缺くべからざるものは資本なり而して此の資本なるものは天より

降るものにあらす地より湧くものにあらす悉く皆人力より之を得るものなり如何に勞働し心身を勞するも勤儉蓄積の結果を俟つに非ざれば他に奇策妙計あらんや如何に莫大の利益を得る者と雖ども勤にして儉ならざれば何を以て其永きを保つを得んや他人の物を取り詐偽をなすも皆消費するに金錢が不足なるが故なり此等の類は富四海に冠たるも常に足らざる氣がするものなり輕薄にして粉飾を事とし驕奢日々盛んなるに於ては資本は缺乏し何事も爲すこと能はざるに至るべし故人にして人たるの道を行はんと欲すれば百弊の根本たる奢侈の念を捨てざるべからず去らざるべからず

一七 眞の節儉は金錢而已に非ず時間も惜むものなり

米を作るも麥を作るにも最も大切なるは時なり植時蒔時の期を誤れば害蟲の患多く取入の時期を誤れば米穀の品質を粗悪にし且つ藁の質を害し粃の地上に落るの憂ありとす故に之等の時期を誤らざる様に常々時を惜み明日ありと云ふことなく毎日朝早く起き草を刈りて後朝飯を食して田畑の耕作に従事し夜の長きときは夜仕事を爲し寸陰を惜みて其業務に従はざるべからず時を龜末にする習慣は野蠻人愚人の爲す所にして人たる者の爲すべきものにあらざるなり故に農民は一刻も油斷せず時を大切にし分相應器量相應に其業務を勵み人と約して違ふこと無く又無益の時間を他人に費やさしむるが如きは實に甚しき不深切の行ひと云はざるべからず夜遊び三昧線長唄等に耽けるは時を惜まざるものに

して此れが爲めに夜深し朝寝を爲すが如きは親先祖を蔑にせるものと謂はざるべからず、又時ははり合である財寶を積み仁徳の果實を脩むるも時を節用せざれば之を求むることを得ざるべし故に金錢而已を節するは眞の節儉とは謂ふべからず

眞の節儉の美德を養成せんと欲せば金錢を節すると同時に時を節用せざるべからず人の一生も草木の植時蒔時の有ると同じく學問を爲すべき時あり勞働すべき時あり身體を保養すべき時ありと雖ども時を節することを知らざれば其時期を得ることなく空しく貴重時間を失ふに至るべし最とも能く時を利用し濫費を慎しむ人こそ眞の節儉者と云ふことを得べし

一八 道に達しても一度は是非がない二度はしかたが

無いを恐るべきなり

道を行はんと心掛くる者は必ず是を行ふべきものなり故に一度道に違ひたるときは是を取返す事は六ヶ敷ものなり例へば朋友と交り信を失せんか十度信實の行ひを爲すと雖ども人常は是に疑を抱くものなり彼の男は危しとや何の人は先日如きことなるものなれば油断すべからずと囁するものなれば人道を全ふせんと欲せば常に道に違はざる様能く意を用ゆべきなり若し道に背きたる行ひを爲しても

一度位は是非無し二度位はしかたが無いと云ふときは遂には習慣となりて道を行ふべからざるに至らん故に我道友達は能く意を用ひ些少にても道に違ふことあるべからず

一九 職業二重を爲すべからず

職業は必ず一を守り決して二つの職業を爲すべからず職業にして二つなるときは一方に而已力を盡すと能はざるべし例へば農業と商業とを兼るときは農事に氣を奪はれ今は朝瓜の種の蒔時、茄子の苗の植時なりとするが故に商業は空抜けとなり商品も問屋より買求むること少なきが故に賣品少なくなり客人も自然と減少するに至るべし又是に反して商業を爲さんと欲しては今は梅雨だから買置し米の賣時だ今は出来秋だから米の買時杯と騒ぎ廻るときは萬事不手廻りとなり田畑荒れ果て人が蒔付植付を爲す頃も自分は是と同じく爲すことを得ず又收穫の時期を失るときは損失あるものにして人並の收穫は得ざるべし斯の如く商業も意の如く行かず農業も失敗するが故に遂には祖先傳來の財寶をも失ふに至るものなり是等の人は金錢を得んと欲して頻りに氣を揉み心を勞し身體を勞すと雖ども何の効なきのみならず却て損失を招くものなり諺に曰はすや二兎を逐ふものは一兎を得ずと如何に力を盡して二兎を逐ふも是を獲ること能はざるべし宜しく一兎を逐ふて之を獲べきなり職業を爲すにも商業と農業とを兼るが如きは失敗の基なれば必ず之を爲すべからず

二〇 他人の子も我子と均しく是を愛すべきなり

我子を他人の子より可愛く思ふは普通人の常なりと雖ども此の如くしては忠恕の道に非ざるなり他人の子と雖ども其子の親たる者は必ず可愛く思ふものなり即ち他人も我身も其の子を可愛く思ふは同じかるべしと其の心と思ひやるときは他人の子と雖ども決して我子と別べき所以なし人に忠恕の情厚きと薄きとは子を愛することに至りて明らかに之を見分ることを得るものなれば我道友達に常に心を用ひて此の道を守り他人の子と雖ども是を愛すること必ず我子の如くして決して彼我の間に區別をなして何の子は鼻がたれて居る彼の子は虱が付て居ると謂つて是を斥けること勿れ若し斯の如き子供等遊びに来たるときは是を可愛く思ひ是を除き去る様にせざるべからず

二一 義務を盡すべきなり

人は義務を盡し終りたるるときほど樂しきものは無かるべし親には親の義務あり、子には子たるの義務あり兄弟姉妹一つとして義務なきものならず、故に皆人の人たる義務を盡したるものは男子たると女子たるとを問はず己れの心に毫も疚しき所無く天にも地にも愧づる所無きが故に、如何に人より不義非道なる待遇を受くるも又た其の身如何なる艱難に遭遇するも決して是れを苦にすべきにあらざ

故に樂みを求めんと欲するものは力を竭して義務を盡すにあり、植時蒔時の時期を失するは農民たる義務を盡したるものにあらざるなり、人と約して其の約束通に行はざるは其の義務を盡したるものと謂ふべからず

二二 百里行くにも一足宛てなければ行かれぬ事

百里の道を歩むにも富士山に登るにも皆一步宛歩み行くものなり一步宛歩まずして直に頂上に至り遠き所に至るは人に羽根でも生せざれば能はざるものなり東照神君の御歌に

怠らず行かば千里の果も見ん
牛の歩みのいざおそくとも

と有る通りなれば人の道を行ふにも遠きに行き高きに登るが如く必らず一步宛よりすべきものなり如何に博覧の士と雖ども直ちに聖人や君子と成るものに非ず必ず小徳を積み而して後に初めて大徳の人となるものなり遠き路を歩むも人の道を行ふも其理は同じきものなれば常に能く心を用ひ小徳を積んで而して大徳の人となる様常に心掛くべきものとす

二三 安價なる爲めに必要無き品を購ふこと勿れ

何物と雖ども必要無き品は如何に安價なると雖ども決して是を買求むること勿れ何も彼も安きが故

に今は必要なけれども何時か入用が有るだろう杯と云ふて買ひ置は大に不經濟の極と謂はざるべからず何も必要なきに種々の物品を買ひ求むるは俗に所謂安物買の錢失ひと謂ふものにして金錢の無きにも拘らず頻りに之を買入れ途には甚しく金錢を使ひ盡すに至るは實際上に於て高價なるに至るものなれば物は必要なときに求め必要無きときは決して之を求むること勿れ何時か必要な時が有るものなりと云ふて買求むる如くのよろう主義は極めて悪しきものなれば常々能く注意して此の主義を除き去らざるべからず

二四 自分が爲す能はざる事を以て他人に爲さしむること勿れ

農民は種々の仕事を爲すも自分の手にして爲し能はざることありよし爲し能はざるにわらず爲すに困難なるものあり或は大ひに勢力を要することあり又は人々の嫌ふべきものあり此等の仕事は何人も爲すことを好まざるものなれば自分が自ら進んで之を爲すべし自分が爲すことを好まざる仕事を人に爲さしむるは大に悪し斯くの如きは人を使ふの道に非ず故に如何なる仕事も自分が爲すべきものと常々能く心掛け必ず自分が爲し能はざる仕事を他人に爲さしむること勿れ自分の爲し能はざる事を人に爲さしめて而して之を快しと思ふ人は人の困難し又は苦痛し不幸有るを見て樂しみとするに至る可し

二五 忿るときは事を爲すべからず

人は忿憤し安きものなり物に觸れ折に觸れ忿ることあり憤ることあるべし是れ人に探りて免かるべからざるものなり然らば其の忿るとき憤るときには決して事を爲すべからず忿りて事を爲すときは多くは粗暴に流れ憤りて事に當るときは多くは過誤に陥るものなり人一度事を爲し言葉を發するときには容易に是を取消すことを得ざるものなれば忿憤の時に爲したる事に付ては必ず後悔するに至るものなり蓋し人忿憤するときはその精神に異情を來すものなれば此の時に當り事を爲さんと欲するものは十度我身を省み慎んで事を行ふべきものなり昔より忿憤して事を爲し敗れを取りたる例枚擧するに遑わらず猛虎の勢ひを以て敵軍を敗りたる杯云ふも忿りて事を爲すにわらず深く考へ慮りて而して一軍能く和して其勢に乗ずることを指すものにして忿りに乗じて獨斷を以て野猪的に軍を進むるには敵の弱きものに當るときは其勢に恐れて逃亡することあるやも知れずと雖ども良將に遭ふときは必ず敗を取ること疑なし我道友達は武士に非ざれば戦を爲すには非ざれども農業を爲すにも家内を治むるにも我身を脩むるにも忿憤は大敵なりと思ふべし若し誤りて忿憤するときには決して事を爲すべからず

二六 何事もラシクすることを要す

男は男らしく女は女らしく親は親らしく子は子らしく兄は兄らしく弟は弟らしくせざるべからず男

にして何の様だ女にしてさまを見ろと云はるゝは恥かしきことなりとす親子兄弟夫婦に於ても亦然り宜しくらしくすべしらしくすることは人の當に勉むべきことなりとす、らしくするには各々其の守るべきの道あり親の守るべきものは慈にして子の守るべきものは孝にして兄弟の守るべきものは友にして夫婦の守るべきものは和順にして他人と交るに於て守るべきものは信義なり此の道を守り行ふに非ざればらしくすること能はざるべし故に我道友達は常に能く心を用ひて此の道を守りらしく勉むべきなり

二七 其獨りを慎むべし

人苟しくも道に離れざらんと欲せば我身を省み戒め慎み恐れ懼れて以て人の見ざる所人の聞かざる所をば猶能く人慾の私の萌も無き様に常に能く其獨を慎むべし、其獨を慎むとは一言にして之を言へば人慾の私の萌しを能く去ることなり

二八 人慾の私しを去るに非ざれば千萬卷の書を

讀むとも人を導くこと能はざるべし

凡そ人たる者は人慾の私は去り難きものなり故に道を行はんと欲せば人慾の私の萌を能く知りて其

の機の中に是を去る事を能くすべし私盛と成ては是を去ること能はざるものなれば其の盛んとならざる前に能く是を去ることを勉むべし、人慾の私を去る事を知らざれば千萬卷の書を讀むとも亦千萬言の教へを聞くとも鶯を鴉と見たるに均しく何ぞ人を導く事を得んや是皆私慢の爲す所なり故に必ず私しを去ることを能くすべし

二九 奉公人を使ふにも恩愛を主とすべし

庶人の多くは唯其場限りの事に深く心を入れて奉公人を使ふにも聊か出したる給金の割に合ふの合ぬのと細かに胸算用計りして居る故に唯過ち有る事計りに氣を配り其過ちを咎る事が常の僻と成りて有るなり爰に於て奉公人も亦主人を恨む事を常とし仕事を未熟にするが僻になるを以て互ひに悪しき事而已惡み合ふに至るべし又は半途にして騒動するに至るべし故に奉公人を使ふにも常に恩愛の情を以てすべし

三〇 子を育つるにも法則を守るべし

庶民に於ては子を育つるの規則なきものなり故に唯眼前の事に而已氣をいらち或は氣を揉み或は愛に溺れ抔して慈に止る事を知らず其中に育つたる子は其生長するに随つて善からざる事而已多し爰に於て父母亦其悪しきを呵つて其意志惡き者にして自ら親子の間に於ても破れと成る者少なしとせず故

に子を養育せんと欲する者は必ず分相應の法則を定め以て子孫を養育すべきなり

三二 子を養育するに付ては怪力話などを決して爲すべからず

小兒を養育するに昔話や又は種々の物語をなすに當りても決して幽霊とか化物とか云ふて子女に畏怖心を起さしむることあるべからず子に添乳して寝さしむるに早く寝よ泣くと化物が出る杯と曰ふて小兒に畏怖心を生せしめ寝に付かしむるは往々有勝のことなりと雖ども此の如きことは大に悪し是れが爲めに畏怖心が常の心となる而已ならず健康をも害するに至るものなり故に我道友達は決して怪力の物語や幽霊や化物の話杯をして子女に畏怖心を懐かしむること無く忠臣孝子の事蹟杯を面白く物語して聞かすを善しとす

三三 子供が人を悪く云ふときは知らぬ顔して居るべし

子供人の悪き事の咄しをする時は家内中是れに答へず知らぬ顔して居るを善しとす若し其咄を尤もに聞き又は是を喜んで聞くときは其の子たる者人の悪しき事而已に意を注ぎ遂には其の僻が習慣とな

り成長の後穴堀となるものなり

三三 家の内に金銭杯取散すべからず

金銭は人の欲する所のものなれば嚴重に是れを纏め置き決して是れを取り散すべからず何となれば是が爲めに小兒等は是を持ち遊び口中にし喉に入れて生命を危くせし例少なしとせざる而已ならず是を持出して頻りに買食をなし其僻が習慣となり遂には父母が纏め置き金銭をも其知らざる間に持出すに至り其甚しきに至りては他人の物をも取るに至るものなり

三四 利口振るべからず

蓋し俗人の常に唱ふる事四つあり曰智、曰才、曰利口、曰愚混是なり夫れ智は徳を得るものなり才は世の用を爲すものにして能く事を辨へるなり故に才と智とは相混じて有りたきものなり亦俗に云ふ利口は頓才口の先に走て唯利辨を貪り己が悪きをも善きに言ひ繕ひ杯するものなり故に第一には其身の徳を失ひ或は脩身齊家の爲めは災ひ有りと益無故に脩身齊家を志す者は必ず利口を爲すべからず必ず人は是を忌み嫌ふべなものとする利口振るは道に離れたるが故なり又心に慢あるが爲めなり故に道に離れず心に慢なきときは決して利口振るが如きこと無きなり

三五 子を養育するには仁に近きを專一とすべし

子を養育するには必ず先づ大ひなる法を極めて以て是を移すべきものなり即ち親の心の子に移り而して其の子の氣質の種と成るの本元なれば其移す方法に依て其行ひの善惡邪正を顯はすの本元となるものなれば才と智とは相混じたるものなれども生質聖人にあらざるもの、才進む時は必ず智微なるものなり故に必ず先づ智を元として才は必ず末として育つるを宜しとすべし、而して才より智を勝たしむるには必ず先づ寛柔を以てし俗に云ふ馬鹿の様に育つべし然るに於ては才に尅る、事無ければ智の微なる事無かるべし、愚混の生質なる者杯を利口を以て育つるに於ては或は物に浮かれ杯して俗に云ふ輕はづみをして家身をも亡す者揚て數ふべからず故に器量無き者は猶ほ更利口を必ず々々其身の敵と心得べし故に子を育つる者は愚俗の目には馬鹿と見ゆるとも仁に近きを宜しとすべし是則ち家名相續の原なるべし

三六 松の木に譬へて子を育つる方法を論ず

子の幼少のときは是を松に譬ふれば始めて枝の出たる頃なり是れ亦枝の善さも悪さも土の換様の上手と下手に依て枝振の善し悪しも出来るものなり人も亦是の如く幼少の時の氣質の養ひ善ければ其子も善き事を辨へる習慣となりて善良なる人となるものなり若し又是に反して其惡しき事而已を見聞すれば其の思ひ付く事皆惡しく遂には其惡き事が習慣となりて悪人となるべし

三七 子の生長するに隨て道の觀念を知らしむべし

小兒の生長して是非辨別心有る年齢に達すれば道たる所以を能く知らしむべし若し道たることを知らしめずして唯其儘に育つるに於ては頓才有る者杯は其の壯年に至りて公事訴訟を事とし或は分相應にあらざる事杯を爲し遂には不孝不義非義非道を行ふ事に至るものなり

三八 愚俗を養ふ幽玄を能く味ふべきなり

賢者少く愚俗多きは世の習なり而して愚俗なる者は道を行ふことも知らず常に人慾の私盛んにして人を踏み付けても自分而已良き事を望むものなれば人を教諭せんと欲する者は先づ愚俗を導くことを心掛けずんばあるべからず愚俗を導くには道理を教ゆるに言葉を以て教諭せずして意を以て是れを移すに於ては如何なる愚俗の者と雖ども其心に自ら道理生じて俗に云ふ入れ魂と異なるに至るものなり

拙き者に言葉を以て教諭する時は其教諭に被りたるもの道理を唯口の先きに演ぶる事は得れども勤め行ふ事を得ざるものなり又言葉を以て教へずして唯意の誠の徳を移すに於ては其誠を移されたるもの口に演る事は能くせずと雖ども其の行ひを勤むる事を能くするに至るべし故に愚俗を教諭して直を行はしめんと欲せば道理を口にて演べずして誠心誠意實意を以て其の道理を移すべきものとす

三九 愚俗の道を學ぶ事は碁を習ふと同じ味ひある者なり

夫れ碁を習ふに法あり其法と云ふは碁所に於て先づ家々の定石を能く知り次にはあらゆる碁經杯を能く穿鑿して以て自から圍む石の死と活とを知り自ら勝負を知る或は定石と名家の打たる石立杯をてらし合せて習ふ也定石と碁經に著はしたる筋々の吉きと悪しき能知て以て碁を圍む事を得たる者則段に入ると云へり其習ひの吉き者は若し人と碁を圍むとも更に勝んと欲する事無く唯打つ石の筋々の吉し悪しを明らかに知る事ばかり心に懸けて打つと斯の如き人は盤數の重るに隨て極めて上達すると云へり

或は人眞似或は戯に碁を打つ者は習ひ是に反して法則杯には心付も無く先づ四ツ目殺しを覺へてより未だ石の死活も知らざる中に唯勝たき志有り或は一目二目を目懸て是を取る中に人に地面を取られて自分の取る場の無くなる有り又一目二目を惜みて居る中に自分の取る場所の無くなるも有りなべて是等の人石の死活を覺へる時は愈勝負に氣を入れるなり

斯の如き志の者は其行所窮り有て其窮りの外は幾百盤數氣力を練るとも半石も上るべからず其試し世上に見れて有るなり然れども是等の人も其勝たき志を捨て定石を能く習ひ得れば其の器量相應に忽ち四五石も上るべし爰に至て限る事亦前に同じ

然れども猶上達せむと欲するものは碁經に記し有る所の筋々の吉し悪しを悉く知るに於ては其器量に應じて初段の人に二つ三つも置けば打たる、迄には上るべし又習ひ初めの中に人の石を皆取りにせむとして却て自分の石を皆取らるゝ事をもかへり見ず兎角取れさうな石が目につき或は初め覺へたる小刀細工が心に浮かび知らず守りの道を失ふ故に半石も上る事無しと云へり

斯の如く悪しき僻の染込し者は思ひ切て半石も上らずもよしと了簡をすえ兎角人の石は取らぬと志を定め唯定石と碁經の筋々ばかり心懸て打つ事一百盤數すれば自ら小刀細工の僻も抜け客齋強慾謀計の毒氣も失せて自ら心法備はり器量相應には極めて上達する者なり是碁所に試し有る事なりと云へり不肖の中に育ちしもの、修身齊家を達るも定石知らぬ碁打と同じく闇雲得利氣になつて夢見にも客齋強慾専らとして先づ得利たりと思ひ嬉しげに調べて見れば唯とり廣けたる計りの事にて其身代は蟬のぬけがらの如くなり力落して青吐息をつくも有り猶亦下愚の甚しきは人の急に富たるを見て是れこそ得利商賣と思ひ或は相場の高下に氣を入る有り或は器量に餘る仕込して其身代はぬけがらとなりたるにも氣が付かず唯得利氣ばかりして夢中になつて行盡し分散配當するも有り其身となつても目も醒す益々謀計するも有り是等碁打に譬ふれば人の石を取る事ばかりに氣を入れて居て却て自分の石を皆取られても闇雲人の石を取らむとして打終つて見れば盤中皆人の地面と成りたるに齊しく行盡したる跡は

得利けの手段も種も無くなれば又世の有様を見て知るべし

又俗に所謂汎蟲魂生の者は譬へば碁を圍むに一目二目が目に附き是を取る中に人に地面を取られて自分の取る場所の無くなりし如く端錢のもうけも嬉しく思ひ端錢も惜しく思ひ杯無端淋しき事に氣を揉で暮す中に其の蓄積なる心家内の者に押し移りて家内中皆けちくする事に至ては或は食氣飲氣に穢身が入り或は捨魂或は日々の喧嘩口論世に住甲斐もなき身となりぬ

是等碁打に譬ふれば自分の打たる石が邪魔して目の持れぬと同じく息吹懸て大切にしたる身代も年々歳々瘦枯れて其志を改めても碁なれば一盤打終りたるが如く身は老悖となつてせむすべ無き族世に多きを見て知るべし其子孫の身の果は無宿と成つてさまよい歩き非人乞食に陥る有り或は獄卒に沈み呵責の困みするも有り或は海川に身を投じ或は縊死する事にも至る等皆けちなる魂性の漸々に募りたる者なり己れが子孫に其種を蒔く者悉く多し世間を見て必我身を省みるべし實に憐れなる事なり然らば心に法も無くて其場限りの事毎に迷ふは實に危き業なり故に身代を大切に思はゞ脩身齊家と云ふの先づ眼前の事に能く離れけちなる根性を打捨當前の事は損益勝負に拘らず必ず先づ孝行を専らとして身を能く脩め守る事を心の法として勤め行ふに於ては家内も穩にして能く和し自ら心の揃ふたる徳には金銀財寶の満る事に至るべし然るに於ては右等の憐れなる事には陥る事無かるべし兎角財寶は溜る

を良しとす工夫して溜るは甚だ危し

世上には是等の事を心得有て慾深くして何に哉せむ一旦の勝利より末の利運身の行く果を大事なりと思ひ分相應の心法を極め守りて身も家も脩り身代も展りたるも有れども其心法少しにても求むる所有れば自然の理に差ふ所有る故其氣風相應に限り有て丘目にて其限りになりたると思ふ間も無く墮重り忽ち微祿するも世上に顯はれてあるなり又親を思ふの一と筋より身能脩りたる徳にて身代自ら展びたるものゝ子亦是を守て居て讓ること急ならずと云へども心法三世の後に彌らざる者は其必限り有ること團碁の半石も上らざるが如し且其三世に至ては主人器量有て志善しと雖ども然れども自ら入用雜費の多き家となり除々と貧乏するも世上見て有るなり斯く成りては主人もし少しにても吝嗇の種有ては是ではならぬと強慾心發り忽ち亡るも亦世に多きを見て知るべし尤も損益は時の變化にして盛衰は有れども家格を亡ふ迄には陥らざるの法則極めて有るなり

其法則を立るには世に變化盛衰の理を能く知て以て必先づ孝行を専らとし聊も私し無く朝夕箸の上下にも親先祖を忘れず且三世の後に彌らざる事無く能く勤め能く守るなり是を見聞て育ちし者は心焉に有る故少しの教へにも行ひを勤むる力を得て三世の後を見渡すの心廣きに至り則奢りの生する事鮮なく自ら家名有ち安し君子は願を常とす俗は願ることを能せず故に道を守るの親類朋友數多有れば碁に

丘目八目と云へるが如く器量相應に危きを通れ安し然りと雖ども一寸先きも見へぬ丘目は甚だ危し又道も知らずして知たるつもりは猶々危し故に心焉に有るに於ては都て教へずと雖とも必ず道に近づくものなり又心焉に有らざれば見れども見へず聴ども聞へず譬へば碁の習ひ悪き者の如く聊の物が目をさへぎり或は吝嗇に迷ひ込償惜と我慢が心に浮かび人の氣を破り愛に溺れて心腐り道を學ぶ暇とては煙草呑む間もあらずして終に身は難澁に陥るべし

世俗無益の考へ無益の困みする者多し譬へば碁に於ても先き見へざれば活の無き石杯は其石限り二三手の外見へぬ風情の者は百日考るとも活る事あるべからず

又二三手も先き見へねば詰る事ならぬ將碁杯二三手の外見へぬ風情として百日考ふるとも其將碁詰むべからず、盤の上に石を置き駒を並べて見ることにすら斯くの如し況んや修身齊家の道に於て由所も無く心法も無く師傳も無く且一寸先きも見へずして何ぞ全たきを得んや

四〇 繕ひ學者に陥るべからず

頓才ある者は其辯を舌先に振ふが故に人多くは是を以て才子なり利口なりと心得過て其才子を譽むる事に至ては遂に繕ひ學者に陥り聖人の言も唯口に知て心に知らざるに至るべし慎しむべし

四一 畫ける幽靈

暴若無人に慢心して其の盛なるに於ては五人か十人の家内をも脩むることを得ざるものなり斯る風情として其の説く所を聞けば孟子は其言葉に弊あるが故に信すべからず朱子は其所説狹隘なるが故に信すべからず程子の所説亦然りなど執り止めも無き廣言を吐くものなり斯の如き輩は自分の家内を脩むることを得ざる而已ならず自己の身をも脩むること能はざるものにして畫ける幽靈の様なる學者となるものなり

四二 偏るときは激するものなり

我國は古より勇猛の國にして人の氣風押なべて義強し然れども其勇猛の氣質の者若し偏執するときは激する事あるものなり故に人に及ばざる事有れば則激して却て其の勇氣を失ひ臆病發り物を學ぶ事だにも退屈すること有るべし又或は其の臆病の疑魂愈々激する事の甚しきときは事に觸れて夏の虫の飛で火に入ると齊しき行ひをなすもの少なからず是等偏るより發る事にして拙き事なるべし故に能く心を用ひ身を正しくし意を誠にして偏らざる様勉め行はずんばあるべからず若し激すること退屈することあるときは必ず偏るものなれば我身を省み是を改むべきものなり

四三 慢心なき師を擇ぶべし

余が道友は其子を教導するが爲めには必ず慢心無き師を擇び書を讀ましむべし若し慢學になるとき

は大事たる分相應の規矩を忘れて夢にも及び無き高位高官の氣と成り古學は廣し朱子學は狹し大人の學に非ずなど、大言を吐く事に至るべし古學も朱子道も皆聖人の語なれば唯分相應の道を守る事を得る爲めに讀む書なり亦分相應に道の行ひ安き法を極めて以て其行ひを得て後聖人の語を能く味ふ時は其の助けと成ること多かるべし

行ひを能く勤る人の教へを受けてすら道は行ひ難きものなれば行ひの惡き人の教を受くるときは何ぞ行ふことを得んや行ひ勤め難き而已ならず却て其の惡しきを稟くる事多かるべし亦理を説く人にだも行ふ能はざるに教を受くる身分として唯口の先の説を聞いて是を行ふ事を得べき所以無し故に必ず先づ子を能く養育せんと欲する者は善き師を選ぶべきことなり若し師にして慢學なるときは其教へを受けし者は皆慢學に流れ十が一つにも及ばざる癖にて有りながら急ち勝るものなる者と慢心して其師を輕するに至る是れ師恩の尊き事を知らざるが故なり斯の如く慢心するが如き事有るときは若し其家に育ちし者長するに及んで博覽する時は暴若無人に慢心して天下九呑の大言を吐き己が博覽に誇り自己の拙きをも知らずして文盲の人若し經書の義理に叶ひたる行ひを勉むること有るとも是を稱る者無く心廣く體寛なる人にては文盲なれば小人と而已踈り又瘦我慢する風情の者にては博覽すれば大人と稱ふる者多し斯くの如く僻人と成りては分相應に叶ふとも儉約を守る者をば吝嗇と嘲り或は金銀如きに

必らず勞る者にあらざりて坏愈々瘦我慢の爲めに亡る者有るは皆覺へも無くて慢心する中に育つる故なるべし

又其樂みを樂みとし其利を利とする者の中に養育されし者讀書の數を重るに隨て或は詩歌俳句等に氣を奪はるゝに及では酒宴遊樂の種蒔となるべし

四四 小人の解

夫れ小人は他人の富と藝有るを猜むものなり世の人書を書ひこと孝なる事幾百人に秀たるとも他人と和せざるときは其の徳他人に施す可からざるなり即ち小人は他人の藝能を猜みて以て惡み惡んで以て冠離の如く思ふは是れ小人の常なりとす小人は人の美服を着又は美食するを見て兎角之を嫉むものなり甚しきに至りては他人の手廻の善きを惡み又作物の能く栽培するを惡むものにして他人の作物より自分の作物が惡しく見へる様になるものなり是皆閑居するが故なり小人閑居して不善を爲すこと至らざることなしと云ふ如く眼さへ有れば惡を爲さんことを考へつゝあるなり小人閑居すれば惡事を爲すの源なれば教の拙なき者は決して閑居を爲すべからず

四五 善良なる習慣ならしむべし

自分の得手勝手をする家庭に育ちし者は朝夕其の風習移り己が勝手の惡しき事は親でも子でも兄弟

でも言ひ惱す者あり是等の人が子を持たるときは多くは愚痴に成り又放蕩となるべし故に子を育つる者は常に善良なること而已を行ひ自然と親に孝行を爲すことを其習とすべきなり

四六 人に勝たん事而已を思ふは甚だ悪し

人に勝たん事而已思ふべからず此の如き家庭に生長せし者は若し人に勝ことあらば忽ち慢心するものなり故に人に負るときは自分は自然と屈する有り或は人を猜むあり遂に朋友同志の間に於てすらも互に功を奪はんとする事あるとも譲ること抔には氣の附かぬ者なり是等の人竹馬の友と雖ども年長するに隨ひ朋友の二字を失ひ情通せず信義無く誠實無きに至るべし

又不正の朋友と交るときは淫犯飲酒遊樂の爲めに其の交を厚くする而已にして却て其交際の厚きが爲めに身上をも家をも滅亡せしむるに至るべし其の甚しきに至りては先祖の遺言も忠實なる親族の諫言をも馬耳東風となすに至るべし故に子を養育せんと欲する者は先づ第一に我家を大切に思ひ長を敬ひ幼を愛し功を譲る事を常とし朋友に交るに信を以てする事を専らとすべし果して斯の如くすれば誠自ら成る道自ら導くの如く又天地和して萬物生育するが如く自然とせざるべからず

四七 眼前の事に迷ふべからず

愚者は眼前の利を得るを以て第一の悦となすが故に好色飲酒を以て無上の樂みとす故に其樂みとす

る所其の利とする所悉く狭し此の如き狭き心にては何ぞ災を遁かるゝ事を得んや若し斯の如き人は少しにても災の來るときは忽ち氣を揉み愈々其場限りの事に而已凝り魂のものなり故に必ず眼前の吉凶に惑はざるゝこと無く其樂みを樂みとせず其の利を利とせず常に遠くを慮り以て之を樂み其の樂み大ひに廣くして盡る事無く須臾も道に離るゝこと無きを常に心掛るべし然れども其の心の法則なき者は譬へば西へ行くしべと定めたる心の中に東に行きたき志發り是れが爲に困る事有り又俗に所謂戯け者は或は經書の議論に我慢負惜みを以てし或は親を愛敬する言葉の下から婦女に氣を奪はれ困窮の身でありながら奢りの望み生じ節儉を爲さんとして却て吝嗇に流るゝことあり子々孫々迄も利しきに至らん事の工夫に専ら志すも其場限りの事に迷ふものなり是皆心の法則無きが故なり故に必ず善き心の法則を定め心ず眼前の事に迷ふべからず

四八 其場限りの事而已に心を置く者は薄氷を踏むが如し

悪友は朋友の悪しきを諫むること極めて少なく却て諂ひの爲めに其の悪きを譽むることあり或は自己が好む所の放蕩、懦弱、吝嗇、強慾、負惜み、瘦我慢の淵へ釣込まんとするあり或は自己の慢心を隠す

爲めに遊藝に進み杯する風情にて日々席を同ふだにすれば朋友と心得るあり是等は朋友に信義を盡す者に非ずして却て人を災の淵へ引込むものなり故に善き友と悪き友とを能く見分け善友と交り決して悪友と交る可からず唯安閑として其場限りの事而已に心を置く者は薄氷を踏むが如きものなり危き哉

四九 災を以て後の幸の種とするにあらざれば

遠く慮ることを得ざるなり

凡て人は人の己を知らざるを憤れば人も亦其の如くするが故に唯互に疎なる而已善きも悪きも移すも移さるも人の常たることは少し注意する人は皆知る所なり故に人を導く身分の者は先づ己が心を正し其意を誠にして以て其誠を移すべきなり己れが心を正しくすること能はざる者は物の拍子と事のはり合の關を能く考へて人の善きを見て是を慕ひて是に進み悪きは移らざるを先づ心の法と爲すべし

其の心の法定まりて後所謂陰陽消長の理に基き世の人都在て物事に移りはり合に變化して盛衰興亡極まり無き所以を能く考へ見るべし然して其宜しきと危きとを知ることあらば愈々己を顧みて微じの事にも悪きに移らずして善き事に進むを以て心の法則と定むべし而して心法を定めて後世に盛衰興亡す

る幽玄を觀る事の度重るに準て物に迷ひ身に變化盛衰の有る事の幽玄をも知る事に至るものなり斯く幽玄を知るときは心靜に成るものなり靜なる心なれば過ちも少くなく能く安ずることを得べし安く靜なるときは若し災來る事あるとも遁れ難きは遁れ難きにして其の災を以て却て後の幸の種とする事を能く慮るに至ては其心愈々安し是等の事を能く知り能く定めて能く靜に能く安ふして災を以て後の幸の種とするに至つては自ら遠く慮る事を能くし得るものなり

五〇 土地の改良に意を用ゆべし

凡て農民たる者は米穀を多く取り上る様心掛くべし而して少しにても餘有あらば必ず先づ農具を澤山に拵へ或は雜穀を多く貯へ或は病難天災の手當に積置き猶餘りあらば下等の地面を上等の土地に爲し惡地を善き地に直し譬へば一反歩四俵取揚る場所にて五俵取揚る事を能くすべし一反歩に付一俵餘を取揚るときは一町歩にて二反五畝の田地を増加するに當るべし果して此の如くすれば土地を買入たるとは異にして租税は賦課せらるゝこと無く其他雜費は少しも入用ならざるも土地を買入るゝときは租税雜費多く掛りて從て家内の者も自然と高くなり知らず知らず奢侈心生するものなり

五一 孝の解

父母に孝行を盡せば自然に其家富貴となるものにして求めざるに金玉積重して諸人皆其徳を慕ふ故

に自然と幸福を得るものなり孔子曰く夫孝者徳之本也と君の仁、臣の忠、父母の慈、兄の愛、弟の順
其他種々の善行皆孝より出でざるはなし孝は唯其父母を養ふ而已に非ず能く親に事へて其力を竭すに
非されば孝を盡したる者と云ふべからず我命は先祖や父母の賜物なれば一日たりとも祖先や父母の爲
めには命を捨つるの覺悟なかるべからず又我が三度の食は皆先祖や父母の恵みなれば必ず々々食事す
る度毎之を忘るべからず

五二 我慢我情を募る間敷事

我慢我情は自分勝手の甚しきものなり自分勝手の募るや我が所有物を私して親の爲めにも子の爲め
にも動かす事を得ざるに至る其甚しきに至りては親先祖をも厄介視するに至るべし子孫の難澁するも
家身の滅亡するにも關せざるに至る其行し果は自分の身體も思ふ様に成らざるに至るべく自分で自分
の氣を揉み他人に迷惑を掛ける事而已多かきべし我慢我情の強き者は折角人が深切に意見を云ふてく
れるも要らざる御世話と云ふ様に辨を以て諫を退くるに至るべし種々の自分勝手の行ひ而已を爲すが
故に親戚の者迄も愛想をつかして再び構ふてくれぬ様に成りては危し危し

五三 君の爲めに我身を思ふべからず

君に事ふるには自分の力の及ぶ丈實意を以て盡すべし即ち一身の爲めに圖らず名譽を捨て身をも捨

て君の爲めに竭すべし即ち三度の食事は君の賜ものなれば立身出世せんが爲めに君に竭すは眞誠に君
の爲めに盡すには非ざるなり君の爲めに其身を致すと云ふは一身の爲め私慾の爲めに圖らず君の爲め
に盡す可き謂なり故に我道友達は眞誠の心を以て君の爲めには一日も命が惜しくてならぬものなり必
ず々々自分の名譽を求め利達を謀る爲めに忠を盡すべからず

五四 明日ありと思ふべからず

明日ありと思ふ心に引かされて今日も楽しく入會の鐘と言ふことは悪しき言葉にはあらざれとも實
は明日ありと思はずして今日限りと思ふに如かざるなり君に忠を盡すも親に孝行を盡すも他人、交際
するも父母兄弟妻子の顔を見るも今日限りなれば我身を忘れて是れが爲めにせざるべからず明日有り
と思ふて君に忠を竭すも明日親に孝を盡すも明日朋友と交るに信を以てするも明日と延ばすこと勿れ
此の如く延すときは漸々と延し延して其僻が習慣となりて遂には忠孝仁義の道も何事も出来るもの
にあらす

五五 稲と稗とを見て善行を爲すべきことを諭す

田の稻の中に稗が雜へて植へらるゝや勉めて之を抜き取らざるべからず然らざれば稗の生長宜しき
が故に稻の生長を害するものなり是れと同じく人は悪心増長し安さものなり故に此の心を抜き去らざ

ばれ稗の稻を害すると同じく多くの人を害するものなり

五六 雑草の繁茂するを見て道心の行ひ難きことを諭す

田畑に生ずる雑草は勉めて之を抜き取らざるべからず雑草の生ずるや之を抜き取れば抜き取るに従ひ生ずるものなり若し之を抜き取らざれば作物を害し收穫を減少するものなり又一年是れが抜き取りを怠り實を結ばせたるときは生ずること甚しく容易に是を抜き取ること能はざるべし人の心も其の如く人慾の私にして一度發せんか容易に是を除き去ること能はざるものなり故に我道友達は朝夕田畑に繁茂せる雑草を見て人慾の私の萌しを能く知り常に是を除き去る様に心掛けべきものなり

五七 鶏を見ても人を愛せずんばあるべからず

鶏が遊ぶを見よ愛情の念頗る深きを見るべし即ち雄鳥が蟲類又は善良なる食を見付るや直ちに之を食すること爲さず必らずコックと謂つて雌鳥を呼んで是を食はしむ是れ雌を愛するの赤心愛情より出づるものなり鳥にして亦然り況んや萬物の靈長たる人に於てをや人慾の私而已専らにして些しも道心なく人を愛することを爲さざるは鶏に耻するものにはあらざる哉

五八 労働を勉むべし

百姓は米穀を取り上るものにして労働は米穀の本なり労働せざれば米も麥も大豆も芋も收穫すること

と能はざるべし故に百姓にして立身せんと欲する者は決して労働を賤惡輕蔑すること無く之を尊重せざるべからず能く労働すべき方針を定め朝起るや寢所に於て労働服を着寒中なれば股引足袋を着け如何なる労働を爲すも苦にならざる様常に心掛ざるべからず晩に至れば夕飯の折翌日の仕事割を家内一同にて能く定め各々其役割通り労働すべきなり斯の如くして家内和熟となりて何事を爲すにも常に心地能く愉快なるに至るべし

五九 親孝行を爲さしむるは親の心にある

子に親孝行を爲さしめんと欲せば親たる者は子の心に従はざるべからず子をして親の心に従はしめんと欲するは無理なるが故に孝行の子を持つこと難し赤兒を育つるにも子の意志にならざるべからざると同じく孝行の子を持たんと欲せば子の心に従はざるべからず不孝の子を持つも子が悪きに非ず皆親が不孝にするなり親が氣儘で道樂で嫉妬心強く又浮氣する様では決して孝行の子を持つこと能はざるべし

六〇 家内の和合すると和合せざるとは主人の意思による

人の樂々は一家の和睦に及ぶものなし如何に高位高官に登り又如何に鉅萬の富を有すと雖も夫婦和せず父子睦せざるときは幸福の人と謂ふべからず一家の和睦を欲すれば一家の人皆道を行はざるべからずと雖も其一家に主人たる者は勉めて道を行ひ先祖や父母の爲めには如何なる苦業難儀をも厭はずして常に父母の悦ばしき顔を見るを以て何よりの樂とせざるべからず

六一 運は天に有り果報は寢て待てとの解

夫れ君子と雖も幸有り不幸あり是れ即ち天の時と云ふものなり故に小人は人慾の私し勝なる者故少し幸ひ有るときは之を悦び浮かれ不幸あることを忘れて遂に奢りの種となるなり又不幸あるときは忽ち之を困しむ又道心微細にして些少の事に激して愈々不幸を増す者多し君子は窮すれども亂れずして能く其不幸をして後の幸と變化するに至るものなり是れ則ち其心に従ふて生ずることを指して運と云ふなり尤も運に天運人運あり能く味ひ知るべし故に性に率ふときは其運天に有るべし是の味ひを知り其意を得るに非ざれば果報は寢て待てぬものなり果報は寢て待つとは人道を行ひて時の來るを待つべしと謂ふことなり

六二 馬鹿者の出来る原因は氣儘なり

子孫に馬鹿者の出来るは親の意思によるなり親が氣儘なるときは其子は馬鹿者か又は悪人になるも

なり此の味ひを能く心得氣儘の心無き様常に心を用ゆべきなり

六三 誠自ら成るの解

實信誠とは皆己か身に付て有ることなり實と云ふ字は死する迄は付て有るが故に眞誠を盡せば前方の人も其實意が通ふものなり信と云ふ字は人の言なり虚偽なきことを謂ふ一言云へば必ず其通に行べし此の如く夫れが遂に習の性となるもの即ち誠自ら成るものなりとす

六四 後悔するは第一の學問なり

後悔すべし何事も前日の行ひを省みて誠の道に背きたるや否やを察して而して些しも背きたる行ひあれば後悔すべし後悔するは第一の學びなり後悔して前日の行ひの耻かしきを知るべし耻を知れば再び惡き行ひをせざるに至るべし

六五 情の薄きと厚きとは平常の行ひにて知るべし

人情を盡すことを知らざれば道は行ひ難きものなり詩歌を作り俳句を讀むも人情を本とせざれば善き句を作ることを得ざるなり諺に曰く旅は路つれ世は情けと云ふ如く世の中は凡て人情が原となるものなり人にして若し情にして薄弱なるときは人たること能はず紙一枚にても無駄にするは先祖や親の丹精を察せざるが故なり假令炭をつぐにも深切でなければ炭と炭が堅まつて風の通が無くなるべし是

をも何とも思はざるは情薄きが故なり

六六 學問をするは行ひを勤めるが爲めなり

人は行ひを勤むるを以て第一とせざるべからず善行を爲さんが爲めに學を修むるなり如何に學理は深遠にして議論は高妙なるも其の所説と行ひとが合致するに非ざれば真正の學者と云ふべからず

六七 繩紉ふ家には孝子多し

農家は勞働を勵まざるべからず故に子々孫々迄勞働を勵む習慣ならしめざるべからず即ち農家の主人が毎夜繩紉ふ家には押なべて孝子出づるものにして不孝子出づること稀なりと云ふ

六八 知たる而已では不可なり

孔子の知るも知るなり道友共の知るも知るなり其知る功を作すに至ては天下を導くも亦五人や十人を導くも萬々歳天下泰平の法則を立つるも五年や十年を治むるも功なり故に庶人に於ては子孫迄も亡ぶる事無き道を能く知て是を能く行ふべし只口に知たる而已にては何の益にも成らず心に知り之を行ひ勤めざるべからず

六九 小事と雖も必ず急にすべからず

人都在小なることは忍び安く大事は忍び兼ねる者多し是等大事は必ず小事より漸々と大破と成りて遂

に止め難きものに至るべし故に必ず事小なりと雖も決して是を急にすべからず

七〇 己れより上手なる者を猜むべからず

上方關東押なべて諸稽古にて人に秀で用ひらるゝ身分と成ては外に己れより用ひらるゝ者有れば是を猜み仇敵と成て却て人に疎せられ耻をさらすに至る者多し慎しむべし

七一 臨機應變と雖も天地の自然に離るゝべからず

世の中に事なしと雖も變無きこと能はず是れ尤も恐るべきものなり然らば變に應じ之を補ふの道なかるべからず變に際し是を補ふ道あらば變なきが如し變ありて之を補ふこと能はざるは大變に至るものなり故に人は機に臨み變に應じて其の宜しきを得ざるべからずと雖も天地の自然に離るべからず

七二 變化盛衰は當然の理なり

世に變化盛衰の有る理由を知らざれば學ぶと雖も益なし世に變化盛衰の有るは事物の當然の理にして盛なるものは衰へ生あるものは皆死す萬事皆然らざるはなし

七三 愚讓怯謙を守るべし

人たる者は其子の善き事の外見聞く事無く常に愚讓怯謙を以て養育すべし聰明睿智守之を以て愚大馬鹿者を守り是るに利口を以てす功被天下守之以讓世人の嘲りに遇ふ是を有つに手柄顔を以てす

勇力振世守之以怯柔弱未練是れに陥るに握り拳を以てす富有四海守之以謙身上を亡す是を致すに氣高きを以てす愚讓怯謙の四つを以てするは乾徳なり人に於て天下を治るの心なりとす利口、手柄顔、握り拳、氣高きの四つを以てするは道心微にして人心慕りたるものにして愚の至りなり是皆人慾の私甚しきなり人は押なべて物の張合に乗り事の拍子に移て漸々に進むと進まざるとの差ひにして善惡邪正の變化有り是進む者は善にして心の靜なるものなり進まざるものは惡にして或は偏り或は其器量相應の智滿て覆り心の靜ならざるものなり亦器量に満たざれば愚昧の者と雖其心靜なるもの故漸々に道に進むものなり故に余が道友達は天地の自然に基き誠自成道自導くの行を以て能く勤むるにあり

七四 道友多きは幸ひなり

人は道友多く無くんば甚だ危し其所以は人慾の私の發るとは恰かも沙の湧き出るが如く止んと欲するも止め難きものなり其の甚しきに至りては道心愈々微にして遂に道を失ふものなり是に至りては其志改め難きなり嗚呼恐るべし故に其私の機しに時速く知り是れを改めずんばあるべからず亦其沙の湧き出る如く知らずく私の出るものなれば道友鮮きときは是を見出す者鮮し危しく之に反して道友多きときは是を見出すこと多く互ひに相注意して人欲の私を能く去ることを得べし

七五 皇恩を忘るべからず

夫れ古への道無きときは臣として君を重んぜず子として親を殺し或は惡人の爲に財を奪はれ命を取られ其無き體を街に積みしと有りとは是に於てか恐れ多くも 天照皇大神は其天か下に哀憐をたれ給ふて或は罪の罪たる事を定め或は善き神達に命して惡神を平げ給ひ唯々天下を穩かならしむる事而已にあらせられしとぞ其尊き事天か下の神達の御魂に染み渡りて 天照皇大神の御魂は則ち八百萬の神達の御魂に移りをはします也故に八百萬の神達も亦唯々天下の平かなる事而已彌さらはせ給ひしとなむ然して後は御祖々々の其御魂も亦其の子々孫々の魂に在すなり然らば今の世の人と雖も漸々其氣を稟け繼ぎて以て生れたる者故に其神靈も亦其身々々に居まますと云ふ事無し官職を下し給ふも天か下の民を憐れみ給ふに外ならざるなり是に於てか御代萬々歳たるものとなむ庶人尙私無ふして諸人の行末迄も安らかならしむる事に心を置くことなれば自ら作せる孽無く天の爲せる災ひは尙は遁れ安ふして子孫を有つ事も亦疑ひ有るべからず、此に於て 御祖神の靈前に謹て拜すべきなり、然るを人慾の私の爲めに神々を祈るは其の身に坐在す神靈を穢すにあらん殊に今在ます親々の神靈迄も蹂躪り蹴飛ばす如くの事而已するは人面獸心にあらすや是れ人慾の私の爲に迷ひ己れに求めて其神罰を蒙り生涯所謂修羅道に漂ふ其甚しきは家も身も亡すに至るべし故に必ず先づ己れは生れたる儘の直なる心を以て親に事、他の人々迄も唯々直からしむる事に心を止むべし余が友人達は朝な夕な必ず是を忘るべからず嗚

呼懼るべきは其身々々に坐在す神靈迄も踏躓る如くに穢すの事なり

七六 酒と色と強慾を慎むべし

酒と色と強慾とに深く陥り是を以て無上の樂みなりとなす者は修身齊家の講義を聞くも又經書を讀むも之を改むること難きものなり甚しきに至りては釋迦以來か元服して來て說法するも之を用ゆること能はざるものなり恐るべきは此の三つの欲なりとす

七七 中の解

中とは天地の和する所以に基づき其の獨りを慎み以て人慾の私の機し無きことを謂ふ是れ則ち天下の大本にして大極たる所以なり天下の大本とは天地の和其儘のことを謂ふ若し中を真中と解する時は必ず六合に彌るの心と解すべきなり

七八 中和を致して萬物育すとの解

中和を致して天地位し萬物育すと謂ふは諸侯以上の行ひにして普通人民の行ひに資ること勿れ道は須臾も離るべからざるなりとの語を能く熟すべし時に普通人として利を望むは賤しき身分なれば少し道に近きに似たる所有るが如く何れも此の微しは道に叶ふに似て速に滅せざるものなり、然れども富て後其の子孫に至て其の志を受繼で貧民に濟しく益々利而已を好み強慾専らとするに於ては其分の不

相應故少しも道に似たる所なきに至り則ち亡ぶるなり故に子孫永績を求めんと欲すれば唯至孝にして衆人と和し自ら富めるに於て益々富貴に趣くものなり又道心の人徳行を積みたる上は庶人と雖も中和を致して天地に位し萬物育すとの語に由る事も有るべし不徳の人は初より此の語の如くすることなく唯親に事ふるの外念ふこと勿れ

七九 艱難汝を玉にすと云ふ言葉を能く味ふべし

人誰れか幸福を望み困難を避くることをせざる者あらんや然れども幸福を得れば是れが爲めに勤勞を厭惡し粗食を嫌ひ美食を爲し粗服を耻とし美服を着し常に惰弱勝にして折角心勞して得たる幸福も其れが爲めに何時しか消費して遂に衰亡するに至るもの少からざるべし然りと雖も亦妄りに困難を求むべきものにあらず己むを得ずして來る災は之を災と思ふべからず即ち自ら作る災にあらすして天我を誡しむるものなり故に之れを遂行せずして何をか爲さん而して此の困難を遂行して其の終極に達するときは天必らず之れに報ゆるに恩恵を以てするものなり故に艱難汝を玉にすと云ふ言葉を能く味ふべし

八〇 接木に譬へて人を諭す

人皆接木すべし接木せざれば善良なる人には成ること能はざるなり又接木しても臺からひこを出し

ては忽ち其のひこ太く成り接きたる木も臺から出た木も知れ無く成り遂に元のつまらぬ木と成るなり
其れを氣附すに其儘に花咲かせたがるものありとも何時か切て接木にせずば駄目なり依て愈接木せね
ばならぬ事が分つた者は其接たる臺のひこを除き去り能く臺木を拵へて接木したる木を大事に生成せ
しむべし人も接木を生成せしむると同じく賢人聖人の言葉を己れが意志の上に接附自己の意志を發生
せしめざる様常に注意すべし若し自己の意志を以てするときは接木の臺から芽の出たと同じく美は
しき花を開くこと能はざるべし

八一 心廣く體寛なるときは病ひも少きものなり

心廣くして能く忍耐の力を有し物事に遭遇するも恐れずして之れに處するに其の方法宜きを得れば
災を變じて幸となすも敢へて難きにあらざると雖ども若し之れに反して心狭く少しの災あるときは直ち
に是れを大變と思ひ頻りに氣をもみ遂には健康を害するに至るものなり故に我が道友達は常に心を廣
くし如何なる災あるとも是れ天我れを戒しむるものなりとなし我れ此の厄運を退くるにあらざれば天
道に反す故に力を竭し身を致して是れが回復に従事せざるべからず、故に災害に遇へば其の度毎に勇
氣を興振せざるべからず故に身體を強壯ならしめんと欲せば必らず心を廣大にして體を寛かならしむ
べきなり

八二 農作物を栽培するには土地の養分肥料の

吸収とを平等均一ならむべし

稻や麥を栽培するも先づ土地を平かに等し肥料を均一に施し之を吸収するに當り甲の株は多く乙の
株は少なくするが如きことあるべからず肥料を施すには良く此點に注意し耕すにも田畑の角や畦畔の
際に能く注意して畦畔の際と雖も決して淺く耕すことなかるべし畦畔の際に至り不注意なるは農民の
通弊なり能く改むべきなり畦畔の際に殖られたる作物と雖も中に植られたるものも土地が肥料を吸収
すること同一ならざるべからず

播種するに當り能く注意せざれば平等均一は望み難きものなり發芽してより生成に良否あるときは
成熟の時に至り收穫に利害を有するものなり一度土地の養分肥料を多額に吸収するときは成長速かに
して他の作物を壓するものなり此道理を能く考へ唯々農作物を栽培するのみならず交際上の行ひにも
之を實現せしめざるべからず假令自分は他人より多くの幸を得るも他人より勝れるものに至ると雖も
常に忠恕の法則を守り決して他人を壓迫するが如き意志を持つべからず如何に遠方の朋友なりと雖も
之に對するに近隣の者に對すると同じく信義を以てし決して遠近の故に不平等不均一無き様に常に心

掛くべし其の常に心掛るものにあざれば播種するに不平等なると同じく其時に至り其場に臨んでは之を行ふことは六ヶ敷ものなりとす

八三 宥坐の器に就て

宥坐の器たるや世に盛衰興亡する原因有ることを知らしめんが爲めに作れるものなり即ち治まるも亂れるも擾るも皆此の器の上に見ることを得るものなり故に人たる者は朝な夕な此器を見て治亂興亡の理を能く考へ此の器の水の満るが如く其分に過ぎたることなきか又其の分に足らざることも無くして能く中を行ひ得るかを顧みざるべからず若し其の分に過るときは水の満ると同じく忽ち覆るものなり又其分に足らざるか水の少なき時傾くと同じく忽ち偏るものなり故に人は其中を守り之を行ふに非ざれば父子兄弟の間と雖も融和すること能はざるべし故に此の器により能く其理を學んで危きに近寄らず災を遁かるべきことなり故に閑居杯に据へ置くには實に最良の器ならん

八四 隱居心を去るべし

世俗の人皆言はん年六十に至れば子に世を譲り隱居でもして樂を爲すべしと是れ大ひなる誤なりとす何となれば六十歳にても八十歳にても其の分に應じて勞働を爲すことを得べきものなればなり若し六十なるが故に世を譲ると言へば死して世を去るべし死せずして世を譲ること能はざるべし然るに世

を譲て樂を爲さんことを思ふは天命に背くものなり人苟くも其家の子孫永續の基を立て先祖や父母を大切に思はゞ決して隱居を爲すべからず若し六十に至りて隱居心を起し書院を建築して老後の樂を爲すが如きことあらば其有様を幼稚の子女供が常に見聞するが故に懦弱心を起さしむるものなり老人に至りては酷しく勞働を爲すことを得ざるも繩綯ひや俵あみ、むしろ織等は之を爲すも敢て難きにあらざるべし故に余が道友達は年老て戸主は之を譲るとも隱居して樂を爲すことなく常に其分に應じ器に準て程良く勞働して而して家計の補助を爲すべし

八五 謀計を爲すべからず

謀計は目前に利潤ありと雖も之を爲すべからず人を謀りて自己而已幸福を得るは不義なり不義の富貴は永續すべき所以なきなり人を謀りて人に損を爲さしめ而して自分而已利を得んと欲するは實に人面獸心の甚しき者なりとす故に余が道友達は信義を以て人に交り謀計を爲して人に困難を掛くことあるべからず

八六 日待子安講等に集會するも其方法を得ざれば甚だ悪し

日待を爲して村内の男共集會して修身齊家の事を話し又種々の實驗談を爲すは是れが爲めに村中和熟となりて宜しきことなりと雖も日待を爲すも飲酒飲食専らにして修身齊家の事杯は少しも之を談ずる者無く自己の實驗談は風俗懷亂の話杯をして是を手柄顔する者あるは往々見る所なりとす又女子供に於ても子安講にて集會するも種々有益なる物語杯して村内の女共相獎勵して貞節を盡さんとすれば甚だ善良なりと雖も子安講をかこつけ飲食を専らにし是處に五人被處に三人と謂ふ如くして自分の夫の陰言や父母の嚴確なることを訴ふる而已にて折角和熟の爲めの集會も變じて井戸端會議の弊風と化せん而已嗚呼嘆すべきの至りならずや男子に於ても女子に於ても集會するは和熟となる爲めなれば今よりは集會する度毎に道か又忠臣孝子の事蹟とか或は又自己の農作物に關する實驗談杯を語り從來の弊を改むべし然らざれば集會する事を廢すべきなり

八七 大酒を爲すべからず

飲酒するも酒に呑まれざる様注意せざるべからず大酒するに於ては必ず酒に呑まれるゝに至るものなり酒に呑まれるゝや己れは天下の有士なりとか種々の暴言を吐き驕侈心を起し勞働は厭ひて苦になり口嘩論を面白くなるに至るものなり殊に農民杯に取りては大酒するより大害なるはなし第一大酒すれば時間を費し金錢を費し健康を害するに至り遂にはやけとなり暴飲暴食を擅にし金錢は次第に不足を

告げ遂には人を詐きて金圓を詐取し又は人の物を盜取るに至るものなり大酒の害擧て數ふべからざるものにして實に大酒は驕侈の基にして諸惡の源泉なりと謂ふべし故に我道友達は其日の業務の勞れを治する爲晩酌に一杯位は是を飲むも可なりと雖も大酒に耽り道を忘るゝが如きと必ずあるべからず

八八 正直を守るべし

邪は以て正に勝つこと能はず曲は以て直を凌ぐこと能はざるは自然の法則なり故に正直を守り邪曲を避くるものは子孫永續の基をなすものなり父母にして虚偽詐りを云ふときは若し其家に育ちし者は常に是を見聞するが故に少し位は眞實の事を曰はざるも敢て意とせざるに至り其習慣が漸々と募りて遂には大虚偽付きに至るものなり危し々々心を正ふし意を誠にするには邪曲の念を去り正直を守るにあり蓋し正直を守ると謂ふは口にて言へば唯一言なりと雖も是を實行するには容易の事に非ず親が正直にあらずして其子何ぞ正直なることを得んや親が不正直にして其子の正直なることを望むは恰かも大海を舟無くして歩行して渉ることを望むが如し何ぞ之を求むることを得んや神や佛に禮拜するも正直を守らんが爲めなり早朝日輪を拜するも正直を守らんが爲めなり不正直にして神佛に祈るは神佛を粗末にするものなり故に必らず正を守り邪を去り直を信じて曲を捨て子々孫々をして此の如く習はしめざるべからず

八九 足ることを知るべし

人足ることを知らざれば奢りに限りは無きものなりと謂ふ如く人間程萬事に望みを有する者はあらざるべし人が佳食を爲さば自分も佳食せんと望み人の美服を見ては己れ又是を望み人の住家を見て自己も亦此の如くせんとの慾心を發するものなり或人の古歌に思ふこと一つ叶へば亦二つ三つ四つ五つ六かしの世やと云ふ如く人の慾心は限りなきものなり是皆足ることを知らざるが故なり實に此の足ることを知らざるより大害なるはなし足ることを知らずして日々缺乏而已に心を碎くときは貪婪饜く所なきに至るものにして釋迦の所謂貪瞋痴の一にして諸々の煩惱に因る所諸々の罪惡の基く所となるものなり實に或人の謂ふ如く事足れば足るに任せて事足らず事足る身こそ安けれと三度の食事に差支るが如くの貧窮に陥り身代保ち難きに至るも又強慾無道の行ひを爲すも心に不足なるが故なり故に我道友達は 天照皇大神の御時と今とを競べ而して慾心を抑へ決して奢侈に流るゝが如き行ひを爲すべからず

九〇 天地の自然に須へば富貴となるものなり

庶人の身代も天地の自然に須へば年々歳々富るとも衰る事無きなり譬へば秋と成れば木の芽も育ち盡て或は葉散り枯木の如くと成る有り春となれば日々の陽氣を受けて日々に育つものなり年々歳々斯く

の如くにして大木と成るなり是れと同じく人の身代も天地の自然に須ふ法則を定め是を守れば年々歳々富るとも衰る事無く終には大家と成るなり故に必ず先づ眼前の慾に離れ永遠の利益を求め父母に事ふるを以て家内能く和睦すべし父母に事ふるを以て家内和睦するは則ち天の陽氣地に之き施して草木の根育つと同じく富貴を保つ所以なり孝事を以て家内和睦し而して農事を爲すときは必ず米穀多額を收穫するを得て自ら作せる獲無く災無ければ物を費すこと無きなり此の如くして家業を能く守るに於ては春と成りて萬木盛んに育つと同じきものなり然れども富榮て地株等多く求めたること近隣に聞ゆる事と成りては入用雜費の多きことゝなるなり斯くなりては其身代は草木の秋に至るが如し斯く成ては猶々眼前の事毎に迷はざる事を專一と心掛愈々父母に事ふることを能くし家業を守るべきものなり此の如く漸々富貴となるに従ひ父母に孝を盡し家業を守るに於ては如何なる富貴となるも天地の自然に準ひたるものなる故危き事なかるべし若し是に反して身の行果も辨無く或は慾を掴み吝嗇専らとし父母に事ふる暇無く金銀地株を求めたる身代は譬へば室に咲きたる花の如く富るとも聊かの事にして能く保つべき所以なきなり而して其蓄積なる魂生子々孫々に推移り遂には身の行果の憐なる事に陥らば私慾専せしも吝嗇せしも無益なるべし此如くの家庭に養育せられし者は強慾にして不義非道を行ふことに至るべし斯の如くして富みたる身代は肥料を以て急に育てたる杉木の如く其子孫は身代の害蟲

となり金銀家株を失ふに至るものなり故に斯の如き家に養育せられ金銀は塵芥の如く思ふ故我知らず身代の蟲を作る肥しなると知るべし自然の時を得て富るときは身代の蟲生することなく子孫永續を求むることを得べきものなり

九一 人に悪く言はるゝは皆自分が言はるゝ様に
したるなり

何程人に悪く言はるゝとも必ず悪敷思ふべからず何となれば此れ皆自分が人に悪く言はせたるものなり自己に一點の私心無く一毫の邪心無ければ人必ず是を悪敷言ふものに非ず自己に私心有り邪心あるが故に人に悪敷言はるゝなり故に人が我身を悪敷言ふことあらば必ず我身を省るべし人に悪敷言はれて忽ち憤怒するが如き様ではとても道を行ふこと難きものなり

九二 人は節義を守るべし

人は必ず節義を重じ必ず之を守るべし人に節義無ければ佛像を造りて目を入れざるが如し節義とは口に偽りを言はず能く人欲の私を去り禮儀作法を正しくして而して人に諂はず又人を侮とらず人と約束しては堅く之を守り人に悪口を言はるゝも己れば人の事を惡むことなく色欲の物語杯は決して之を

爲すことなく又飲酒に耽けることなく忠恕能く人を愛し人たるの義務を盡し道友の信義を能く守り義理人情の爲めには死をも恐れず其心鐵石の如く常に温和なる意思と慈愛の心あることを謂ふ

九三 何事を爲すにも油断すべからず

農業を爲すにも商業を爲すにも常に能く意を用ひ決して油断すべからず例へば田に引水排水を爲すにも油断するときは引水せんと欲して甚しく引水を爲し翌日より排水するが如きことを爲し又排水せんと欲しては絶對に排水し翌日より引水せざるべからざるに至るものなり除草するに就ても斯の如く除草を怠るときは何時しか田畑荒れ果て雜草而已繁茂するに至るべし故に我友人達は日夜勞働に従事するものなれば必ず油断無く意を用ゆべきなり即ち仕事服の如きは毎晩伏床に入る時は必ず是を履所に所持し一定の場所に置き暗夜如何なる變事あるも燈火を待たず着し得る様に心掛け而して翌朝起る時には襦袢に股引を着け直ちに仕事に取掛る様意を用ゆべきなり實に恐るべきは大丈夫なりと信じて油断することにより古語に所謂油断大敵と云ふこと能く味ふべきなり

九四 節儉するも吝嗇に流るゝことあるべからず

節儉は人をして經濟上の獨立を得せしむるのみならず道徳上の行ひを完全ならしむるものにして必ず之を守るべしと雖も決して吝嗇に陥るべからず節儉と吝嗇とは實に區別し難きものなり勤儉産を修

め常に財を貯へ置くも天災地變の災難に備へんが爲めなり凶干、水溢、地震、山崩、火災は人々の恐るゝ所りなと雖も人力を以て之を免かるゝこと能はざるものなり是等の事變に遭遇するときは必ず多くの費用を要するものなれば常に節儉して財を貯ふるも此等の費用を充さんが爲めなり即ち變事は人の免かるべからざる所なりと雖も之を補ふことを得れば即ち變なきに至るものなり故に我道友達は必ず節儉を爲すと共に吝嗇に流るゝこと無く他人の難儀も我難儀と思ひ他の病氣も我病氣と思ひ信義以て之に當り決して他人の難儀病氣等を輕視すること無く其分に應じて力を盡すべきなり

九五 儒者の解

支那古賢聖人の意を明かにし躬行實踐以て人を導く者を昔し我朝に於て儒者と稱するなり斯の如く定りあるにも拘らず常に慢學に流るゝ者は口而已仁義を説き禮儀を論ずるも之を實行することを欲せざるなり即ち人は品行を慎むべし節義を守るべしと人を諭しながら自分は遊女場に入出し飲酒を恣にし又他人が水難火難に遭遇しつゝあるも自己は金殿玉樓に美女とたわむれつゝあるが如きは人面獸心の行ひに非ずや

九六 氣儘は家内の和合を害ふ又徳を積むも農業を忘るべからず

世の中に我儘勝手より大なるものはなし身を修め家を齊はんと欲するものは先づ第一に我儘勝手を除くに如くはなし即ち地上に繁茂せる草木を見よ嵐にもまれ大雪の爲めに苦しめられ或は蟲の爲めに其幹を害せられ漸々生成して遂に大木となるものなり草木にても氣儘勝手には出来ぬなり況んや天地の別神靈の長たる人に於てをや人は雪雨を避け寒暑を凌ぐに方法ありて天然の氣候に苦しめらるゝこと少なしと雖も人と交際し父母妻子夫婦兄弟の關係あるものなれば我儘を爲し勝手をすることは家内を圓滿ならしむること能はざるものなり

又道を行ひ徳を積むと雖も農業を忘るべからず道を行ひ徳を積むことに力を盡すと雖も是が爲めに農業を怠にすべからず農業を怠り道を行ひ徳を積むことは爲し得ざるなり何となれば衣食足らずして如何に道德を行ふことを得べけんや食するに物無く住むに家無く着るに服なくして何を以てか道を行ふことを得べきや徳を積むことを得べきや故に余が屢々教諭する如く農業に勉むると同時に道德を行はざるべからず道德を行ふが故に農業を粗末にするは利しからず又農業に勉勵するが故に道德を行ふの暇なきなりとは決して謂ふべからず親に孝を盡し朋友に信を盡すも農業に忙はしきが故に爲すこと能はざる理由なきなり必ず農事を勉勵して道德を行はざることあるべからず道德を行ひて農事を粗末にするが如きこと必ずあるべからず

九七 誠 の 道

誠の道たるものは一筋なり神、儒、佛の三道と雖も其至極は誠の道なり古歌に分け登る麓の道は多けれど同じ高根の月を眺めんと云ふ如く佛教、神教、儒道の如く分るゝと雖も皆同じく誠の道に至るべき入口にして其の絶頂に至るに及んでは一なり故に是を別々に道ありと思ふは間違なり又は是を別々に道ありと教ゆるは邪説なり異端なり是等は皆誠の道に導かんとして誠の道に至ること能はずして枝道に引入るものにして人を害する甚しきものなり誠の道たるや道徳の基礎にして人の守るべき道なり誠なるが故に克く君に忠を盡し親に孝を盡し朋友に交るに信あるなり禮儀作法皆然らざるはなし義あり情あり人欲の私しの萌しを能く去り悪を念はず人を嫉まず藝能ありと雖も誇らず阿ねらず仁義忠恕皆誠より出でざるはなし故に我道友達は勉めて誠の道を守り決して之に反するが如き行ひあるべからず

九八 朝夕の飯を煮るを見ても氣儘を爲すべからず

古語に曰く「三度食の御飯さへこわしやわらかし思ふ儘には成らぬ世の中」とある如く女共が朝夕飯を煮くを見よ水何合に米何合と加減して火の焼き様によりて善き出来と悪き出来とあり斯く法則は定まりあれども實際上に於ては同じ割合になすと雖も時によりてこわき事あり又やわらかきとありて同一に出来ることは容易にあらざるなり自分で水加減して火を焼きつゝ有る所の飯でさへ思ふ様には出

ざるなり然るを泥んや他人と交際するをや思ふ儘には成らざるが當然なり余が道友の女達は其朝夕煮く所の飯の事に鑑み其度毎に紐解や婚姻の事に言ひ傳へたる言葉を出し老ては子に従ひ子孫を受するは先祖や親に對する勉めと爲し主婦は孝の爲めには生命をも捨て親や夫に對しては少しも悪き顔をする事無く常に我身を省み決して自分勝手を爲すこと勿れ

九九 男の口より出たる事は反古にならぬ事

人の一度意思を表示するときは是を取消すこと勿れ故に其表示する前に能く意を用ひて是をなすべし一度意思を表示して後に其表示を取消して反古と爲すが如きは人として爲すべき道にあらす即ち一度表示したることを取消し又は變更し是を反古にするは其の人の意思の薄弱なることを表白するものにして人をして錯誤に陥らしむるものなり例へば或繪畫を狩野元信の筆なりとして賣付け又金錢を何月何日に返金すべしとの約束して是を履行せず又或日或時刻に或る場所に集會すべしと約しながら其時刻より遅れて出席するが如きは往々有り勝のことなりと雖も決して是を爲すべからず他人は如何に其表示を取消すも自分は決して之を無視することを爲さず其の表示せし如く行ふべし若し一度や二度は其の表示せし通り行はざるも宜しかるべし却とするは甚だ宜しからず何となれば其の少しの事にては其始めに慎まざれば漸々と募りて其習慣となり甚しきに至りては人を詐欺するに至るべし自分

が意思を表示しながら之を反古にして他人に錯誤を生せしめ知らぬ顔して居るは人面獸心と謂はざるべからず故に必ず我道友達は一度意思を表示するときは如何なる事ありと雖も是を行ふべし若し難きものと思はば初より其意思を表示せざるを宜しとす言行一致は人の守るべき所にして意思と表示と相合致せざるは誠實を破るの基なりと知るべし

一〇〇 難捨者義なり

義は是を重すべし決して是を軽すること勿れ武士が戰場に於て君の馬前に討死する是れ義なり、夫れ一朝事あるや君の危きを見て自分も危からんとして君を捨て逃げ去るは人面獸心の甚しきものなり然れども事變に際し義を全ふするよりは平常に於て義を全ふするは困難なるものなり、今は天下泰平の御世なれば平常に於て義を重し是を守ることを心掛けざるべからず道友と議定契約するは子々孫々迄も是を守らんが爲めなり故に是を守るに義にして其子孫にして是を守らざる者有らば義にあらざるなり子孫而已ならず道友の中にも職行二重を爲すが如きは其議定契約を無視するの行ひにして義を捨てたるものなり強慾謀計を爲すも皆然らざるはなし、此の如きは武士が戦に敗れ君の危きを見て我身も危かるべしと思ひ戰場より逃げ去りたると同じき行ひなりと謂はざるべからず假令議定契約せざるものなりと雖も君に忠を竭し親に孝を盡し夫婦相和し朋友相信し兄弟相愛するは天地自然の義にし

て是に背きたるときは天地自然の義に背きたるものにして不義の甚しきものなり況んや諸子は孔子の教へを信じ平日是を學び能く其幽玄を味ひ是を行はんと欲するものなれば若し毫末も是に背きたるとわらば口には忠孝仁義の説を唱へ其行ひに於て是に反するものなれば其教へを蔑にするものにして義を捨て顧みざるものなり義は自己の生命を捨て、も之を全ふせざるべからず若し義を全ふする爲に生命を捨てざるが如きことわらば速かに生命を捨て、義を全ふすべし義と生命と何れが重きとすれば生命より義を以て重しとせざるべからず、生命の貴重なることは何人と雖も之を知らざるものなしと雖も之を義と比較するときは實に鴻毛より輕きものなりと謂はざるべからず故に我道友達は假初にも義に反する行ひを爲すことなく信義を以て之を行ひ能く是を守り義の爲めには生命をも惜むこと勿れ

第三卷 道徳百話終

分相應の意義

大原幽學の分相應の卷に人るに先ち分相應の意義及性質如何を説明するは敢て無用の業に非ざるを信ず依て左に其大要を記せん

一 分相應の意義

分相應とは其分に從て相應するの行ひを爲すの意義なり分とは自然にして天命に屬し相應は作爲にして人道に屬す此自然の天分に依り之に相應したる行爲をなすを謂ふなか分とは中庸に所謂誠は天道なりと云ふ語に相當し相應とは之を誠にするは人の道なりと謂ふ語に相當するものなり故に分相應と謂へば天道と人道とを總稱する言葉にして分相應の行ひを爲すと云ふことは即ち吾人の行動をして天道たる自然に合致せしむることを意味するものなり

人苟しくも分相應の行ひを爲さんと欲せば其本分を知りて而して是に相應したる行動を爲さるべからず蓋し人類には尊卑上下の別あるは自然の理にして上下を辨明し尊卑を秩序するには各人各々其本分を知らざるべからず子思謂はずや富貴に素しては富貴に行ひ貧賤に素しては貧賤に行ひ夷狄に素しては夷狄に行ひ患難に素しては患難に行ふと是れ世人處世の法則にして人性の正眞健全なる行動は

自己の身分又は力量を正観するにありンクレーナース謂はすや己を知れと

然らば吾人は如何にして其の分を知り之れに相應したる行を爲すことを得へきやと謂ふに、余輩は消極的法則と積極的法則あることを信ず、即ち能はず爲さざるは消極的法則にして能くす爲すは積極的法則なりとす、例へば君主及び國家に對して忠實の義務を有する官吏が、其の分に相應したる義務を全ふせんと欲せば、精神上及び肉體上全力を擧げて、君主及び國家の利益に適合すべき行爲を爲すは積極的法則にして、勉めて國家及び君主の不利益を來すべき、行爲を爲さざるは消極的法則なりとす

凡そ吾人が眞成の獨立を希望し自主せんと欲せば自己の本分を知り是に相應したる行を爲さざる可らず分相應を知らば即ち成功の秘訣を知るものなり換言すれば成功の秘訣は只此の分相應を知るにありのみ即ち自己の力を自身にて測量し其爲し得る範圍に於て之を爲し其爲し得ざる範圍内に於て其之を爲さず其爲し得ざる事項を認定して其の爲し得べき範圍に於て全力を集注して一切周圍に頓着することなきなり斯の如くして成功なくんば世に成功なるものあり得ざるなり自己の本分を知りて之に相應したる行動を爲すは豈に只成功の秘訣なるのみならず人爲の行動をして天道に適合せしむるものなり、其只獨り分相應と云ふ言葉は經濟、道德の基礎たるのみならず法律の基礎なり三千の民法、三百

の刑法其の規定する所嚴密確然たりと雖も其歸一する所は吾人をして其本分を盡さしめんとするに外ならざるなり、刑法に於て不法を罰し私法に於て義務違背を責むるも吾人をして其本分を盡さしめんとするにあり、官に使へて忠ならざるは其本分に非ず商業農業に身を委ねて至誠以て事に従はざるは其本分に非ず、人の親として其子の養育に従はざるは其本分に非ざるべく又人の子として孝道を盡さざるは其本分に非ざるべし、人と約して堅く之を履行せざるは其本分に非ざるなり然り而して此自然の本分に依り是に相應したる行動を爲すは吾人の務めにして勤儉以て産を修め分度に依りて節制するも此の本分に相應したる行ひを爲さんが爲めなり

道德をして瘦我慢の弊に陥らしめず人情を濫用して怠惰を戒め以て勤勉の道を壅塞するの弊を防止せんと欲せば其分に相應して行動せざる可からず分に相應したる行を爲さんと欲せば我意を捨て私慾を去り能く情誼を盡し偏せず黨せず人を人として忠恕以て重んじ人達し己れ達し人立ち己れ立たんとするの意思及行爲に基つかざる可らず私慾の發生し易きは人生の弱點にして其の發生するや炎々として恰かも火の燃へ立つが如く際限なきものなり此の私慾の發生を吹き消すか如くに消失せしむるには其の本分を知らざる可らず其本分を知り而して之に相應したる行動を爲すは人生の極地なりと謂はざる可らず倫理を教へ道德を論する者其名を儒にし其行を墨にするは豈に其本分を盡したるものと謂ふ

ことを得んや

二 分相應の行を爲すは分業の原則なり

今や我國は歐米先進國の伍班に列し分業の法盛んに行はれつゝあるなり然り而して即ち其分を知り之に相應せる行動を爲すは經濟上最も必要なることなり凡そ天下の災其本末を誤るより大なるはなし是れ皆其分を知らずして行動するが故なり、夫れ社會の事業は分業の法によるに非ざれば其進歩發達を期す可らず、其分を守らずして其不相應の行動を爲すに於ては豈に只分限を亂すのみならず分業の功なくして却て大害を醸すに至るべし夫れ鳥獸能く其分を知り之に相應したる行動を爲しつゝあるなり觀よ鷹は能く飛び真空の高さに上ると雖も泳くことを願はず虎は千里の藪を往來すと雖も大井川を渡ることを爲さず、魚は激波の中に遊泳すと雖も山野を往來し木に登り空中を雄飛することを欲せざる等是れ皆其分を知り其の相應なる行を爲すは皆能く天賦の能を知り鳥は鳥の分を虎は虎の分を魚は魚の分を知り而して其分を守れるが故なり。然るに獨り萬物の靈長たるべき人間のみ其分を守ることを得ざるは抑も何故ぞや是れ生中に智惠なるものありて虚榮を求むるに急なると自から欺くことの爲めに然るなり、智固より人生に必要缺く可らるものなり即ち能く自己の天分を知り而して其天分に相應したる行動を爲すべきものなり然るに虚榮心の爲め自詐的の爲めに智識を活用するは其分を知らざ

るものなり例へば埴檢校も三絃針治を學びて凡庸の盲人にも劣り家畜の番をさせてはニュートンも只の作人に及ばず、天下の力士たる常陸山梅ヶ谷も輕業士となりては却て江川の妙を演ずることを得ざるべし左甚五郎も力士となりて其妙を發揮するを得ざるなり、是れ皆天分の然らしむる所にして當然の道理なるものなり。然るに世の人此の明かなる道理を忘れ自ら好んで強ひて四角なる天分を圓き職業に填込まんと欲する者多きか故に其分に相應したる行動を爲すこと能はざるなり、近世職業の撰擇自由なるが故に其父兄たる者子弟の天分をも顧みずして自ら職業を選擇して之を爲さしむるが如きは大間違の極點なりとす例へば商業家となれば慥かに有望の青年なりしも小説家となさんとすれば其淺俗なる小説家となり一生立身することを得ざるべく畫家に適する青年を哲學者となすときは何の爲す所もなかるべく職工として成功すべき青年を政治法律の學に志して却て身を誤り墮落して世に所謂壯士俳優惡書生の仲間入を爲すに至るべし是れ其分を知らずして不相應なることを爲さんと欲するものにして斯く成りては適材を適所に用ゆることを得ざるべし

夫れ分業の本旨たるや各就業者をして各々其分に相應したる所を守らしめ以て心身共に其事を専らにせしむるにあり、心身共に其業に専らなることを得ば人各々其術に精巧なるを得るが故に善良なる貨物を廉價にて製造するを得べく勤勞の權衡を得て以て其報酬を公平ならしむることを得るや必せ

二 分相應の行を爲すは分業の原則なり

り。然るに他人の成功を見て之を艶羨し己か材の適否をも考へず直ちに之に倣はんと欲するが如きは只に其本人而已に利あらざるのみならず國家の爲めにも利あらざるなり、人々各々其稟賦に遵ふて適當なる事業に就き其天分の及ぶべき才を發展し其特長に據つて相協同するに及びて國家の文化は其極頂に達すべきなり、我天分を盡して自ら足ることを得ば成功したるなり例へば老巧の指物師は淺俗の詩人に勝り卓越せる染物師は迂腐の學者に優るべし要は其性を盡すと盡さざるとにあり即ち能く其性を盡すを得るにあり我聞く西人能く其分を守ると況んや東洋文化の中心たる我國に於て之を守らざるの理あらんや

三 分相應を行ふには眞面目ならざる可らず

分に相應せるの行動を全ふせんと欲せば眞面目ならざる可らず抑々眞面目とは言行一致することを云ふなり、言行一致せざるもの何を以て眞面目たることを得んや言忠臣行篤敬にして初めて言行一致すへきなり例へば中心に一點名利の私心又邪心あらば其自ら欺きて他をも欺くか如き者又空論に耽けり徒らに理想の高尙而已に誇りて其行動の野鄙なるもの何ぞ能く眞面目の行を爲すことを得んや、口徒らに之を言ふて之を身に行はざるが如きは眞面目の行動なりと謂ふこと能はず蓋し人の重んずべきは實行にあり故に聖人は先づ行を先にすと例へば完全無缺の眞理を説くと雖も之を實行すると能はざれば眞理無きと何ぞ撰ぶ所ならん然れとも言ふことは易く行ふことの難きは人事の常なり古語に謂はずや知之非難行し之實難しと心に誠なきもの眞面目の行を爲すこと能はざるや論なき而已、私行は人の眩ざる所に恐懼し人の聞かざる所に戒慎し能く其獨りを慎むに非ざれば何を以て眞面目の域に入るを得んや

れば眞理無きと何ぞ撰ぶ所ならん然れとも言ふことは易く行ふことの難きは人事の常なり古語に謂はずや知之非難行し之實難しと心に誠なきもの眞面目の行を爲すこと能はざるや論なき而已、私行は人の眩ざる所に恐懼し人の聞かざる所に戒慎し能く其獨りを慎むに非ざれば何を以て眞面目の域に入るを得んや

四 分相應と云ふ文字は消極的に非ず

分相應なる言葉は其分に相應して行へよ其分に相應させることは行ふこと勿れと謂ふにあり其行へよ行ふ勿れと謂ふは命令的、禁止的なるが世人多くは之を以て消極的なりと爲すものゝ如し、然れども分相應なる文字は消極的に非ざるなり抑々吾人が眞成の獨立を希望し自主せんと欲することを願ふは蓋し人情の常なり、然らば是等の希望を全ふせんと欲せば先づ自己の分を知り其分に應じて行動せざる可らず吾人は如何なる場合と雖も自分の分相應を知らざる可らず、其身分を知り力量を考へて其範圍内に於て一步も退かず頂天地立我版圖を保持することを期せざる可らず、斯の如くして甫めて個人をして獨立せしむることを得べきなり

夫れ一國の獨立は國民の獨立に基し國民の獨立は其精神の獨立にあり、國民精神の獨立は其分相應を守らしむるにあり故に國民の精神をして獨立せしめんと欲せば必ず先づ國民をして其分を知り而し

三 分相應を行ふには眞面目ならざるべからず 四 分相應と云ふ文字は消極的に非ず

て之に相應したる行を爲さしめざる可らざるなり

五 名利に流る者は分相應を知る能はず

分相應の行を爲すには至誠以て事に當らざる可らず自身の名譽の爲め利益の爲めに事を行ふに於ては決して其分に相應せる行を爲すこと能はざるなり例へば君に對して忠を盡すと雖も君の爲め國の爲めにして一身の名譽利達を捨て願みざるの確乎たる決心の存するを必要とす一身の名譽を計るが爲めに君に事へ一身の利達を希望せんが爲めに官に職を奉るか如きは決して其分に相應したる行を爲す所以の道に非ざるなり、分に相應したる行を全ふせんと欲せば一身の爲め私欲の爲めに圖らずして誠心誠意眞實を以て何事にも實意を以て活動し我が身の爲めと云ふことを忘れ又人の爲めにするに云ふ意思なく一意専心信實に活動せざる可らず、人の爲め我が爲め名譽の爲め功利の爲めにせんと欲する者は分に相應する行を爲すこと能はざるなり、古より其分に相應したる行動を全ふしたる者を見るに一點の功名心なく一毫の虚榮心なくして善く自己の本分を盡し其結果を自然に放任したるものにして諸葛武侯の献身的精神、ワシントンの仁慈的行動グラッドストンの純潔なる意思皆以て其の鑑たるものなり

六 分相應の確實性

吾人が其分を知り之に相應したる行動をなすと雖も斯くの如き行爲は果して其分に相應したるか相應せざるかは之を判断せざる可らず彼の行爲は斯くあるべし斯くある可らずとの確實性を具備する者ならざる可らず即ち過去の行爲に遡りて斯くの如き行爲は許すべきか、許す可らざるか斯くの如き行爲は有るべき行爲であるか有るべからざる行爲であるかを判断せざる可らず。然れどもカント學派の所謂宇宙人生の眞趣は斯くあるを要とする必至的要求にては未だ確實性なるとは速断するは非なり此必至的要求たるや假令其が吾人に必然にして已む可らざる要求なりとするもそは尙ほ事實に於て現に然かありとする直接確信に非ずして情意の要求又は假定たるを免かれず

彼人の行爲は彼の人の分に相應したるものなるやを判断せんとするには宇宙人生の眞趣は現に斯くあり現に斯くありと確信せざるを得ざる底の絶對的必至性を含めるにあらざれば未だ以て眞正に其分に相應したる行を爲したると謂ふ可らず

自己の本分を知り之に相應したる行動をなすも絶對的必至性を包含するに非ざれば其分に相應せざるなり分に相應せる行動を爲さずして禮儀作法を爲すときは其本體を失ひ虚禮虚儀となり却て人の感情を害するに至る又生活を爲すにも其分に相應せざるときは驕奢に流れ吝嗇に失せん又其分に相應せざるときは道を行ふと雖も知らず々々の間に慢學に陥り大學中庸の素讀さへ六ヶ敷者なるも己れは最

早道の眞意を悟りたる杯と公言するに至れるものなり是れ皆自己の天分を知らず之に相應したる行を爲すことを得ざるより生ずるものなり

人苟しくも人たるの道を行ひ人たるの義務を全ふせんと欲せば其天分を知り而して之に相應したる行を爲し其間に其分に不相應とする疑惑の秋毫だにも加はらざる底の絶對的必然性を包含せしめざる可らず、幽學諸國を遊歴すること二十有餘年の久きに渉る其間接したる人頗る多しと雖も其分相應の行を爲して此の確實性を具備する者は偶然の外曾て無かりしと謂ふ以て知るべし分相應の行を全ふすることの難きを

性理教會々員

明治四十三年 臘月

後學 高木千次郎誌

第四卷 分相應

第一章 總論及誓約

夫今天下泰平の御世なれば庶人におゐては孝を先として分相應の道をもて家内一つに和する時は自ら作る鼻無く富る事疑ひあるべからず亦其至れるに及ては御世泰平にあらむ限りを富貴を有たしむるの事にも至るへし其所以は親子兄弟夫婦の中に分相應の禮を以て能く和睦なれば其樂に其心至極穩なる者也故に他に出て若し人の淫酒遊樂するを見るときも我が家内和睦の情にひかれ其他人の眩マヤイに移らす其危きを通るゝ也且其心の穩なる徳には危き強慾杯も作事無く且其徳たる者農民は農業の手續き宜く耕耘事至る然は米穀自らに多分を得る也、又其和睦と業わひを樂む事に至ては物を費すに暇無く故に其富る事年々歳々に朝日の登るが如くなるべし

如斯なれば工も亦其業ひを能くし商も亦其客を能くす其餘の諸職民も其如く物を費すに暇無き事に至て富める所以は皆同し然は富は必ず和睦に有也、和睦は必ず禮を以てす、禮は必ず育ひを以てす育ひは則ち所謂物のほり合に善きを移すにあり

「細註」 故に趣意に庶人の修身齊家は必先物のほり合に人の善きには移て育ひ亦善きを移す事を心の法とすべしと云ふ也、亦禮も

くして唯家内の陸敷は淫犯飲酒或は浮るゝ類ひにして必ず後の災ひの種たる幽玄を能く知るべし
又禮もて和睦したる徳は天の爲せる災ひの外必ず事ひ無かるべし、又世間名聲の爲に禮儀を問敷ひれくりて家内中皆捨塊者にする
杯の其己が心の失禮を知らざる者は必ず亡るを見て知るべし其幽玄を能く味ふべし

又云ふ天下泰平にあらむ限り家名を全たからしむる事を知るには先づ災ひと成る事の起りを知るに
あり、其所以は大金を貯へ置といへとも災ひ重り重る時は聊か五年歟十年の中に滅亡する事世俗を見
て知るべし然は災ひを通るゝ事の覺悟も無く唯金銀を貯へるは無益なるべし故に災ひと成る事の起り
を知るは則ち子孫永續の元を知るの事なるべし故に其災と成る元を記す

「細註」災ひを通るゝ事に心附く事も無く唯金銀を貯へる事耳志したる者は其子や孫が其金を亡ふ事有る時は是を自ら作る事ひと
は知らず唯其者の心懸の悪きと耳心得て或は怒り或は罵り或は誣むるひと云ひ唯歎くばかりなる者甚多し見て知るべし、又金銀
多く有道の無き家に生れたる者若し悪きに移る時は其金を無くするも俗に云ふ常り前なる幽玄を能く味ふべし、嗚呼道無きは危々
時に堅固なる家杯の災ひの起り多くは其親子兄弟夫婦の中和睦せざるにおゐては常に心を痛る事耳
多き者也然るにおゐては若し人の淫犯飲酒遊樂するを見る時は忽ち是に移り或は迷ひ我も氣鬱を晴ら
さむ杯と終には深く是に溺れ其甚きは俗に云ふ迎もヤケノカハツヤ杯と其家其身を亡し或は稀に利得
したる者を見る時は是に移り其己が家身を亡す種たる事の辨も無く唯眼前の利を貪んとして其強慾の
爲に過時は利を失ふ事も亦甚し、又其強慾なる心の者元金迄も亡にする時は愈々激して愈々其家身を

亡す是等の類ひ舉て數ふべからず、是等の人は押なべて私慾に迷ひ天地と稱る大切なる父母の心を痛
める事だにも厭わざる如きの者なれば妻や兄弟の歎きにも朋友親類の憤りにも厭ひ無く或は強慾或は
淫犯或は飲酒、遊樂にふける者也亦其亂激さする事に至ては

「細註」己が淫犯飲酒遊樂に移り其妻や子供等迄も浮れ出しほうとうするも有り或は不義密通杯に凝る類ひに陥り家内中の者皆亂
暴となり終には其家名迄も失ふ事に至る也亦云ふ親の歎きも子の難儀も厭ひ無く淫犯飲酒遊樂にふける風情の妻子と成りては亂暴
に陥るも下愚の常なるを見て知るべし、然れば主人の淫犯飲酒遊樂にふけるは其妻子を其淵に捨つるの業たる幽玄を能く味ふべし
愈々親の歎きも子の難儀も厭ひ無く愈々亂放して互ひに或は捨塊或は被れ自ら作る事ひは時々刻々
なるべし、斯く成りては其作事爲事皆齟齬と成り則ちの鼻ひたる事に至り愈々是を通るゝ事能はざる

「細註」是れ世俗を見て知るべし
なり、斯く成りては何程大金の時へ有りとも何ぞ十年を有つへけむや故に是等の事に陥らざる規矩の
無き者の子や孫が家身を亡すは其者の心懸の悪き耳にあらず皆自ら作る事と云ふ者也、是等の危き
幽玄を能く知りて以て家名を全くする事を極めされば其身の存生の中も甚危し、是れ其鼻ひの元たる
者先は家内の不和に始り或は隣家隣村の人の惡みを受る事に至る迄も皆災ひの種たる幽玄を能く味ひ
知るべし、別して相續人の出來惡き時は亡る事杯は皆人の知る所なれども是を能くする事を知る者無

し故に子を好く育る法を知らざれば何を學ぶも皆虚事也

「細註」尤貪慾、淫犯、飲酒、遊樂する爲に賤賤ては必ず災ひの種と知るべし、其所以は是等の事をもて賤賤成る風情の者は其子簡蒙昧なれば唯其場の樂みを樂みとする者故或は貪慾より飲酒淫犯に移りて是に溺れ或は飲酒より淫犯強慾、博奕、盜賊に迄も陥る者也、是等の事を見て知る者ならば必ず分に應ぜぬ事と貪慾、淫犯、飲酒、遊樂の交りを以て唯む事勿れ必ず分相應の道をもて能く和睦すべし、是等の事を知らざる者は已れ丹誠して金銀を多く貯へ未だ其身の存生の中に其子や孫が其金を亡ふ時は是を泣き喚く耳なるを見て知るべし

抑々父母は子孫を憐み給ふ者なれば必ず先づ其父母の心を痛めん事のあらんを恐れて必ず先づ所謂危さを能く知りて其危さに陥らざる事を能くすべし其父母に奉事を以て家内一つに和睦し家業出精するにおゐては富めるとも衰へる事無かるべし、然るにおゐては飲食衣服杯に格別の養ひを以て爲すとすへとも唯其衰へざると其和睦とを悦び樂み給ふは父母の尊き所以也是を以て

「細註」父母の心を痛めん事を恐れ且安心ならしめむ事をもて家内一ツに和睦し年々歳々富めるとも衰へる事無きに至りたる所以は則ち孝行を先にして分相應の道をもてする所以なり

父母の悦ばしく樂しげなる其顔を見て家内の者皆是を樂みとする事に至りたる上には先づ饑饉の手當として其相應に雜穀を貯へ置くべき

「細註」年々心に懸け雜穀にても貯へ置におゐては饑饉といへども饑死する事無し是を貯へ置ざれば饑死するなるべし是れ唯眼

前の事耳を是として其近るべき事を通れざるは則ち自ら作る事なるべし、然るを俗人は何に附ても運が惡いと云ひ或は因縁也抑と云ふ者多し諸事萬端事は異るといへども均子定本にする時は皆同じ事也故に唯鼻の先の事耳思ふは則ち皆自ら作る事なる種たる幽玄を必ず能く味ふべし

夫れ運とはつればこふと云ふ義理にて饑饉にも餓死せぬ程の其行ひの善につれて饑饉年には却て金が溜る杯の善きはこびと成る也惡きに至るし此理に同じ、因縁とはふんによると云ふ義理にて饑饉の手當もせぬ程の者は唯眼前の私慾の強き事耳爲し置たる惡しき縁の有るによりて人に借る事なり難くこつじきに陥り或は死の杯善事も前に爲し置きたる事の縁次第也、又行を好して置くとも亡る時は亡る因縁と極りたる者なれば怨をかくは無益也毎日味能物を喰つて好に遊で暮す、徳なるべけれども毎日好の遊をして金を遣ふて計り居ては饑饉で無くとも餓る事に至るべし馬鹿丁簡もよいかげんにするがよひ也

事也並に先祖代々の恩金として其分相應に慥なる地面を求め置き其得分の年々歳々に積るを以て父母を樂ましむべし

「細註」是れ先祖や父母を樂ましむ金と定るにおゐては先祖や父母の有難き事には其子孫の世に至る迄も父母の恩深きを忘れざるの規矩と成り亦危きに陥らざるの規矩とも成るべし、又云ふ是を見て積金を求めん爲に強慾心を起し不孝や家内の破れを引出す事杯は眞平御免なり

然して自ら作る鼻ひ無く天の爲せる災ひの爲には何程貧窮する事有るとも患難の時は患難の經濟をもて世を渡り其利銀は少しも私に用ひずして是を以て増々地面を求むべし

「細註」 金銀無て喰はれぬ時は雑水にてもかゆにても喰ふて居ると心を極め若し其雑水もかゆも喰はれぬ時は水を呑で居ても勤むる事を勤めだにすれば快しと思ふ者は則ち君子の志と云ふ者也、其勤むべき事を勤めずして破れたるおんほふを身にまともと恥しからず杯と云ふて君子の眞似するは下耶魂生と云ふ者なるべし見て知るべし、又強慾の爲に鹿食を喰ひ或は先祖に授けたる金銀地株の費るにも厭ひ無く或は美服美食杯好む類ひは俗に云ふ非人乞食同様の志なるべし見て知るべし、小人は天の爲せる災ひ有る事の覺悟も無く唯鼻の先の慾のみ強き者なれば若し災ひ有りて窮する時は怒り是に亂激して富貴の行ひも患難の行も雜にして毎日其工夫に心を困しめ暇を費し滅亡して仕舞迄も工夫ばかりして居る者なれば時に此先祖の地面は利足に見て五分にたらず何々ほもふけの有る商賈なれば當時此地面を賣代なし此商ひなして大金を得て後ち此倍々の地面を求め子孫に残すべし杯と終には其規則を失ふ者なるべし故に道なきは甚危し、又云ふ大塚の節籠の降る杯天地すら急變有り況や人の身におめてなや故に必ず先自ら作せる學ひの種を亡くして後ばもし天地の爲せる災ひ有る時には遁るゝ手段常に齊へ置るべき事也

然るを愚俗は災ひの用心杯をんきわると云ふて其の用意をせざる故に災ひ有る時は必らず亡ぶ、是におめて俗に云ふコヘイカツギは必らず身上を亡すの種たる幽玄をよく味ふべし、まんきはよくとも悪くとも二十年の中を押ならして登萬上る土地は登萬上るべし、又二十年の中押ならして十萬兩上る流場は二十年に十萬兩上るべし故に災ひ有る事の覺悟を極め其の災ひを遁るゝ用意をする者は二十年の中に必ずまんきわると杯たわひも無き事を氣にして用心もせざる者は二十年の中には必ず衰亡する也、是等の人は寶の山に登るとも空しく金玉を得ざる事世俗を見て知るべし

亦患難の時は患難相應の經濟を以てする規矩を定め其規矩の範圍内には若し災ひ有るとも其患難に陥らざる時をする經濟を能くすべし

「細註」 金銀を貯へるは災ひ有る時を凌ぐべき爲に貯へ置る也然るを其覺悟も無く貯へても増々大金を貯へる事耳して若し災ひ有りて金の費る時は遣ふ間敷事に遣ふよふに心得或は口やかましくして家内の破を惹起す杯規矩繩の無き者は動もすれば五年、十年に滅亡するを見て知るべし

又云ふ物見遊山等の爲に貯へる金杯是に一段下愚なるべし、災ひを凌ぐ爲に貯へるの金を貯へんが爲に激して災ひを引出すは亦是に二段も下愚なるべし

其經濟を能くしたる上は若し災ひの有る時は其度毎に其災もて却て後の幸の種とすべし

「細註」 父母の悦ぶ顔を見て家内中の者皆是が何よりの樂みと思ふ程に至らざれば其家内の中に災ひに亂激する者杯出来る風情にては災ひをもて幸ひの種とする事杯は及も無き事と知るべし

又所謂父母に事をもて家内一つに和睦して以て若し後に災ひ有る時は凌ぐべき時へを能くし其災ひを以て後の幸ひの種とする規矩を立てる事に至ては愈々富貴に至るべし

「細註」 欲を去りて道を守るにおめては求めずして如斯自ら富める也然るを夢中に金銀を貯へ度思ふ者は愚也と云つべし又拙しと云つべし恥つべし云々

亦斯の如く富めるとも衰る事無き規則を立てたる上は其規則を能く得たる友人數多なくんば子孫全き事極まるべからず、其の所以は天地萬物の變化として或は主人若き中に死る杯有て規矩を失ふ事も有り亦子無き時もあるべし長き世には是に類ひする災ひの無しと云ふべからず、もし其災ひある時に

至ては道を知らざる人杯に唯當時の事耳旨とするの世話に被る時は必ず其規矩を失ふべし又其規矩

「細註」老人も無く若後家杯に任せる時は猶々其規矩を失ふ然は心路にある人の世話にあづからずんば其規矩を失はざる事難し故に友人無きは甚危し

を守る事を得たる友達をしてもし災の有る時は子々孫々に至る迄も相互に是を救ふべき誓約の者數多有れば其中には其規則を守らしむる事を能くする人も出べし然れば其規則を失ふ事も無かるべし

「細註」其規則を守らしむる事は則ち絶繩といふ者也

然れば先づ子孫全しと云ふべし然とも其三世重縁の誓ひにあらすんば年若き主人や若後家の世と成りては富みたる者程なほ危きを遁れ難し其所以は暮し貧しくて常に其貧に困む者だにも遊藝、飲酒、遊樂は好む者なれば暮し寛かなる者は猶心の緩み勝にして遊樂も少しは醜散の爲め杯と思ひ是に入り

「細註」獨子或は虚弱病症の者杯は猶更也

初ては一度は遊び二度めには樂と成り三度めからは漸々と其面白きに浮れ出し知らず識らず其深淵に陥るは俗人も知る所也別して淫犯杯は發して忍び難き者にして智識も是に迷ふたりと世に言ひ觸れたる事にしてもし是に入り初ては常人の慎み得べき事にあらず然ればもし家内の者皆浮れたる中に包まると時は若き主人杯は知らず識らず是に移り終に大ひに亂れ初ては誓約の人の誠も用る事成るべき所以無し如何んぞ有つべき所以のあらん哉、斯の如くなる者な

「細註」淫犯欲酒杯は主人正しくてさへぬけつゝつゝ亂るゝは下惑の常也況や主人若ければ其面白かるに附込みて浮れ咄しなする者多し、又若き時には主人顔にて口の先には慎めども心に専ら是を犯す故に其色面に顯れ浮れ咄し杯を聞く時は必ず笑みを含む者なるべし、下さまの者亦其圖に乗り以前は主人の前に恐れたる者も斯く成りては恐るゝ氣色も無く家内悉く亂るゝ者也朝より夕迄亂れたる中に襲るゝ時は今日より翌日と漸々浮れ終には浮れ咄をする者可愛く思ふ事に至ては已も終に其情瀾亂暴に陥る者也危々淫と酒と強慾とに深く陥り是れ程樂みなる事は世の中に有りはせぬ杯と思ふ事に至ては釋迦如來が元服して來て誦るとも用ゆべし、らす況や誓約の人の誠め如き用ゆべき所以無し又云ふ其大亂の始めは多くば、狂言手踊り、淨瑠璃、長唄、三味線の類ひ總て人の心の浮るゝ遊樂より起る事十にして九也、是れ信女も破るゝ大敵なるべし

れば其節に至てもし馬鹿なる子が出来るにおもては遺言すとも書殘するとも愈々有つべき所以無し

「細註」是におもて懲耳が思て思ふて居てはならぬ事を能く明らむべし

然れども亦是等を能く有たしむるには斯くの如くの災ひの來らざる中に必ず先づ所謂孝道より導き家内の者をして皆常に其道心に居らしめもし其災ひ有る時は下奉公人に至る迄も其災ひを愁ひて家内中の者皆愈々正しく成る程なれば誓約の人の助に依りて有つべし

「細註」人の家も我家の如く實に大切に思ふ事お互ひにする事に至ては則ち子々孫々の後に變動有りとも道を繼がしむる行ひの本を立るの亦にして幾千代經るとも其道を繼がすと云ふ事無し、自分の身代自分の好きにする事ならぬは大丈夫也

然れども亦能く導きて置くといへども淫犯、利慾、怪力の類ひに迷ひ安きは女子小人の常なり是等の

風情としては道理は知るとも微味幽玄を能く明らかにせざる中には戯氣事に遊ぶよりも道を守る事は
大儀に思ひ或は飽倦或は退屈する者

「細註」道の幽玄を知りては戯氣事の如きは唯危きはかりの事にして面白くも無き者なれば是に飽き退屈して其戯氣をしては居ら
れぬ者なり

なるべし故に主人若き歟若後家の世と成るとも其奉公人に至る迄も所謂正きに居らしむるには必ず先
づ幼児の時より其道に包まれ其中に育ち知らず識らず心焉にある程ならでは誓約の人の誠も用ひ難か
るべし又云ふ幼き時より道に飽き退屈するが如きの中に包まれて育ちし者杯の飲酒淫犯の深き淵に陥
りたるを強て異見する時は其誠を蜂に刺るゝ如くに思ふ者なるべし

金銀を湯水の如くに遣ふ時は四方八方から旦那様く〜と持離て至極心地よかるべし亦其來る人も
々々氣に入る事を云ふ人耳にて是を極樂世界へ出たる心地のする事にも至るべし是に至ては口に苦き
良薬よりも己を殺す毒薬にても好なる者には替られぬ杯の事と成りては愈々誓約の人の顔を見るも嫌
に成るべし斯の如く成る其始めは少しの心の緩みたるより起る者にして俗に所謂由斷大敵の元な

「細註」道を知らざる者共は少し緩みしと見附る時は其好む所より附込んで俗に云ふ深切こかしにする事は押なへて關東の者より
も上方者の上手也

るべし危々然れば少しの中にも道に離れたる時に至て急に主人を亡び危かるべ

「細註」心焉に無き者は幼き時より歳五十に至る迄も讀書を業に博覽して道の奪き所以を感ずれば感ずる程其己の至らざるを悔
ほどの人達すら文首の者に對する時は是を慢り杯して道に離るゝ事多し亦五十年來博覽してさへも幼き時より道に染まり其れ相應
に心に有る者にあらざれば斯の如くの拙き過ち有り況や其若き者をや

心焉に無き者の年三十に至らざる中は唯早呑込と我慢の強き者にして智慧の器のせまき者なれば一寸先もはからぬ辭に思ひ附きた
る事有る時は是より外に善き了簡は無ひ杯と思ひ誰か何と云とも人の云事は皆違ふよふに思ふ者也其我慢の無き者は一寸先の見へ
ぬ人の了簡にて災ひと成る事を云ふとも己が好む圖に當れば是を御尤至極と聞取り早速是に移る者也其類の危き事歎るに暇無し故
に此一理をもて能く萬事通ずべし、又云幼き時より道の中に染らすといへども心焉に有る迄を學びだにすれば過事少し心焉にあらざ
る中に父母に離れ主人とならば危し故に人の内に常に道無きは甚危し唯々道無き事を懼るべし

し亦其危きを知りて片時の中も所謂孝行をもてするの道を以て子孫末々迄の事を誓ひ其三世の中も其
道の爲に重縁と成る程になれば其道に包れ其中に育つ子は則ち心焉に有るべし、然ればもし若き主人
の世と成るとも又若後家の世と成るとも其誓約の人の言は能く用るなるべし是を以て天下泰平にあら
む限りは世々富貴に至るとも衰る事無かるべし

子曰危者安其位亡者保其存者也亂者有其治者也故君子安而不忘危存而不忘亡治而
不忘亂是以身安而國家可保と云々と是れ其危き微味幽玄を能く知り須臾も道に離れずして大丈夫
に安心して治る所以也

第二章 富貴貧賤の別並に株の事

富貴貧賤には其分相應を守るの差別あり其大半は常人の知る所なれば其相應を知りて是を守る積りの人は多しといへども唯當時耳分相應にも似たと云べき耳にて其子孫の世に押渡して是を見れば其過るも有り亦及ばざるも有也、尤近江國長濱の邊りに其中を知たる者一人あり亦阿波國徳島の南立江村にも其一人有り、時に天保九戌年迄子の遊歴する事二十五年也、其上方關東押なべて對したる人は幾萬人と云ふ事を知らず其中に其分相應を行たる者此二人の外に嘗て對せず、亦此人達是を自慢して子に語るといへども然れども是等の俗に云迂當りなる者歟、誓約の人も無し其子孫嘗て是を用ひず故に其後は危し亦此人達子が學友にもあらざれば此迂當と云ふを聞けば悪口と憤りのあらむを恐れて其名を記さず、然ども亦此人達の言は庶人の修身齊家におゐては上方關東押なべて衆説の兩端を執る其中に當る也是におゐて能く是を觀れば則ち神聖の教の儘に當る也故に是を庶人の子孫を有たしむるの分相應の規矩として是に記す者也

「註」 時に農民は所謂先祖の惠金として積置きたる地面銀五貫目の株に積るとも其暮し株三貫目なる時は則三貫目の身上と心得其れ相應の經濟を能く守るべし以上も皆是に倣ふべし尤其經濟を

能く守て後其積立金若し暮し株二双倍にも成る事あらば其三ツの一分を謹で先祖に申受も宜しか
「細註」 尤災ひを凌ぎ或は賭博遊逸も遣ふたる上にもし其積金の積るよりも早く金が溜るにおゐては其家必ず亡ると知るべし亦云ふ富貴に至る事も天の陽氣の施して萬物自らに生實する如くの道をもてせずんば守ると云ふ事を知らざる故に有ち難き幽玄を能く味ふべし

るべし、又暮し株六十貫目以上に成りては積金の利半分は必ず鰥寡孤獨を救ふの分に當置くべし
「細註」 何某の積株の利分難達の者を救ふ分と人も知る事に至ては小作年取立にも世話少かるべし是れ亦大身上を有つの一助と成るべし、身上大きく成る程持難き幽玄を能く味ふべし

其餘り半分は何程積るとも必ず積置くべし、然して後は天の爲せる災ひの爲に若し滅亡する程の事あらば所謂誓約同志其積金を持集りて其れ相應に元の如く取立る事相互ひにすべし

又云ふ所謂先祖の惠金株共に一萬三千兩に及び地株に至る迄の中は主人鋤頭を勤る事を必ず規則とすべし、其所以は三千兩五千兩と其株の増すに順ひ其れ相應として或は遊藝に達したる妻を娶る事も有り或は酒宴遊樂にふける杯の親類も多く出來る事も有るべし、然る時は其深き淵に陥る事亦々多し危々、然れば耕耘杯を奉公人に任せ其身は常に上品に暮す者杯は愈々危し故に暮し株七千兩近く成る迄の中主人の鋤頭を勤るは則ち謙を以てするの所以也

「細註」 以上の身の行は後に記す

第三章 暮し株の多少に由る分相應

第一項 銀三十貫の暮し株を有する者の分相應

時に銀三十貫目の暮し株を持ちたる身分の者奉公人一人り使ふを規則とすべし

「細註」 尤奉公人を使ふは差支へ無くして唯規則を守るの爲に使ふ者也利を得る爲や外見や寛樂の爲に人を使ふ者は必ず亡るを見て知るべし必々私事に奉公人を使ふ者にあらずと知るべし

「註」 又云ふ此意に差ふて我が家は此頃の事なれば奉公人杯を使ふは分に過る也別して奉公人を使ふ時は自然と氣高く成りて終には奢りの志起るも危し杯云ひ亦我身上は漸々の事に是迄に取立たる者なれば守る事こそ大事也杯と云て奉公人も使はざる者あ

「細註」 三十貫目も地株を持って奉公人も使はざる氣位の者は義理にも重儀にも少微^{サビ}して人の惡みをつくする故其金の溜るに隨つて村事賄勵化等に至る迄も金を出す事を格別無理に勤められ杯して出す振見せてはなるまい杯と漸々少微する故に其子供等は世間へ出ても面目無く思ひ親に隠して男振する事杯に至ては其少微が則ち家を亡すの種なるべし、是におゐて困窮の者の子供杯は猶更ら疲我慢の出る幽芝を能く味ふべし是を知らざれば生涯富む事無かるべし、亦二代めも其如く少微するにおゐては其顔を見たる事も無き者迄も是を悪み八方から災ひ起り亡るを見て知るべし是におゐて分相應を知らざれば危き幽芝を能く味ふべし

り、又三十貫目の地面を持って奉公人一人り耳使ふは損也二人りから上へ使はざれば利薄し金銀

を遣ふ事と衣類だに分相應なれば奉公人を多く使て利得るがよひ杯云も

「細註」 奉公人を多く使て利得におゐては其家内の者則ち是に乗が來て自然と大暮しが好になるべし故に其金の溜るに於て自然と世間も廣く成り義理も重儀も多く成るべし故に其名跡は器量^{ケリヤウ}の無き者には持たれぬよふに成る也然れど急に金を利得ては則ち其子孫の世に至りては自滅するの種となるべし、又子供の中より大暮しの中に宵ちし者杯は物を藏する事杯は氣も附ぬ者多かるべし、又云ふ二代も器量有て其勢ひを通じたる跡は器量のある者といへども浸き得ずして自滅するを見ても知るべし

有る也此兩説其地風に適當すれば一旦は利もあるべし亦其當時は分相應にも似たれども然れども是等の人は唯、當り前の利得、唯當り前の分限相應を考へたる耳の事にして子孫の世に押渡して見る事能はざる風情の者なれば其衰への早さを見て知るべ

「細註」 是等を見て知る者ならば必々子孫の世に押渡るの法則を以て若し馬鹿なる子にても守り安き有ち安き事を能く行ふこそ大事なるべし唯々鼻の先の慾を搜すは危し

し、亦三十貫目地株を持ってば人に金持顔をすると思はれ間敷き爲に奉公人も使ひ得ざる程に謙退る馬鹿用心なる者も有り又三十貫目の地株を持って少微すると人に笑はれん事を嫌ふて奉公人迄多く使ふ者も有り此兩説既に心の奢の生じたる者也

「細註」 是等に限らず是に類したる者は皆愚俗名聞の爲に唯鼻の先の繕ひを専らとして其分限相應に心附きもせぬ如きの者故に其家には必ず災ひの種生じて有るを能く見るべし

又云、此四ツの類ひを行者は衰亡、富貴、貧賤と變化するに其變化の遲速は有りといへども是等皆唯當り前の事に暗まされて先祖の恵にも親の恵の深き事にも心を入れずして愚俗等の名聞には深く心を用る如きの者なれば子孫を有たしむるの目的も無く其規矩も無く宜きも悪きも出來次第なる行ひをして其子孫何を富貴を有つべきのいわれのあらんや且此風情の者保つ者有や其亡びざる者有るや見るべし

「細註」下愚は金の溜るに従つて氣を附けざれば甚危し其所以は今日利足が是れ程來て今年も亦五十兩貯る杯嬉しかり家内中明ても暮ても金の溜る事耳語る事に至てはいつも無しに親の悦ぶ面を見るよりも金を見るのが樂みと成る故道も規則も失ふなり又其身分と成りては四方八方より俵らばれて知らず識らず慢心して終に分相應を忘るゝ也、然るにおゐては富たる者程猶々有つべきいはれ無し故に金の溜るが面白く成りたるは必ず其子孫滅亡の種たる幽乏を能く味ふべし

第二項 暮株六十貫目の場合

暮株六十貫目の地株を所持する身分にて奉公人二人り使ふを規則とすべし

「註」然らずんば甚危し其所以は暮株耳にて千兩と成りては自然諸用多くして農業も自然と怠りがち也農業怠る時は則ち養生して飲酒、遊樂の淵に陥るは愚俗の常なり

「細註」其幽乏愚俗の成り行を見て能く味ふべし又小人閑居して不着を作すと云へり小人の暇の有るも身上を亡すの種と知るべし、然れども忙がし過るも亦身上を亡すの種也、此兩説の幽乏を能く味ひ能く知りて必ず法則を定むべし

り、其の節に至て若し名主役杯を勤むる事有時は暮し方賑ふ程猶々田畑へ出る暇も少なかるべし然る時に當ては富みたる者程猶々心緩みて一時や半時を農業するとも聊かの事成るべし殊に名主

「細註」農業は聊かなれども其農業せざる志の者は大變なるべし

役を勤る身は所々方々へ出る者なれば事馴ざれば恥を曝す事もあらむ杯と心遣ひして一時歎半時の暇も其事に利口なる人と語る事を好む事に至るべし、然るにおゐては愈々田畑を見廻る暇も無かるべし又公事杯に利口なる者は必ず高ぶり或は奢り杯其身上を亡す事杯は能くすると親先祖の恵或は子孫の難儀に成る事杯には心を用ぬ者必ず多かるべし、是

「細註」公事杯に利口なる者は其一世は有つ者もあるべけれど其利口を自慢する風情の拙き志故に其威に誇り終に奢の淵墜り其子孫は所謂自滅するを見て其幽乏を能く味ひ知るべし是を知らずんば危し

等のことを好む事に至ては則ち是に移りたる者故唯氣高して立派なる風にだに有れば所謂大馬鹿者も能き人に見ゆる者なるべし、是れ其心は則ち大なる奢也故に其好事遊藝も武家の業を好む杯に至るべし、庶民の分として斯くも高調子に登りては其客來の爲に別に上の女を使ふ事杯に至るべし、然るにおゐては妻娘共は猶一寸先も見えぬ者なれば飯炊く業杯は爲さぬ者と心得客饗應も上品にする事耳に心を用ひ其上品に自慢顔する事に至ては其家に出入する者御追従の爲に御上の

御流下の者と唱へらるゝ事に至るべし、斯く成りてはいつとも無しに内證衰へ世間は増々廣く成るべし其名跡は器量の有る者といへども有ち得ずして今年より來年とびんぼうに自滅するを見て知るべし故に慾に

「細註」金有る者に氣に入らるゝを手柄と思ふ者杯々來て色々様々の怪力亂神の珍敷咄を拵へ來りて語も有り又御道徳の爲に御上様御家様と持離されて何方歟有つべき所以あらんや、又唯當り前の損益を考へ奉公人三人四人を使い急に身上の登る時は世間の評判も高く成り其勢ひに思ひかけ無き客來も有り義理も重儀も多く成る事も亦盛るべし、然れば急に身上を符すば其子孫の世に至てそろ／＼びんぼうに自滅させるの種なるべし然るを少し遊金有る時は留主居ながらと名附て質を取るも有り或は醬油を作り其子共等に帳面の手傳ひをさせ杯して終になまけ者にして亡ぶるも有り皆守る事を知らざる所に能き身上を峰の葉の如くにするもの多し

又積金ともに二千兩からの株と成りては二百兩や三百兩は遊金無くてはならん者也然るな金の遊ぶを吝みて金の有丈地面を買て仕舞も有り是等の人はもし金の入用有るときは不都合故に氣をのみて學を生じ則ち是を必ず學ひの種とする者甚多し然れば其如くに慾の深きは則ち子孫を亡ぼすの仕度なるべし、故に二百兩や三百兩やの金を遊ばして置く事を吝く思ふ風情の者は六十貫目以上の身上は持たれぬ幽芝を能く味ふべし亦此株と成りては其村内に三十兩や五十兩は年中借し置くも善とす以上皆是に做ふべし

離れて以て此主人として唯鐵頭を勤め居る程の丁間の者は能く大事を守る也亦千兩や二千兩の

株にて百姓業もせざる丁簡の者と慾の河の深き者とは小事も守る事能はざるを見て知るべし

第三項 暮し株百二十貫目の場合

暮株百二十貫目の身上と成りては奉公人も男二人女一人使ふを規則とすべし

「註」奉公人三人にて女二人男一人使ふ杯は甚危し、其所以は暮株耳にて貳千兩を所持する身分と成りては男一人を諸用小使に當置かすんば農業未熟に成るべし主人も亦多用にして耕耘する暇も少なくなるべし然る時は主従をして大切なる規則の本元を失はしむる事に至るべし是に至ては

「細註」手廻し悪き時は據無く人を増す者有り是れ其據處無きと云ふ心は則ち心の奢也其心の發する幽芝を能く味ふべし、然らずんば亡る淵に陥りたるも知れぬ者なるべし危々唯々幽芝を能く味ひ知るこそ大事なり

知らず識らず奢りに移りたることなるべし一人り限りの女を使ふ者すら上の業の多き時は富みたる者の妻杯は下の業はせぬ者と思ふ事に至る者也況や女二人使ふにおゐては常の多用に紛れて其一人りは終に上ミの女と成るべし故に知らず識らず規則を失ふ也是れ主人も女房も共に規則を失ふ事に至ては忽ち亡ぶるなるべし故に人を使ふて夫婦の規則を守る爲と耳心得べし必々私に奉公人を使ふ者にわらずと知るべし

「細註」年々歳々に徴録して最早五年歟三年の中には家藏迄も毀拂其跡は菜畑とに極りの附きたる身分の者すら酒は止められぬと云ふも有り又遊藝も是ばかりは止られぬ杯意地の穢き者多ければ其暮し大勢にして其勢ひの盛んなる者程猶々規則は守り難

るべし然ばとて其心の緩み勝なる身分の者は不自由するはいやと云も尤なるべし嗚呼事を知らざるこそ危々
又云ふ其守る事を得たる者すら奉公人を置くに男二人女一人り使ふべきを男一人り女二人り使ふ杯是じきの事にても知らず心
に奢りの生ずる者なれば規則無き者は長く富を有すべきいわれ嘗て無し、怒に離るゝ事ならざるも則ち心の奢なり其幽玄を能く
味ふべし其小々き風情の者千兩以上の身上を有すべきいわれなき幽玄も亦能く味ふべし、都て千兩より三千兩迄の身上と成り忽
ち覆る所以は皆是等の危きを知らず且又道に當る規則も無くして勝手の規矩をもて拘り定本にする所以也

第四項 百八十貫目の暮し株の場合

百八十貫目の暮し株を所持する身分と成りては古く使ふたる者一人入作の世話旁々是を番頭として
外に男二人女一人都合四人の奉公人を使ふを規則として主人は必ず鍛頭を能く勤むべし

「細註」 尤常に奉公人を能く育ひ導きて此株に近寄るに随ふて其奉公人共も漸々忠義深く成り家風も能く知り其忠義の志もて世話
能く行届き此株と成りたる頃には自ら番頭と成る程の道無くんば是より以上の身上は持つ事能はざる幽玄を能く味ふべし

「註」 又其家に道なければ古く勤めたる者はあるとも其道心に居る者にあらずんば小作年貢取立
の下手もあるべし亦其不正直も有べし、然るにおゐては主人小作の取立杯に世話を増し愈々農業
に出る暇無く終に其規則を失ふ故に道な

「細註」 道も無く富みて大丈夫と心得或は田畑を多く求杯して小作の人に附込るゝ時は人氣悪き杯とつゞき其田畑の多き爲に
亡る杯の者有るは常に道無き所なる事を能く味ふべし亦道も無く急に富たる家内の者は唯其當座の花に浮れ或は慢心或は高ぶり

杯して奉公人を育ふ事無き故奉公人を抱へたるは盜人を飼ふたるに齊しく心の免されざる風情の者三千兩以上の身上を有つ事を
得べき所以なし、世俗を見て能く味ひ知るべし

き者は必らず亡ぶ、是におゐて所謂孝道より導き其家内一に和睦し自らに富みたる者は千兩以上
の身上と成とも危からざる幽玄を能く味ふべ

「細註」 是を以て貧窮の頃より家内の者を能く導きて以て所謂父母の悦ぶ顔を見て家内中の者皆は何よりの樂みと思ふ事より
其家内一に和睦して以て自らに富みて片時の中も其道に愈々離るゝ事だに無ければ幾萬兩の身上と成るとも危ふからざる所以を
能く味ひ明らむべし

し故に奉公人を他人と心得使ふ風情にては千兩の身上と成りては甚だ危し亦奉公人も我子の如く
可愛く思ふ程の信を以て所謂孝道より導き置くにおゐては此時に至て古く居る者は必ず善き番頭
と成るべし亦其小作の人の取扱も善くして主人の世話も無かるべし

「細註」 奉公人を能く使ふ所以と道も無く富みたる者の危きを通るゝ事杯は幽玄考に往て能く見るべし、尤道も無く急に富みたる
者は覺も無く氣の高き者故貧窮の時より道をもて自然に富みたる者程には危きを遁るゝ事安からずと知るべし

第五項 二百四十貫目の暮し株の場合

暮し株二百四十貫目を所持する身分と成りては右四人の外に古く勤めて家風を能く知りたる老婆を
ば飲食煮炊の賄人として鹽味噌の世話に至る迄も是に任せ置き主の夫婦は必ず規則を守る事耳を職と

すべし

「細註」此身分と成りては番頭杯奉公を引き度く思ふとも旦那の世事の御下手が目に見えて我が引きては跡が苦勞に思ふ程に導き老婆も亦御家様は賄ひが御下手のよふ跡が苦勞に成て御暇を貰ふとも得云わす杯番頭も賄ひ婆も金銀の如くの忠義に心を止めさせる事に導く程にあらすんば甚だ危き幽玄を能く味ふべし、又其家に道が無ければ是を任せて宜き婆も出來ぬなるべし、尤常に道有りとも歳五十以下の色慾深き女杯には必ず鹽味噌の世話迄を任する事勿れ是におゐて是れ程の身上と成りては其善き巨無くんば俗に云ふ其身上の字羅のとまりと成りたる幽玄を能く味ふて必ず覺悟を極むべし

「註」規則の如く散財有るとも十四五年の後は暮株三百貫目と成る事を見極めたる時は番頭に談しの上にて右五人の外に十二三歳に成りたる静なる男子を選び是を十五ヶ年季と定き首尾能く勤めし上は相應の地株を與へ別家爲べき約束にて抱へ能く愛し能く導きて其身に勝る程にも育てべ
「細註」此十四五年の中は愈々大切なる時なり故に是に至ては右五人の輩を猶々能く愛して以て育ひ導き其童子をば其傍輩とも愈々愛ひがらしむるこそ大事なるべし然らずんば若し互ひに嫉み猜むことに至りては忽ち忠義を失ふべし危々
し亦た此童子を能く導きて廿三四歳と成りたる頃其道心を見極めて番頭と此若者にとに談んじの上にて左の如くに童子を抱ゆべし其年

「細註」童子の時より導びき置きたる者といへども廿三四歳如きの者を必ず番頭と爲すべからず歳三十以上と成り年季明と成りても跡を苦勞にして別家とせずして勤むる程の忠心の者に仕立て以て番頭とすべし斯く成る迄の中は一季勤の奉公人を能く導き

て五十歳前後の者をして番頭とすべし、一季勤めの奉公人にては所謂金銀の如くの忠臣に導く程にあらざれば年季奉公人も善きに導く事能はざるの幽玄を能く味ふべし

季を勤むる同志は愈々兄弟の如く睦む程に能く育ひ導くこと大事なるべし是に至ては其番頭共若し老ひて役に立たざるとも必ず見捨る事勿れ必ず是を隠居役として其給金は上るとも必ず下る事勿れ是れ眼前には損に似たれども若き者ども是を感じ能く勤むるの志を起さしむるの大事也

「細註」尤上方の者におゐては年季勤めの者に對しては童子といへども是を敬ふ氣味有り亦傍輩同志は一年にても古く勤めたる者は氣強き氣味有る故に年季勤めの者と古く勤めたる者とは良しすれば隔心と成る事多し若し其隔心と成るにおゐては大切な規則を破り滅亡する事世俗を見て知るべし故に下奉公人迄も育ひ導く事の須臾にても離るゝ時は必ず亡る幽玄を能く味ふべし

第六項 三百貫の暮し株の場合

暮し株三百貫目所持するに至りては先祖の恩金株共に一萬兩の地株とも成るべし斯く成るに隨て面々役々の極り有とも其主人は多用にて愈々田畑へ出る暇なかるべし故に此株に至らざる中に必ず先づ所謂年季奉公人を能く育ひ導きて立派に頭を勤むる程に仕立置くべ

「細註」是におゐて鼻血の出る迄金もふへばかりして居たる者の子孫は有つべき所以無き幽玄をよく味ふべし
き也、然る時は主人耕耘に出る事無くとも規則を失ふ事無かるべし、然かして後は金

「細註」尤道を知らずして唯働けばかりの者頭を勤むる時は是と共に働かざる者捨杯して自然と其規則を失ふ事にも至るべし、十二

三歳の頃よりして親の悦ぶ顔を見るは何よりの樂みと思ひ人に愛ひがられて十四五年の中也其育ひにあずかる者は忠義則ち金鐵の如く成るべし然におもては危き事無かるべし唯々自然の道こそ大事也

二千五百兩の地株を貯へ其利分を能く勤めたる奉公人に遣はす分に當置くべし然かして五百兩の地株の一少年の利分を通ひ勤の者二人の給金に當つべし

亦十五ヶ年季を首尾能く勤めたる奉公人に遣す分は五百兩の利銀十五ヶ年積置き其金を以て別
「細註」 是年季者に多く當て置は若し氣の浮れ勝なるを能くしんばうさせんが爲也且其年季を勤たる者の子孫の世に至る迄も主從の縁深からしめんが爲也

家なさしむると定置五年め々に十五ヶ年季の者一人宛抱へ則五年め々に一人宛別家を出すの規則とすべし是が爲に一千五百兩の株を當置くべし

亦残り五百兩の地株一少年の利分を三ツに割り其一分をもて老悖るゝ迄勤めたる者に遣す一人分と定め置き是をもて奉公人の老悖たる者三人迄は安々と養ふべし

「細註」 是亦一季勤の奉公人も能勤るの種を時く所以也

亦云ふ若き時より忠勤たる者にては今は老悖て勤く役に立ぬ故是を夜番として前子木廻りをさせるがごとく少微々々する魂生の者は一萬兩以上の身上は有つ事能はざるを見て知るべし

故に若き時より忠勤したる者は老悖て役に立たずとも右五百兩株の利分をもて客人の如く養ひ置くべし此の幽芝を能く味ふべし

尤其老悖共は世間の風評或は小作人の風評或は家内奉公人の善惡邪正を聞取る爲の穩密として此人をもて危きを遁るゝの杖とすべし

「註」 亦云ふ老悖たる者を斯く養ひ置くにおもては元より導れて若き時より忠勤なる者愈其主恩を感じ忠義愈々金鐵の如くと成るべし故にもし主人の規則を失ふ事歎亦危き機しにても見聞時は是を苦勞にして主人に對し密々是を語る事に至るべし亦斯くも忠

「細註」 其苦勞にして是を人の聞かざりて遠慮して密々に語る杯の深切は實に潔白なる所以を能味ふべし

亦汝に穩密を頼といわれて勤る穩密は則ち眞實々々杯の爲に潔白ならざる事多かるべし

此兩説をて常に道に離れざれば身を修るよりして富貴を有つ幽芝と亦少しにても道に離る時は其身修らざるよりして其家身を亡す事に至るの幽芝とを能く味ふべし

「細註」 亦云都て千兩以上の身上となりては頼まずして右如く穩密たる友人の有程ならでは甚危し然れども亦御道徒の爲に穩密振して人を誹謗する類ひを眞受にする風情にては猶々危し故に道を知らざる者杯は長く富貴を有つべきいわれの無き幽芝を能く味ふべし

義の切なる者は必らず己も知らずして自らに能く人を導く者也其幽

「細註」 是趣意に所謂其善きの自然と人に移りて自らに導く所以也

立を能く味ふべし故に其老悖の類ひ迄を養ふ分として暮株の外に地面を當置くは則ち子孫永續の

元と知るべし然ども亦其育ひ株も分不相應に當置くも亦危し其所以は斯の如くに養ふ者を五人六人と置くにおゐては其風評の善きに隨て格外人に尊敬せられ自然と世間愚俗のつき合廣く成りて五千兩如きの株にては其暮し不足する事に至るべし故に尊敬せらるゝも亦善き風評にあずかるも分に過る時は必ず滅亡の種たる幽玄を能く味ひ知るべし

「細註」是におゐて儉約も仕過る時は猶々危き幽玄も亦能味ひ知るべし

是に至ては番頭も上の女も別に抱へずといへども練り揚と成りて自ら其職の其身々々に備

「細註」一季勤の奉公人も斯くの如くに育ふて或は其子を半季杯に抱へ杯して其子供の時より愛ひかられて育ちたる譜代恩顧の者多く有る時は一世ばかりは馬鹿なる主人が出来るとも危からず

はることに至るべし然るにおゐては其支配々々の自らに極りたる其者に任せ、主人は唯所謂育ふ事に離れだにせざれば増々富貴に至るとも衰へる事無かるべし

「細註」能く擧ぎ置くにおゐては其傍輩同土新古共に能く和睦して萬事其家風に隨ふの談しも亦能く行届くべし、是におゐて家風も知らざる者を俄に抱へて番頭にする風情にては有つべき所以の無き幽玄を能く味ひ知るべし

「註」又所謂分相應の道をもて漸々と地株を盛り立て猶を其暮株千兩の頃より八九世の中も其道に離れざる徳として此株に積上る程なれば幼き時より其大道の中に育われたる者は則ち奉公人といへども必ず其主人の身上に相應したる所以の道自らに能く知る者なるべし然

「細註」分相應に過不及の喜び無き事を知るには五年や八年には知るべき者にあらざる幽玄を能く知らずんば有るべからず

れは其身上の榮るに隨ふて奉公人を増す事も亦人々を恵む事も則ち其奉公人共其主人の分相應を能く撰ぶべき者と心得て其支

「細註」己が金を己に支配する時は或は其慾に偏り或は其金の滯山有るを喜び杯して浮かるゝ事も有るべし故に番頭に任するを宜しとす

配々々を能く守ることに至るべし然るにおいてはもし道に離るゝ主人杯出来るとも先祖より導てある譜代恩顧の者を初め金銭の如く忠義なる者其其家の法則を能く守り無道の主人杯の思ひの儘には作ぬ事に至るべ

「細註」是におゐて奉公人も我が子の如く愛ひがらざる徳として其譜代恩顧の者共斯くの如く金銭の如くの忠臣と成るの幽玄を又々能く味ひ知るべし又もし馬鹿なる者が出来る時の爲に奉公人も我が子の如く愛ひがらば又其爲に番頭任せに爲し譜代恩顧の者を多く擧へ置く杯と思ふ如きの末に馬鹿なる主人が出来る時は其譜代恩顧の者も何の役にも立ぬ幽玄を能く味ふて必々奉公人も我が子の如く可愛がりて能く育つべし

し、斯くの如くに至りては金銀も急に増すこと無く唯其道に隨て漸々と増す故に幾萬兩の身上と成るとも漸々其れ相應を知り漸々と其れ相應を撰ぶ事に至るべし、然れば御世泰平にあらむ限りは世々富貴に至るとも衰へる事無かるべし、然れども其是に至らむと少しにても求る所有る者若

し是に至る時は必ず安堵する者なるべし故に其心緩みて終に道に離れて則ち亡ぶ故に唯天の自らに然らしむるの道を能く守り自ら其事に至ること大事なるべし亦云ふ斯くの如くの者なれば分相應の規則を極るとも唯是を極たる耳にて若し道を亡ふ時は是を守る事能はず然れば道も無く規則も極るは無益なるべし

「註」既に親先祖に不孝せぬ爲と脩身齊家の爲に道を學ぶすら道の味ひ知れる時は最早其道を最良に思ひ終には偏りて其我慢の募る有り又其見識有るを世の中に手柄顔に弘る爲に或は神道を學ぶ者を嘲り或は儒道の學者を誹謗する有り其是等の如きに迷はれて未だ其道理も明らかめざる中に偏る故其魂生偏固と成り或は不孝或は其家身を亡ぼすの類ひ擧て數ふべからず見て知るべし此最良なる者は則ち人慾の私也道を學ばんと志したる者だに人欲の私は去り難くして孝道と修身齊家の道には離れ勝なる者也殊に京都を中央にして十四五ヶ國の中は押なべて佛道耳に志して佛を信心せざる者をば馬鹿と思ひ是を相手にせ

「細註」愚俗の佛に凝り塊りたるは其魂生ケツクしたる者也其魂生にて事を作す故チビクして所謂家身を亡ぼすなり

ぬと云ふ者千にして九百人也又關八州は押なべて日蓮宗を除けば佛を信心する者を穢れたる者の如く思ふ者千にして九百人也、其所以も知

「細註」愚俗の佛に凝り塊りたる時はケツモツする也其魂生にて事を作す故家内俯らす萬づ手あらくして所謂家身を亡ぼす也又愚俗の儒道に偏る時は正體も無くて氣を高ぶり所謂家身を亡ぼす也、此三體俗に云ふ井の中よりあふ空を見る蛙丁簡と云ふ者なるべし恥べし々々

らずに偏よる者多し是れ其國癖と云ふ者也、是れ據り所も無く神も儒も佛も皆蹴散らすよりはよしとも云ふべきなれども長く富を有つには甚惡と幽玄を能く味ふべし又云ふ古しへより暗君出る時は國道を亡ぶ國道無ふして天下大ひに亂れたる事多し又其亂の治りたるは道についたる事は民の好む所を好み、道に離れたる事は其惡む所を惡み杯して唯々世の人の心を鎮靜て以て天下泰平に治め給ひしと南無、又其好み尊敬する所以は抑々我朝の 皇帝は神世に始り連綿として御世々々御種を以て立ち給ふ則ち 皇帝也其御世萬々歳たる事は是に競ふ者無しと唐國の人も甚是を尊敬するよし今専ら世に風説有り亦唐國におゐても聖人の殘し置き給ふ事は道の道たる事を知るにて則ち是也と我朝の人専ら是れを尊敬する也、是れ唐も日本も相互ひに其尊きを尊ひ善きを撰ひ執るは則ち人の智

「細註」神でも儒でも佛でも其品類に偏りて其己が好む事を用ひずして外を用る者や或は嘲り誹謗し惡口する輩は俗に云ふ漏蟲丁簡と云ふ者なるべし、唐國にても亦是に似たる輩有りて其己が國の道祖耳尊しと凝り塊るも有り或は其儒道を輕くし外道や佛に凝り塊るも有りて智者の尊敬する事も誹謗する者あるとなん、其風情の輩は子孫滅亡する種杯には氣も附かず唯目前の事耳

に困むとなむ唐も日本も愚俗の丁簡は皆同じ事也と嗚呼心は廣く持ちたき者也

たる所以也故に其の數世の智者達彼を執り是を思ひ弘め給ふより自ら其三道の世に混じたる也是れ即ち天の自らに然らしむる所以也、既に我朝の

今上皇帝におかせられても其天の自らに然らしむる事耳守り給ふによつて御世萬々歳たる者と南無然れば庶人の分として三道の中といへども其一つに偏りて何に歎せん

又其偏よる風情の小々き心にては御世泰平にあらむ限りを子孫をして全からしむる事杯を知るべき所以無し猶を其道に離れざる事を守り得べきいはれ無し、庶民におゐて常世是を舒し樂寐して暮さるゝは有難き事にあらずや斯く安き事に至るの本元は神々を初め諸聖人の導き有りし所以ならずや、是におゐて世の恩を知り義理を知りたる者なれば神々を始め聖人迄も悉く尊敬すべき事ならずや然れば我朝におゐても常世に至ては三道の中といへども是に偏執して外を誹謗るは恩を知らずと云つべし義理を知らずと云つべし

道にだに偏執する時は斯くふらちとも云ふなるべし、然るを愚俗は飲酒淫犯遊樂に染り杯して其身上の弱みと成り先祖には不孝と成るとも是を爲さざれば友達之義理が缺る杯と偏りて家身を亡す事にて嚴重に理もなき事に義理立して先祖や親は蹂躪るに當る事耳する風情の者程猶々是を

不孝とも不義とも思はざる者なるべし

「細註」 親をして安堵ならしむる事なれども知らざる辭に先祖や親を蹂躪るに當る事はかりする風情として神道が尊ひの佛法が尊ひのと思ふは所謂井戸の中からは空を見る如くなるべし

「註」 別て關東の風氣は親が歎とも子の難儀に成るとも厭ひ無くいさじとやらんを立貫者を強ひと譽る愚俗の通例なれば三道の中といへども微にても偏る魂生の者若し其いさじとやらんの出來る時は如何ぞ規則も守る事のならんや危々唯々自然につくこそ大事なるべし

第四章 分相應を定むる標準は具體的たるべし

積出場所悪き歟或は城下へも遠き邊土にして田畑多く求るとも不都合なる所柄杯は金二千兩の身上と成る時は必ず有ち難き土地も有り、又五千兩以上の身上と成りては必ず亡る所柄も有る也

斯の如くの土地といへども其五千兩を所謂誓約同志六七人もして持つ程なれば亡ぼる事無かるべし其土地に一人秀る故貧賤下愚の倣ひの爲に殿様の如く持て難ざれ愚なる主人杯は如何ぞ謙を守る事を得んや則ち亡ぶる也故に必々世俗を見て是を學ぶ同志の衆許に懸け幽玄考に記す所と映らし合せて其幽玄を能く味ひ知るべし

「細註」 尤是を五人七人にて持つといへども所謂道の爲に誓ひを立てたる同志ならでは有ら難き幽玄をも亦能く味ふべし、又所謂家内一に和睦したる上は少しにても暇あらば是を學同志にて必ず其土地相應とせば子孫の事平常に談すべき事也必ずゆるがせにすべからず

是を能く知たる上は必ず其同志十目の見る所に隨ひ其衆説を以て必ず土地柄相應を見極め必ず其れ相應の持株を定むべし、是を定めたる上は金銀何程溜るとも皆無き者と心得て堅固に積

「細註」 堅固に積置とて或は大坂鴻の池の類ひ幾百年預け置とも大丈夫の方へ預け置の事也

置き必らず其株限り相應の經濟を代々守らしむるの事を規則とすべし

「細註」 道の明らかならざる者は幾百年の後迄も有たしむるの規則を定めてよふよふの事に其規則を極めたる者一代歎く事無きばかりの事なり世俗を見て知るべし唯々道知らざるこそ憐なる者也

又云ふ其れ相應の規則を能く守りて以て無き者にしたる其金の五萬兩以上にも成りたる時は宜き地里を見立て公儀へ願の上へにて新田開

「細註」 尤此五萬兩以上と成る迄の中は新田開發する場所杯には氣も附ぬ程で無ければ是に至る事能はざる脚を能く味ふべし、尙亦世の變化盛衰の理も知らざる者共に新田開發の志出で來る時は俗に云山師杯にたぶらかされて身上滅亡するを見て知るべし危し

發すべし、其願ひの満たる上は所謂年季奉公人を抱へべし、其開發成就するにおめては邊遠所も宜き土地も其以上の經濟皆同事也唯々是に至る中こそ大事なるべし

「細註」 數世を経て是に至る程なれば性理を學ぶ杯と言はすといへども世々其常に見聞て其理自ら其心に備はり自ら能く是を行ふ事になるべし、是に至ては他の惡を見ては則ち己を慎み或はよき事を見ては能く是を活用し能く是を行ふ事民人といへども則ち君子とも云ふべき者なるべし、是におめて亦身上を持つ法も無しに急に金を溜めたる者の子孫には其家身をこぼす志の者の出來る幽玄を能く味ふべし

「註」 又其是に至るの始は唯々所謂親の悦ぶ顔を見るのが何よりの樂と思ふ事よりして下奉公人に至る迄も唯是等の事を好む事に至らしむるにある也、然れども唯是を思はしめよふとして是を思ふ者にあらず故に自ら其是を思はしむる事に導所以を能く究むべきなり

第四卷分相應終

第五卷 發教錄

第一章 九戒并關東上方の差違

家内破と成る種の有へし又破とならずとも没落する種多し是を九ヶ條に縮める

慢心 薄情 吝嗇 色慾 飲酒 疑惑 愛溺 眞吝 浮氣

慢心 取り所も無き僻に氣を高ぶり萬事已れが了簡耳を以てす凝て強情と成り或は眞吝と成る募て放蕩と成る

吝嗇 シリ／＼としたる味ひにて意地凝き魂生也凝て強慾と成りせまつて盜賊と成る募て人を殺す

色慾 クニヤ／＼クニヤリとしたる味ひにて胡亂々々しき魂生也凝て信を失ひ募て惡心發る

飲酒 トロリとして喉のカビリとする其儘の魂生也凝て縮り無く募て亂心す

疑惑 探る意味故に一個の了簡を専らとし萬事取極りつかぬ魂生也志凝なく人情を失ふ募て惡念發る

眞吝 シリ／＼グツ／＼としたる味ひにてリタク成る魂生也凝て我慢と成り募て陰症と成る

愛溺 グニヤ／＼グズ／＼として物に氣の付き過る魂生也凝て惡短氣と成り募て氣胸と成る

薄情

ボンとしツンとしたる味ひにて行り放し魂生也浮かる事多く移る事多し凝る事無く事にフれて凝ることあるべし

浮氣

ヒヨイ／＼したる味ひにて見る事聞事に移り次第の魂生也浮かれ漸く進でせまる事甚しき時は亂心する事多し凝る事鮮し物に凝るは有り若し凝れば強と成る有り斯く成りては浮かれ少く成也

關東

人右と云へば忽に心に左りと浮かひ左りと云へば右を思ふ僻有り疑ひ鮮しといへども背く事多し

上方

人右と云へば先づ一旦右と思ひ左と云へば先づ左と思ひ背く事鮮しと云へども疑ひ深きが通例也

關東の疑心淺き者と上方の疑心深き者と相似たり

上方の背く者と關東の背かざる者と相似たり關東の控へめ過ると上方の出過と相似たり關東は其勢の奢り上方は後の奢り

上方の者は己れにまさりて美服美麗の者有れば而向にて稱美し内心に悉く猜み悪む事甚しうして隱言に惡口する者多し然れども一旦議定せし事は日々々々歳々には是を厚くするの勇有る國風也

關東の者は己れに勝るる美麗の者に悉く下寄る氣味有て猜む事少し然れども議定誓約杯に一旦は命をも惜まざる勢ひなれども日々々々薄く成り知ら識すらす是を失ふ是れ満ちて覆りて其勇滑る也

上方は都て富家にへつるふを恥ぢ心中に今に彼れに勝らんとする者多し然れども心中に墓ふ

關東は富家に倣ふを恥ぢざる者多し其富家に勝らんとする者鮮し然れども心中に惡む

上方の富家は貧家を籠略にせず

關東の富家は貧家を籠略にす上方關東抑なへて貧福の外諸稽古にて人に秀て用ひらるゝ身分と成りて外に己れより用ひらるゝ者有れば是を猜み仇敵と成つて却て人に疎まれ恥をさらす者多し

第二章 性理學要項

○女子小人杯を近づけて不尊なる時は一旦氣を貫き後ち靜に論せば遠ざくとも不恨

○士以上の子は民俗の子と異にして我慢無き者故良き時は人の心の儘に隨ひ生長するに隨て能く人の志を執る者也故に父の顔を見ると其儘父の志を悉く感ずる事止む事無し

○我朝に一天萬上の君を始め奉り士以上を重く用ひ給ふ事を誹謗する偏固學者にして修身齊家の至者有るや見るべし、亦道は天地の自然たる事を知らざる族は己れに偏固を行て是にて亡るは天命也杯と明らめたる積りの慢學に移され亡する者多きを見るべし

○天地の和する所以に本つかずして人を導く事成るやならざるやの幽玄を能く味ふべし

○君たる者は善き事の外見聞く事無く愚讓怯謙を見聞きて育つ故其志自ら聖賢の教へ備はる也故に民家に育つとも其四つを以てする者を人稱して君子と云也

○くつ伏するとせざるにかまわずに口先にて云故を專とする有り

○知れば則ち學に進む進めば即ち行ひ勤る事に至る行ひ勤至れば道の幽玄を知るに至る其知る毎に樂み勝ざるは道也

- 行ひを勤る爲に書を讀むと事を知る爲に書を讀むと有り
- 心焉にあらしむ爲に十四歳内小學校に入り心焉に有る事に至りて大學校に入るは尊し
- 一言聞くとも行ひを勤るの思ふ事の種を能くわらしむべし
- 俗神道者は釋迦如來の方便説にもまされる怪説を專とする有り、儒も亦傍若無人に慢心する有り、僧も亦方便を賣る有り
- 讀書の數積りたる徳にて義理を知らざる時は死物と成る事多し
- 己れが心を正して書の意味心に浮かべは即ち活物也是れ即ち聖人の教也
- 善き事は人心底に歸伏す都てに口先とは差ふて有る也
- 學ぶに心法無きは物に紛れ安し
- 五行活用を知らざれば性理を學ぶといへども空論に成る事多し自然の理を失ふ事多し
- 生長の後の病根の事慢心、強慾、色、風客、人を惡む、愛溺
- 農家の主毎夜繩なう家には押なへて孝子出る事多し不孝子出る事稀也
- 神道家、佛道家、世俗、儒以て御扱の事神力佛力の事
- 陰陽消長の自然の活理を以て天道の大極たるを知り且其自然の備はり顯はる、天道の大極を知り且

天地の自然に準ふ道の大極を知る即ち人道也

- 言葉堅くして破れ引出す事有り
- 人音楽を聞く時は其心しんくとして靜也
- ツケ太鼓杯を聞けばヒヨウくと浮れ竹笛杯吹き様子心ヨキことも成る也
- 一旦に千兩の身代と成りても其身存命の中に衰へては益なし五代も十代もかゝりて千兩になるとも年々歳々榮へて衰へる事無ければ吉かるべし
- 都て俗人は己れが好む所なれば他人から見何程惡しき事にも至極宜敷思ふ也又己れも惡きと知りつゝも改る事能はざるは亦俗人の常也
- 少し宜き事有て褒美すれば大そうな孝子に成つた氣に成り子供ながら孝と不孝の筋を知るに至る
- 道を學ぶ志に成れば忽ち善き人の目に留る也
- 人善きに志して居て惡きを思ふは難し
- 惡きを思ふて居て善きを思ふは更に難し
- 道を餘り六ヶ敷思ひ過ると行を勤る事を廢する也
- 其れ相應に知り安き勤安きより漸々に學べば極めて至る也む道は得難けれども入るは安すし

○強惡を止むるにケンヤンを以てす

○孔子の知るも知也る其門人達の知るも知る也我等如きの知るも知る也

其知る教を作すに至ては聊か一日二日守らしむる有り或は一二年守らしむる有り

其教譬は言を以て教る時は口に知て心を知らず行ひ勤て以て教る時は口に知らざれども心に知る

一朝一夕に教るは言を以てす行ひ勤め教るは年月過るなり○若木は二三年にして朽る老木は百歳に至るとも不朽なり

○人の悦ひは五寸も尺と見へ己れが悦ひは少く見ゆ

○人の難儀は尺を五寸と思ひ己れが難儀は二寸を尺と思ふ

○「壹萬金以上の身代の者にては衣は寒からざるの餘は用無し食腹に満ちての上は百味の食も食する事能はず

高壹石も無き者にては足る事を知れば寒からず満腹の上は幾萬金の貯へ有る者と同じく衣食に用無し、唯我は有りと思ふと無しと思ふとの差ひ而已空腹の時は飢食も満腹の時の美食にまさるも空腹に美食するとも聊か喉を通る中のみならず而已

足る事を知りては貧しきも我は美食無し飢食喉を通る中不甘と思ふ而已

アソまで福祿を戀しく思ふ者は寒からず満腹の時福祿有り美食したりと思ふべし
足る事知らざれば天下に富る身と成りても心の儘ならぬ事而已多かるべし
足る事を知りては親先祖を樂ましめ家内和睦し未々の危きを通るゝの法則に心を用ひ杯するにおおては世に是に勝ざる孝行あるべからず

○扇るを嫌よりして耻曝し我身を亡はす者多し故に問ふことを好むにしくはなし

○土地風にて陞方や氣違ひめきたる中に育ち住みて何心無く暮す者は是が常の心と成りて有る故己れが陞方歎氣違に氣が附ぬ者也其中に育ても智慧有る者は悉くこれを耻づ

○心の廣き者は心底強くして面和らか也

○捨塊始めは少にて漸く募り末には大惡と成る

○己れが惡さを人の知て有るを知らず至り顔の者多し

○子として親の言はを氣に入らぬ杯言ふ有り

○却て婦人は格別氣に入りたる事無ければ實と思ひながら其言はを不用者多し

○老人には顔も言葉も和らかにして相談懸れば悦ぶ也

○譬は○と□と物争ふ時○と心合ふたる人の説を聞けば□は大惡と聞ゆる者也

又□と心の合ふたる人の説を聞けば○は大悪と聞ゆる者也

○都て女は夫に怒り添る事多し

○不和に禮有ること無し

○禮と分相應の敬讓規矩とは家々の業法にして皆自然の感通を以て至る也

○孔子の知るも知る也其門人達の知るも知る也其知る功を作すに至ては天下を導くも亦五人歟十人を導くも亦萬々歳天下泰平の法則を立つるも五年歟十年を治るも功也故に庶人にも子々孫々亡ぶる事無き道を能く知りて是を能く行ふべし口に知りたる而已にては何の益にも成る間敷也

○もし知る事有るとも我至れりと思ふべからず至れば至るほど猶を大ひなるは道也、然ればとて必ず廣遠に走るべからず必ず近きより漸くに學び進むべし

君子務ム本ヲ立テ而テ道ヲ生ス 曾子曰吾日三省吾身ヲ 爲シ人ニ謀ル不レ忠乎 與ニ朋友ニ交ハ不レ信乎 傳ヘ不レ習乎

子曰君子不レ重則不レ威○曰危者安ニ其位ニ者也亡者保ニ其存ニ者也亂者有ニ其治ニ者也

是故君子安レ而不レ忘レ危存レ而不レ忘レ亡治レ而不レ忘レ亂是以身安而國家可レ保也

子曰小人者不レ耻ニ不レ仁ニ不レ畏ニ不レ義ニ不レ見レ利則不レ勸不レ威不レ懲而大誠此小人之福也善不積不足ニ以成ニ名ニ惡不積不足ニ以滅ニ身ニ小人以ニ小善ニ爲シ无レ益而弗爲也以ニ小惡ニ爲シ無レ傷而弗去也故惡積

而不レ可レ掩罪大而不レ可レ解

小人非レ所レ困而困

子曰君子安ニ其身ニ而後動易ニ其心ニ而後語定ニ其交ニ而後求君子此三者修故全

子曰君子易レ事而難説也説レ之不レ以レ道不レ説也及ニ其使レ人也器レ之、小人難レ事而易説也説レ之雖不レ以レ道説也及ニ其使レ人也器レ之、小人難レ事而易説也説レ之雖不レ以レ道説也

君子之心而公怨ナリ小人心私而刻ナリ天理人欲間ナリ每相反ナリ而已矣魯繆公時三人有ニ賢人ニ而國削説後語不レ用賢則亡削何可レ得レ與

或先生此得賢三人而傷必無ト

或先生賢有削少而已ト

○小人の閑居を禁す

○馬鹿なる者ほど己れ利口也と思ふ者也

○己れ功有れば人愈々困み猜む必ず功を譲るべし

○人を譽れば必ず是を讒言する者多し

○自然の富をよしとせざる族はもし不時に金を得る事有れば必ず其家衰る例し有り

- 人郁て大ひなる事は忍び安く小事は忍び兼ねる者多し是等は大事は必ず小事より發るを知らざる故也
小事より漸く大破と成りては止め難き者也
- 身に藝有て人に稱せらるゝ時はを快く思ふは既に奢りの種也
- 書を讀て修身齊家を論る者鮮し
- 民家にて夫を蔑にするは第一色慾次に飲食次に金錢不自由の類ひ也老人を邪魔者にするは妻に不肖をすゝむる也
- 門人其師に對して十の一つも勝ざる事有れば慢心して其師を軽くする有り是れ師に眞客有る歎問とを好まざる故也
- 才智は信より生ずる者也
- 人災ひを以て後の幸ひの種とする事を知らざれば諸の迷ひ晴るゝ事無し
- 一人孝なれば是に歸伏する者は既に孝子と成る
- 智者の恵むは其心正しく本を立て以て心靜に人を導くを樂みとする故也
- 愚俗無藝なれば淫犯飲酒を樂みの最上とすも藝に秀る時は藝の味ひに心を奪われ父母も子孫も次にする也

- 疑るは甚危き事也然れども忠孝の二つを心の法則と成て有れば疑るにあらす唯能く勤る也
- 下として上を犯す事を好むは無しもし有れば激したる歎人欲の私しの爲めに蒙昧みて也
- 上下自他の差別無く人の心を惱ましむるを好む者なしもし有れば私激の者也是等を養ひ導く所以を知らざれば左に聖賢の語を引く
- 子曰ヤ已矣乎ヤ吾未見レ好レ徳如レ好レ色者一也
- 子曰君子不ニ以レ言舉レ人一不ニ以レ人廢レ言
- 子貢問曰有一言而可ニ以終身行一之者ト乎
- 子曰其恕乎己所レ不欲レ勿レ施ニ於レ人
- 子曰乘惡レ之必察焉乘好レ之必察焉
- 子曰過而不レ改是謂レ過矣
- 子曰民之於レ仁也甚ニ於水火一吾見レ踏レ而死者一矣未見レ踏レ仁而死者一也
- 人機に臨み變に應ずるをよしとすいへとも天地の自然にあらざれば曾ていわす行はずとすべし
- 人の心は善と惡と二つ一ナ時に成り難し故に道心の者は常に善き事而已氣の附く者也百姓耕作に至迄其通り也

○人心の者は是に反す

○世に悪人と唱へらるゝは自分の事耳に心を盡し勝手自儘を行ひ人の難儀するにも歎くにも氣をつけぬ也

○富士構心學を拙しと悪口する者も有れども是は第一家内を治めんとする者にして己れ而已秀てんとする者よりは智者なるべし

○才も身代も滿れば獲る也

○親の悦ぶ顔を見るを樂みとするは無類の愚痴文盲でも勤る事易かるべし是れ則ち諸願成就の種也

○極寒に地中の温なるは陽氣合める所以也極暑に地中の冷やかなるは春よりして陽氣天に登り盡したる故也

○上方關東ともに善きを撰ぶ事

○神明を祭るとは神の道德の明らかなるを祭するを云

○春は櫻の頃夏土用前後中人以上は愈々志し正しく成る也

下輩は必ず浮れ出す也此二つに探るさへ幽玄有り

○心法無き心迷ひは何國迄も行く次第也

○四季の變動に準て人の心の變動する氣味陰陽消長論に出す

○眼前の事に心散亂しては道行はれず

○眼前の孝行に泥み十ヶ年後の不孝に陥りし有り

○子育上士の精を受たると悪士の精を受たるとの差ひ有るが如く父母の氣精を受けて善惡邪正顯るゝこと顔形ちの父母似る如く也

第五卷 發教錄終

第六卷

口まめ草

文政九戌年

七月十七日大坂より舟に乗り未明出帆して申の上刻兵庫の築地に舟をかけけり、明る十八日出帆此日風強けれと真帆にて申の上刻九龜に着けり、十九日九龜出立御城下より西北さして八丁程たれば左りに讃岐富士と唱る奇麗なる山あり四半たとりて金比羅宮に詣で大和屋といへるに中食して歸り屏風が浦通寺に至り宿る院主留守なれば廿日幡州名所一見せむと思ひつき九龜に歸り申の上刻舟に乘て同く下刻田の口といへる湊に着けり高砂屋といへるに休らひ又舟に乗り明る廿一日風なれば櫓を押して午の後刻愈加山に詣でると此みぎさに舟を繫せ參詣して門前の茶店に立寄十四五杯酒杯汲みかわし申の下刻舟乗出しけれど風も無くふらふら櫓を漕ぎつゝ日暮にさひ津の濱の邊りに至れば山家の山の端に燈し杯ちらほら見へて美景に見とれ乗合ふ友人思はず一度に響る聲に亦面白き事にぞあれ舟頭も水主も浮れ出し舟唄うたひて櫓を漕ぎけり

夕風やそよくばかりのさゝ浪を

こゝ舟唄の聲の涼しき

文政九戌年

杯口まめに戯れつゝ舟はゆらく樂しみ深し、明れば二十三日辰の刻播磨の國室津に着ぬ明神に詣で
木蔭なる玉垣の本に腰打懸て

玉垣に残る暑さをあすけ息

此處より山路に入り姫路御城下大坂屋に宿る、明る廿四日出立して石の寶殿といへるを見て此處よ
り南別府の里の手枕の松といへるを見て

秋風のいたくも吹てひぢを枕に

眠れる松の夢なさましそ

又庵飯を喰ひ臂を曲て枕とす樂みまたそのうちにありといへる事の有を思ひ出して

聖りをもまぬる心のあり氣なり

らく寝して居る手枕のまつ

夫より曾根の松を一見して天満宮に詣て

初嵐たしかに見たり曾根の松

高砂に至り女夫松を見て

秋蟬の唄ふもながく高砂の

松はとこ世に聞ゆるものを

又

秋蟬の命をこふや女夫松

廿四日尾上の鐘に都戀しの片葉松といへるを見て

朝露は泪なるらめこふるとも

むなしき戀にうき名たてれば

又

都路を夢にや見つるあさなく

なげく泪の露の流るゝ

又

朝露は泪なるらむ片葉松

杯はべりつゝ長池村より明石の御城下舟屋に宿る二十五日出立人丸の社にもふ出て

人丸の社の前やさりの海

夫よりたどりて一ノ谷なる敦盛の碑と云へるを尋ねれば墓所なりとて二尺五六寸の五輪計り也

たむけ草の枯れてはあれと古しへの
名こそ残れる花のかほはせ

又

古塚の手向に咲や草の花

此所にて名物あつともりそは杯食ふてあわれさのうつをばらし舞子が濱に至れば白砂の奇麗な中に數
百本の松の枝海の方へ揃ふて出たりさらながら舞子揃て手を出したる如くなる故舞子が濱といへるよし
蠅うかれて啼やこへのよき

是より良々たとりて兵庫に至り日もはや暮なむ頃和田の岬清盛公の墓所といへるにもふ出て
古塚やたゞ鈴虫の啼くばかり

二十六日湊川に至り楠公の碑を拜し泪ながら爰を出たとりく

打死のいわれつくるや啼みゝす

杯はべりつゝ生田の森に至れば明神の前にえひらの梅といへるあり強者の咄しのみ多ければ古しへを
思ひやりて

兵者の強き思ひや残るらん

いく田の森の蟬の啼き音に

又

蟬とあらしいづれか勝をとるやらん

又

嵐にも負けぬ生田の森の蟬

此社を出て東へ少し行き左りへ入り布引の瀧へ出る是より山のふもとをたどり摩耶山に詣れば打
出の濱より住吉の邊まで一覽の處下には數百の酒造家軒をならべ美景也是より下りて西の宮に宿る二
十七日早朝太神宮へ詣つ漸々にたどり三軒茶やに休らひて

匂ふのは藪のあなたかやいと花

杯はべり尼ヶ崎を越へ舟渡し奈加良の里を打渡りて大坂に至り友人連々北の新地を通る時

とんぼはうに浮されて居るかむろ哉

杯口すきみ南濃人町に至り逗留、廿九日早朝御城内拜見して谷町へ出て生玉明神、北向八幡宮杯詣つ
天王寺に至れば本堂舞臺にて七堂伽藍也中にも五重の塔は日の本一の大塔也前に鏡ヶ池といへる有り
此本にイみて

古池は古池たけよひと葉舟

又

一葉舟にそつくりと乗る胡蝶哉

正面の池に鯉數多住む左りに龜の水あり聖徳太子堂猫の門左り甚五郎作といへり、南へ出て庚申堂あり凡半り程たどり茶白山あり次に安部清明社あり次に小町塚有此邊り古戦の地なるよし漸々たどり住吉に至りて本社に詣づ左の方に御神田有り五月に早乙女とも此田を植るといへり、夫よりそり橋を越へ大門へ出て右へ行き左側ひさごやにて中食しけるに世の常の茶やとは異りて上品一流也、此宿を出て又そり橋を渡り濱に出る高燈有り又橋を渡りて茶やあり海上漂々として遙にわ路しま見ゆ其外國々島々眺望の美景を樂しみ本に歸り大和橋といへるを渡りて堺に至れば中程に妙國寺蘇鐵一見して難波屋に至り休らひぬ松少しおとろへたりと見ゆ此宿より少したどれば片町と成れり此邊もちらほら有る松をさしの姫松と云へり、夫よりがつばか辻少し上に益井の水と云へる古跡有り、漸々にたどりて大坂に歸り清水舞臺高津の社次に朝日明神等詣でい鴻の池善右衛門屋敷前より南濃人町に歸り逗留此ふし平野町鈴五主へ行つ來つ遊べり、九月朔日友人三人にて天満の天神より福島五百羅漢杯もふ出て天満橋に歸り御靈の宮より兩懸所、座摩稻荷等詣で暮方より新町に行き大槌屋、小槌屋、扇屋初め

大家九軒にてひと曲輪なるをもて地名九軒といへるよし此曲輪各々太夫、天人の下はなきよし善光寺町といへるには天人、白人見世附有り此二ヶ所は吉き場所と云へり其外は皆惡場と云へり戌の刻鈴五主へ歸る、十五日早朝日本橋より道頓堀に至れば若太夫、角の芝居、中、大西とて四ヶ所有り、夫より四ッ橋を一見して島の内悉く巡り相合橋角の生淵といへるにて酒食して歸る此いけすと云へるは何國の田舎者が行ても正直に商ふ茶屋也と、十月二日迄逗留してより大坂の町々不殘あし川迄見巡りぬ、三日大坂を出立平野村古跡を一見して暗り時をうちこへ奈良に至り大坂屋平藏ぬしに宿る、四日早朝猿澤の池の邊りにたゞすみて

歸まで此のまゝにあればつ水

杯口すさみ再三なれど十三鐘一見して春日明神に詣づれば當社の鹿は人によく馴れてはあれども此のふしは參詣の者少き故か鹿數多附纏ふ團子百文分にて足らぬ故又百文買て投出し漸く爰を去り大佛并に西大寺に詣で宿に歸る、五日出立して丹羽市村柳屋茂助主に宿り明る六日富留の社に詣づ次に内山寺に參詣して歸り未の中刻より當所代官大塚喜内といへる方に逗留の中郡山御屋敷谷口鐵之進といへる方へ行つ來つ遊べり

十五日龍田川にて

文政九戌年

また一葉流れて来るや立田川

寶龍寺に詣出て

古しへを思へばなをも散る紅葉

杯はへり郡山に歸る丹羽市村大塚主に越年して

文政十亥年

歳旦

喜怒哀樂のまた發らぬに咲や梅

三日早朝ふるの社に詣出れば當社中にて富留部の菝ひを作るよし第一には古木覆茂りたる森なるにしめかざりまでも古しへの形を崩さずとてさも神さひたる粧ひなりけり殊には古事來歴を聞き何となく心すみて古里の事を思ひ出して

古郷を思ひそ出るいくとせの

かすをふるへの神に詣出て

杯口すさめば大塚主も無き父母の事杯思ひ出されて互に心通ひて涙そゞぎつゝ歸りけり此主真心深ければ今日を過ぎ翌日をくらし長く逗留しけり、三月朔日暇をこふて立出郡山に至り又暇をこふて二日

出立大坂に歸る、三月五日出立和泉の國大津の驛に至と足痛にて逗留の中童子等と共に野邊に遊びて

摘よくつめば摘むほとつくくし

八日出立して同國根ころ不動尊に詣すれば血流不動とて古事有り略す此寺懸作りにて坐敷數二十有餘間有り其坐敷々々の前は板縁にて懸作りにして往還の如くなり且軒端より大木覆ひ茂り鳥も通ふましくと思しき深山幽谷也、古しへ軍ありし古事杯聞きはへるふし小さき鳥三たび見へけるを尋れば堂守曰く此寺地三里四方のうち殺生禁斷故數多の時鳥來りて年々巢をたもつと云へり尤巢にいる中は曾て啼事なしとぞ

啼もせてしけく通へる時鳥の

すかたのみ見て今日は歸りぬ

杯はへり此の山内を出て一里たどりて五社明神の神主櫻太夫ぬしに至り足を休め新町といへる處に出で宿る、明る九日出立して幾山々を越へて坂本寺に至る此邊二里のうち山にも谷にも櫻の大樹松の青く茂りたる中に咲亂れたるは、皇都わらし山にもまさるやと心も空に浮き僕物心してかくも美なるを見たる事なし此寺の奥の庭前より見渡せば東より北西の方まで山々の櫻見へて美しきこと也けり

めの及ぶ限りは花の山に山

文政十亥年

折重りて咲そあらそふ

此寺に逗留してひねもす花見暮しけり、十二日出立して紀州和歌山に至りければ御屋敷御歴々の御内室何の故にか召つかわゆる女とも居らねはとて僕が洗足の湯をとり給ひければ

姫君の手をよこしけり天花菜

或日和歌のうら明神に詣出て

浪のさまに霞立けり和歌の浦

十六日出立紀三井寺大工屋辨藏ぬしに宿り觀音に詣すれば堂の邊り一圓の櫻追々散を見て

風なくはしはしは春も有つへし

御堂の前より見渡は和歌の浦なる布引の松霞の中にそこゝ顯れて美景筆にも盡し難し、明る十七日當所酒造家七郎右衛門主に至り逗留のうち廿三日意屈なりければ裏の構の外に出て見れば凡二里四方かと思しく菜の花咲亂れて一圓に黃の野とは見ゆ花にも春にも名残りおしくなりて

菜の花の盛りは春の名残かな

又

なの花の咲亂たるきの野にも

春にも別れおしくそありけれ

杯と一人りこちしつゝ其爰是處見めぐり歩くうち日ははや西に傾けとも何れとも定かにはわかぬと賑はしき人聲聞ゆ僕なを心ちよくて

咲連てきの野となりし菜の花に

てふもたわむる我も戯るゝ

又

菜の花に酔ふてか高く飛ぶ小蝶

杯口ずさみ居ける處へ士ひ一人りいつの間に来りける僕に對して曰く汝は何者なるや僕答へて曰く遊歴の浪士也曰く何方に宿りしけるや僕答て當所酒造家七郎右衛門に宿る也士いらへもなく行けるがほどなく士ひ二人來りて僕を伴はむと云う辭ともゆるさず故にいざなわれて行て見れば士二十有三人毛盃杯敷て僕に酒杯賜ひて樂しみ給ふ此時よりわきて和歌山御歴々へ行つ來つ遊びけり

二十五日出立して鹽津の浦神主に至り廿六日有田郡立神の神主に宿り、廿七日同郡カンケン寺補五郎主に至り逗留尤此三所の道すがら藤代の社をはじめ古跡多し尋入る山中にて

呼子鳥の啼くを便りに尋來て

おほつかなしや葛のしたみち

又

古事を聞く人もなし閑古鳥

又

豆葛の下道古しかむこ鳥

又

閑子鳥の羽たゝきもせて啼日哉

藤代の社の邊りに一基の碑有り

子供衆や毒じやあがるな蛇いちご

此句加賀のちよ女也との説なれど此處に來たるよしもなく時代もあぬなるべしとまれしんせつなる句也、四月朔日楠五郎主を出立して日方目鏡や伊兵衛ぬしに宿る黒江村と兩村にて凡千軒有と云へり膳椀の名物也、明る二日布引莊屋に宿り三日紀三井寺七郎右衛門主に至り逗留九日和歌山に至り逗留廿七日目鏡屋に至り宿り逗留しけり

二十八日讃岐の國和田の濱大平木濱之助といへる人と連々にて此宿を立出泉州婦氣といへる村に至

り宿りけり、明る廿九日早朝舟に乗り辰の中刻界に着ぬ、五月朔日大阪に至り逗留六日出立して泉州信田の森の明神に詣出て

ひと本や信田の森と名にたかさ
楠の青葉の茂れるものを

其夜當神社主に宿り明る七日出立坂本寺の憚叔院に至り逗留、十一日牛瀧坊に至り逗留して十六日出立して大阪に歸り逗留しけり六月五日高野山蓮花谷蓮花三昧院に至りて十月迄逗留

高野山の記

時に文政十亥年和歌山より紀三井寺に詣出院主と語りひ逗留して六月九日出立二番の札所小川寺に詣出吉野川を渡り左りへ少したどれば追分あり左り明神道右は高野山道と記して有り、此道をたどれば花坂と云へる少しの町有此處にて食わざれば五十丁一里にして三里のうち湯を呑む所もなき也人々心得登るべき也花道より凡一里半登りて左りの道邊に袈裟懸石有り右の少し上に捨石有り又少し登りて鐘石有り又登りて梵字石有り、此三所大師母をいたわり女人の淺ましきしるしを見せし所のよし略す又登りて擔上といへる有り花坂より三里登りて女人堂也此大門より奥の院迄五十丁也、惣門の内此邊を西院谷と云へり左りに明神あり本堂、金堂、大塔始め七堂伽藍也、右に宿坊數十家あり此處より

左りへ巡り奥に一身谷聖派本山也大徳寺公儀御三家方の宿坊也、是に詣出元に歸り行けば左りに高山寺行人派の本山也此山内におゐて諸刑を定と云へり、次に聖願寺眞言宗の惣本山にして學校義論支配のよし其外は皆諸大名衆の宿坊一千寺有りといへり、漸々たどり惣門より三十丁にして蓮花谷に寺止る也此處より小橋を越て左右嶺の大樹覆茂り物すゞき靈地也是より奥の院迄諸大名衆五輪の石塔幾百か數るにいとまなし中に名高きは小橋より四五丁たどりて多田滿仲公の碑有り上は甚龜末なれど下臺は結構也次は左りに大坂軍兵爲追悼建之と有り薩州公の御寄附と云へり次は右に光秀の碑有り惡說今に残れり其側に跼柳といへる有り又左りに

○父母のしきりに戀し雉子の聲

翁

又次の左りに讀人しれず

○忘れても汲やしつらん旅人の

高野の奥の玉川の水

次に小笠原家石の御廟ニヶ所有り次に左りに駿河大納言公大五輪有り當山一の大物也右に大石藏之助爲君建碑と有り是大き二番なるべし次に左りに秀吉公御代の碑と云へる有り其外幾百とも數るに暇なし名高きは右等也、是より無明の橋有り此橋の下に一度申に刺したる魚此川に入れば生かへりしと

て脊中に申の跡といへる形有り此橋の左りに 天子の御廟といへる者ニヶ所有り此川は則ち玉川也、此橋を渡りて弘法大師入定の所向て左りは骨堂右は石田三成建立の經堂也と云へり前は貧者の一燈、長者の萬燈とて燈の數知れず是より歸りけり、北の口には女人堂を出て不動坂といへる不動堂あり此處より少し下りて刑罰の者を捨る谷のよし至て嶮岨也又下りて四寸岩といへる有り足の跡也此處迄道路土中に經文敷埋有りといへり、女人堂より五十丁を一里にして三里下り加美谷村茶や有り此少しの町を開放て左りへ入る九度山と唱て眞田幸村隱家の古跡とて異風の堀廻してあり、夫より二尊院といふ大師母佛也とぞ時に文政十亥年十月十日高野山の代官毛原の庄森庄左衛門主に伴はれて遊びけるふし尋ねればこの邊なへて年貢は栢也と云り此村凡二里四方にして家數五十軒有て栢年貢二百石出るといへり、或日童子等を伴ひて栢拾ひに行き鎮守秋葉宮に詣出れば檜に似て抱合せたる如くの葉茂りて有り尋れば思ひ葉といふて是を大切にすれば何の望もかへるとて鎮守に植しと聞て此枝折とつて持歸りけるが此家の主唯眼前の強慾の爲に種々の工夫をこらし是が爲に散財してよき身代も既に亡びぬ、さかむれども用ゆる事無し故に

栢拾ひ

思ひ葉

秋葉宮

時に何某は眼前の利を好む事甚ふして種々の工夫をこらし一度利を得し事もありけるよしもあれと

是が爲に今既に没落にも及ぶべし不義の富貴何ぞたまたん速に改むべしと前文して

なにやかや拾ひ集む思ひ葉は

秋葉となりて散りうせに屍

と記し主に見せければ主怒つてもいわず故に僕明る十四日出立して高野山に歸る可恐は利をむさぼらんとする事也、右森主は明る文政十一子年七月に至りて分散配當せしよし也是等見る人慎の種にも成やと記置也かへすも其時限りの利を好む事勿れ又其時限りの樂みを樂しみとする事勿れ

十月廿三日高野山を出立北の口女人堂を出て加美谷村に休らひ小倉橋本の二ヶ村を打過て三日市に至り宿る、廿四日大坂に歸り逗留

十一月廿三日京都に至り逗留、十二月十三日出立して山崎八幡宮に詣出岸田主に宿り十六日出立いはら森五百城幸十郎主に宿り十八日出立して池田村植木屋藤左衛門主に宿り逗留、廿一日出立伊丹村高坂縫右衛門ぬしに至りて逗留、廿四日出立大坂に歸る廿八日八幡橋本驛魚や七兵衛ぬしに至れば主心障の事多し數年の懇志もて災ひをばらひ清むの歌讀み吳よかしとこわれて

橋本の魚江につもる崇りをは

はらひ拂ふて清き若水

とはべれば主悦て神前に備へ吉き新年を待べしと云へり、明る廿九日大坂に歸り越年しけり

文政十一子年

元旦

行先がめでたし雪の朝ぼらけ

二日

老人も羽子つく春の若さ哉

午の刻より新湯の壽きとてとしの末の事までも推ばかり危きを遁るゝの心法をえらぶとて友人の學べる心ちよりに廿六日迄遊びけり、廿七日出立して玉造口に立寄土手通りをたどり森口村を打過ぎひらかた村に近き土手にて

行人の知らで踏しか葦草

又

枯芝の中押わきて咲つるゝ

かわひらしいよ葦蒲公英

杯はべりつゝ八幡に至り八幡宮にもふ出て橋本驛魚屋七兵衛方に至れば主は十八日の夜身まかりしと

文政十一子年

聞て

あじきなや誓ひし言ははし本の
行水ともに流てしとは

去りながら其跡へは名をはると呼べる見目よき娘をもらひ世をつがしむ祝ひ直してよとこめるゝに
任せて

老母は なを 娘は はる

来て見れば君が姿はかわれども

なほ未長ふあら玉る春

杯とあわれなるを慰めつゝ此の家に宿り梟、明る廿八日出立して京都に至り逗留の中二月十六日の夜
酒くみかわし軒端に出で

音楽と隣り合せや梅の月

又

笙の音にそふて出たる梅月を

誰そ来て見ませ夢にはあらまじ

三月七日友人と連々清水寺に詣出れば花盛にて賑か也けり

鶯の啼音も細く白糸の

たさも匂へる花の清水

又

手にうけて戴く花の吹雪哉

又

呑もせぬ酒に酔たる面白さは

さよみづ寺の花にこそあれ

四月八日出立して橋本魚屋に至り逗留して十八日此宿を立たまく思へば隣なる萬々の嫁やゑ女來
りて何かなはへり與よかしとこふにまかせて

萬屋母さと 息卯之助 嫁やゑ題

よろ津野も里も卯の花白々と

八重十重に咲く盛なるらん

杯戯れことすれば宿の下女わらはにも何かな出たへよと云へるに

文政十一年

散ぬとも君か心のかわらねは

またさきぬらん床夏の花

十九日出立して八幡の社主小寺重内主を宿と定め社坊社土方へ行つ來つ遊ぶ、五月十四日何某は僕を伴ひ橋本の驛魚屋萬助といへる茶店の二階に上り友人七人酒くみかわし熟酔の上しばし目とろみ夢さめて

涼しさや櫻に風のそよ吹きて

みつをと高く小舟こき行

未の刻より舟に乗て

淀川や流るゝ水の色を青み

さしの木蔭に小舟繫さぬ

十九日諸人に暇をこひ廿日出立して淀を打過北の土手を十丁程登れば昔し淀川大水の時此土手切たる跡とて古き池有暑さしのぎ兼て此松の本に休らひて

木の株に腰打かけぬ藤の花

未の刻京都に至り逗留、六月十三日出立して伏見に至り深草の少將の古跡を尋れば藪の下道とすへ

るに有り

日盛や草むす中の傘白し

夫より宇治の北結塚原善右衛門主に至りて逗留、十七日出立南結菊やに宿る此家宇治河へ懸作りにて涼しく殊更に螢も飛入けり、螢の名所なれば

家毎に螢燈や宇治の里

宇治橋の本に橋姫大明神といへる有りその由來を問へども定かなる説なし其夜源氏物語の夢の浮橋の巻にうき舟といへる女の操をたてんとして此處にて身を投しといへる言のあるを思ひ出して

古への今に残れるうき舟の

たてし操の名こそたよへ

十八日出立して再三ながら平等院に詣で扇の芝杯一見して宿に歸り中食して立出で橋を渡り左りへ寄り黄檗山に詣づれば向て左りの堂に開山より三世唐僧にて一世毎に出たるよし聯有り、四世は和僧なりといへり五世は又唐僧のよし聯有り、此堂掉縁に至る迄作り方我國の風とは悉く異なる風雅なり、夫より庫裏に行て唐料理をこふ院代曰く寒中より春二月迄に來るべしと云へり、此寺開基より唐僧なりし故下僕に至る迄世俗とは異なるなりと感る事多き故種々の尋として下山す、日もはや申の刻近く

成りければ又菊屋に歸りて宿りけり、此十三丁の間何度通ふともあくことなし、十九日早朝出立し伏見の稻荷に詣出東福寺、つうてんの楓杯一見して三十三間堂より大佛に詣出京都に歸り逗留、七月五日伏見より夜舟に乗り大阪へ下り逗留、十四日或後家の心の中を察しやりて

正しさに涙かくすや靈祭り

二十一日八軒家より夜舟に乗り廿二日明方伏見に着ぬ、夫より京都に至り友人に暇をこふて立出八瀬小原の里を打過ぎ熊川驛に宿る、廿三日夕刻若狭の國小濱の御城下檜波屋に宿して逗留、八月七日御旗本高橋近江殿此家に御宿陣せられ大雨にて御滞留なりけり、時に此御宿陣ありしによりて此家の客人は皆外の宿にはらひけれど僕一人りは此宿に忍びやかに止まりてありけるが退屈の餘りに宿の婦女ども杯集り來りて僕易を起して茶碗に伏せたる物當杯して戯れ居ければ又伏せて今度はむづかしく候といへるに何程の事歎あらん文なりと言ひつゝ伏たる茶碗を明て見れば一首の歌有り

○たを屋めの顔に見とれて君はそも

心の易のさたまらめやも

と半紙にしるして有り此よみ人はたそやと問へば奥の殿様なりと答ふ、僕返り言もふすとて半紙に認めまゝらす

僕は女のと等に見とるゝ心ちはなきなれど尙ほ老衰したると云うにもあらねば君が御言の葉を忘るゝことなく猶行末身を顧るの種とせばやと思へばありがたくて

處女子に見とれけるにはあらねとも

わか玉種そ君か言の葉

としるし婦女にもたませまいらせければ時を移さず君たんざくを携へ來り給ふ

難波の類何某此田舎に下らせ給ひ香なき賤の女を集長き日のいと紛にとて戯れ給ふを

もれ聞て予も亦戯の言の葉をかゝけるに行末の御身の爲とて歌返し給ふに愛て又其返し

○逢ひ見たく我かいざほとも思はめや

花は吉野の種なればこそ

僕謹で之を謝すれば客曰く先づ我等が席へ來るべしと伴はれて酒杯給はり夜更るまで語りひぬ、明る九日君は上京し給ふ僕は越前の國に赴とて後會を約して別れけり、十日出立して越前の國敦賀の湊狂歌師半月主に至て宿る、十一日皇都の主計といへる茶人來り其夜同道にて古跡やといへるに行て遊ぶ其席につると云う名の女侍べりて家は俗に云う文屋とやらむなれば

おとにきく名處に南む此里は

寝やの床にもつるか啼なり
杯はへりければ女中共甚た不興なりけり、夜明て半月主に歸り此由を語りければ半月主は僕をいましむるとて

○娘捨はとまれ何國の島にも

親おゐて來る芋の名月

とたんさくにしるし給ひけり僕謹で再々應是を載て謝す、明る十三日二人りともに門の外に出て主計主は府中へ行き僕は大阪に歸るとて再會を約して

君は行く我は歸りぬ秋の日の

すゑあふさかに待暮すへし

杯はへりつゝ主計ぬしを見送りて僕は半月主に止り二十五日迄逗留しけり、廿六日出立してふと越前の國の三國へ志し廿七日着ぬ、福井やに宿り三十日出立して敦賀に歸る、九月二日出立して正田の驛に宿る三日今津村に至り神主に宿る此邊風雅を好者多く遊ぶこと三日此家のふしどより湖邊向に彦根の城見ゆ又庭に出れば左りに竹生島見ゆ其外向路を見渡せば朝はへ夕はへの美景言はんかたなし

夕映の床しや濱の梅もとき

又

湖に照る入日まはゆし梅もとき

六日出立して平野村に至りて宿る、七日早朝出立して平山の埜より見渡せば白砂原の小松間はらにして殊に景色よし

平の野にこふる思ひのとしふりて

つもれる暮の雪にあわはや

此所より東南にたどりま野の入江を尋れば濱邊より十丁程隔にて昔しは舟を繫たりと云へる櫻木駒つなぎてあれは

古しへは舟を繫しさく良木に

いまはたなとて駒つなくらむ

是より元の道に歸り片田の浮御堂に詣出れば翁の碑有り又橋の前樂師堂の閣に

○たれも皆頼めやくさまくに

身をわけて世を救ふ御佛

名にしおふ落る雁を見まはしけれとまのあたり空飛雁さへ見へねばそこ爰見巡りて

大綱

浮御堂の沖に遊ぶは鷹ならめ

なみの間にく見へつ隠れつ

なごりおしくも宿を立出で唐崎に至りて

唐崎の賑ふ聲はもろ人の

めをおとろかす松にこそわれ

此所より見渡せば遙に左は矢はせ右は大津の濱より打續き膳所の城の前には矢走より通ふ舟なむ日傘にや白々と見へて美しきことにこそわれ杯一人りこちしつゝ夕つかた大津の三井寺に詣出漂々たる湖を見渡して

真帆高く雲井をさして乗舟の

うすく成り行いり合の鐘

夫より大津越前やに宿る、八日早朝また三井寺に詣出湖を見渡して

めの届くたけは隈なく三井寺の

明の鐘の音ひくみつらみ

夫より宿に歸り立出して瀬田に至れば右き友人に逢ふて橋本の茶やにて酒くみかわし杯しつゝ爰に

宿りけり、明る九日節句なれば俵藤太秀郷と龍神を祭れるといへる社にもふ出て

往さ來るさ人を守りの二柱の

かみの恵みにもるゝものかわ

是よりから橋にイみて

名所をめてゝや瀬田の唐橋に

おふねつなきて遊へる人は

杯はへりつゝ石山寺に詣出別を惜み茶店に立寄り腰打懸て語る事の果しなければ友人は京都に行き僕は關の津へ行とて別けり、申の下刻關の津矢の根權左衛門主に至り逗留のふし宇治田原中の心佐々木惣十郎主へ行つ來つ遊ひけり此兩家ともいわれ有る舊家にて御除きの家敷山五丁四方といへりさきつ頃より石山寺の月を見まほしく思ひて八月十四五の日此寺に詣出ること三度われと雲杯さわりて見る事なかりしが今年九月十三日關の津の里を立出石山寺さして來りければはからずも木の間に月の顯るゝを見て

かねの音の消行先を見送れば

木の間より出る後の夜の月

又

鐘の音の消行くさきや後の月

杯はへりつゝ觀音に詣出瀬田に至りて宿りぬ、尤此茶店旅人は留めず、十四日京都に歸りて十九日ま
で逗留、廿日出立堅木原驛大橋主に至れば主曰く先生始て僕が家に宿りし夜に此孫出生したり今年八
つ八月を祝へり年毎相語ふこと或は五度或は七度に及べり孫が祝ひしらすしもあらず何とて祝儀に來
らざりしや實薄き者哉と云へり、僕再々に詫れとも不免よつて以來志を改むべしといへば忽氣色なを
りて又の祝ひすべしとてよもすから酒くみかわし樂しめり是等の事は人々心得あるべき也、廿一日景
福庵に宿る、廿二日丹羽國龜山御城下大坂屋に宿り、廿三日大飼村禪定寺に至り逗留の中當村の郷士
數平之進といへる人日々來りて語ひけるが或日曰く春赤く咲し桃今又白く咲くこと甚心さわりなり祝
ひ直してよとこわるゝに任せて

壽をつくる試めしや一とせに

ふたゝひむすふ庭の白桃

平之進主大に悦び謝物として松茸五貫目送りこさる、二十六日數主に招かれ行ければ家内下女迄召
連酒肴杯持せ留置たる自分持山へ松茸狩に行き數盃を傾け諸人うかれて松茸をとるを見て

茸狩や女の聲のそふくし

二十八日出立して京都に歸る、十月朔日友人六人連れにて高尾山へ登れば

挨拶の言葉にも散る紅葉哉

としるしてあるを見て友人も僕も一句も出ずして歸りけり、二日出立しゝ大坂に歸る逗留八日出立し
て和州郡山谷口主に逗留して

十日立田川にて

流れ来る紅葉たへせぬ立田川の

むかしの今に我さへそあふ

杯はへり寶龍寺並に龍田明神に詣出郡山に歸り十二月十六日迄逗留、此ふしも丹羽市大塚主と宇田郡
十束村高島源五左衛門、足止村平岡良悦の三人りの主達へ行つ來つ遊ひけり、時に十束村と足止村は
皆平家の落人の由にて今に至りて奈良御祭禮に其しるしあること世の人の知る處なるよし、十二月十七
日出立して暮るゝに宇治菊屋に至りて宿る、明る十八日小諸塚原ぬしに宿る、十九日出立して京都に
至りて七條の濱山城やに行つ來つ越年しけり

文政十二丑年

文政十二年

料戸の風に吹込れたる御慶哉

二日加茂明神に詣出歸るさに大裏の御かさりを拜せはやと爰に來れば諸公家方參内し給ふ趣は再々拜すれとも實に尊かりけり是にて心も廣く成りたる心地して勇みて宿に歸りけり、三日友人に年禮して四日より道の談話始りけり、六日夕つかた隣なる内室若菜持來れるを見て

土の儘盆に乗せたる若菜哉

七草より又神社佛閣に詣出或は友人に語らひ十五日に至りぬ、夕刻伏見より舟に乗り明る十六日未明大坂八軒屋に着けり、其日より友人悉く會して十九日出立新在池村照日山新五郎主に至り逗留、此ふし酒送家の主達日々十三人來る、二月二十三日出立して六甲山を登り越へ幡州幸田村吉左衛門主に至り逗留、此家の祖父九十七歳になれるよしなをも壽きて

老人も若さますらし此宿の

かさしににはふ庭の梅か枝

と祝しければ考人始め家内の人皆悦こはれてなをも家内むつまじき事とはなりぬ、二十五日出立して有間の里に至り入湯しけり、二十七日出立して又六甲山を打越御影村に至りて逗留、新在池の友人皆

來る、三月二日出立して兵庫鹽屋に宿る、四日明石舟屋に宿る、五日姫路津の國やに宿る、六日未明出立して在處道をたれば今土中より出たるはかりの蛙をとらへんとするを

子供等よ追なさわるな初蛙

夫より漸くたれば大樹の櫻咲亂て其邊り奇麗なる小芝原より、此日とりわき風も無く雲も無く唯長閑なれば此櫻の本に腰打懸て花を眺め休ふたる心地のよさは譬へき物なく煙草杯くゆらせかなたこなたを見やる、おりふし櫻の花一ひらふら〜と散るを見て何となく泪催しひとり嘆息して古歌を思ひ出し嘆吟すること數度に及びぬ

○久方の光と長閑けき春の日に

しつ心なく花のちるらん

と吟すれば吟する程なほ長閑さと花とに心をとられ時刻移れば名残おしくもこゝを立て道を急ぎ寶津に至り逗留しけり、十一日明神にもふて、

木の本に寝まくほしけれ笹蟹の

やとにも花のちりしきにける

又

笹蟹の宿にも散や花むしる

三

十二日此處より舟に乗り末の中刻九龜に着ぬ、此日屏風か浦善通寺に至り宿りて

夜櫻の匂ひませとや月のさす

十三日出立して彌谷より山々を打越和田の濱大平木惣兵衛ぬしに至り逗留の中海上三里伊吹の島一見すれば子供老人杯此島にてハダスコト云よろすと云魚をもりにて突居る此島人魚を取り國に行き殺と交易して暮すといへり、尤食物過半は魚のよし此島より程西に凡三里餘の芦原有り此處雁鴨の玉子の空幾はくか有り夕刻和田の濱に歸る或日

鶯を餘し吹とや春の風

四月七日出立尤當村にて語りひし人々十二人連々にて伊豫の國界より山路に入りて阿波の國奥山の新宮と云へるに至り奥の院に詣出て

みやま路や春もゆかぬに夏の來て

時鳥啼うくいすもなく

尤此處伊豫讃岐阿波三ヶ國の堺ひと云へり、夫より新宮の田寺新之亟といへる方に宿る、明る八日此村より凡五里東と思しき方石堂といへるに行て見れば數百人詣出て賑ひ稀也、大風雨にて逗留しけ

れば米切て宿する家々困り入る由僕曰く米無くて何有るや主曰く此里は粟計りにて何もなし僕曰く粟はいかにして食するや主曰く飯に焚也僕曰く是は珍物也粟の飯とは初て聞ぬとまれ粟の飯食して見たしと云へは主大ひに悦ひ則ち粟計りの飯を焚出せり扱此飯はろくして箸にかゝらず食する事不能人の食ふを見れば茶をかけて投込めり僕其真似をしければ胸元よりひざ迄溢れて湯たらけ飯たらけに成り困り果ければ友人最前より粟飯をこふたるを不興にありしか此時それ見たかよい知りもせずこんな物を注文するからと大きに叱られけり、米は十五里馬の通ひなき嶮岨なる細道を二斗づゝ負ひ登る故一升百五十八文のよし也、明る十日の朝米有丈也とて粟と半分交りの飯を食ふ此處にて友人に別れ僕一人りにて徳島さしてたどりければ右主の云へるよりも邊鄙にて道は一筋にて迷ふ處はなけれど極細道にて或は木の根に縋り或は岩穂に縋り漸くにして五里蹴躡り奥里村名主に至りて宿る此道四國邊路の近道の由也此處一升百と八文也といへり、是より下り坂多し十里たどりて辻村大將熊之亟といへるに至りて宿りけり此村迄は馬通ふと云へり米一升九十文也と云へり、十二日早朝川舟に乗り十里下りて未の上刻大重といへる處に着ぬ舟間屋あり此處より田有り米一升七十七文也と云へり、十三日十里徳島の御城下を過ぎ立江村の地藏寺に宿る逗留、當村森下軍左衛門修身齋家の規則有り著述に出せり、十五日出立して左右村なる清水寺に至りて逗留、十九日早朝院主を始め小性士ひ杯連々にて山の

麓へ茶摘に行く、道すがら左に阿州一の大藤也といへる花盛りなれば

肌脱ぎで先づ一ふくぞ藤の花

しばし爰に休らひ漸々奥へたどりて

春もまた残りし木々やほととぎす

此ふし茶摘ながら口々に風雅の戯れ多く樂み深し、未の刻寺に歸る二十二日院主案内にて稻田公に見へ其夜は爰に宿りけり、廿三日清水寺に歸る、廿六日立江村地藏寺に至り宿る、廿八日荒田村圓福寺に至る、廿九日月讀寺に至り逗留、五月二日出立つ觀定が嶽に詣出れば此道すがら左右ともに眞石斗りて土は少しも見えぬと大木覆ひ茂り物凄き地なり、入口の左りに不動明王御來光の瀧といへる有り此處より凡五丁登り弘法大師觀定せられたる穴憚定也と云へり凡二丁程入りて止りに石の段有り是より此寺に宿り明る三日暇をこへば頻に止められて遊びぬ名殘惜くも四日出立して立江村に歸り逗留、七日出立大仁の不動尊に詣出爰に宿り八日清水寺に歸る九日母養寺に詣出小松の里に至り酒酌かめし杯して清水寺に歸る其外處々に詣出て清水寺に歸る事多し

時に此院主先年高野山に住めるころより交り深かりし事杯語り情愛水魚の如くなれど生涯を爰に暮すにもあらねば

院主に暇をこふて

別るればこがれ益らし飛盛

院主前文略

燈火も細く深けりほととぎす

十一日出立して立江村地藏寺院主連に辨天崎に至り乗合十六人にて此處より出舟して申の下刻紀州和田に著き此處に舟を懸け阿波島明神に詣出其夜爰に宿る、明る十二日早朝出舟して未の下刻大坂わじ川に著き諸人に別れ平野町に至り逗留して友人達と悉く語らひ十五日鈴五綿吉主連々にて大坂を出立つ三日市驛に宿り、十六日加彌驛に宿り、十七日高野山に登る、十八日僕案内して奥の院より別所一身谷迄悉く詣出て蓮花三昧院に歸る、二人のぬしは大坂に歸る、僕は院に止り逗留の中

塀越に匂ひ來にけり枕丁木

六月朔日下山して大和國宇田郡足止村元悅十束村高島の兩主を始め外高野山にて懇意の人々に語らひ逗留して四日出立つ奈良大坂屋平藏ぬしに宿る、五日早朝明神に詣出て

拍手に鳴後れたりほととぎす

夫より大佛に詣出すれば先年詣出しより倍して大きく見へたり、宿に歸りいぶかりて語れば平藏主

曰く當所の大佛は餘り大物故初の程は眼とよかす度重れば眼届く故いよく大きく見ゆる也何方の人
も皆同しと云へりげに尤の説也、夫より出立して近道を蹴蹴り木川に至り中食して玉水、長池新田等
を打過ぎ暮れに伏見に至りて宿る、明る六日京都に歸る逗留のふし堅木原大橋ぬし來られて四條河原
の涼みに行けば賑ひ歸るを忘れ夜更て宿に歸りける、又祇園祭のふし四條繩手扇政といへるにいざな
われ夜更る迄酒吞杯しける料理の上品なるは堂上方諸侯方に奉る故に斯くの如しと云へり、此逗留中
に堅木原、宇治關の津、宇治田原等へ行つ來つ遊けり。七月十五日盆踊りを見て

友とちの陰むつましや盆の月

八月十三日縁先に出て

刈込た松も月見の催ひかな

明る十四日友とち五人連々にて西近江會津へ往くとて京師を出立して名所古跡をめぐり坂本の
驛に宿り十五日出立して互ひに戯に氣をとられたどりければ大溝村を打過ぎ一里程行きて日既に暮む
とすれど泊るべき宿無し各々何ともなき振にはあれど草臥常ならず見ゆ漸やくにして此湖邊の渡守を
頼み宿りければ穢き風情も亦面白く思ひて

幸ひに草の庵の月見かな

と待りければ友人餘り不自由にて其句面白からずと云へり、僕故て曰く人は兎角足る事知らざれば
足れば足る程たらぬと云事世俗の知る所也かゝる事も風雅也と思へば則ち樂み有べし無益の困みをし
て月日を費やす事勿れと云ひつゝ人の句を思ひ出して

○月といふ間もなく秋は深て行く

と唯一人り嘆吟すれば友人も皆ほゝゑむことに至りけり。明る十六日早朝出立して用事調ひ歸る、道
の左りなる茶店に休み萩の花盛りなるを見て

朝露に生かへりしか萩の花

夫より坂本に宿り平山の麓より三井寺へ懸ぬけ道を通り京都に歸る

是より寅三月迄の日記失て不知

文政十三寅年

三月五日大坂を出立して淀川土手をだとりて京八條へ行くとて田の中の道にて

小休みをしては啼出す蛙かな

杯はべりつゝ京都に至れば六地藏といへる里凡そ一里のうち皆桃畑なるが今花盛りの由なればとて七
日早朝より友人に伴われ連々六人此里に至れば諸鳥もさへすういろくの人の連々も酒にも花にも酔

ふたる風情なるはいと面白く心も空なるばかりなれば人の待り置し句を思ひ出し數度吟して樂めり
との本に心をおかむ花と鳥

杯吟しつゝ酒杯のみて此處より宇治の里に出づる近道をたどれば小ざき山も平なるも一圓に孟宗竹を
作り筆を京都へ賣出し渡世とするよし此竹二枝三枝づゝ殘し不殘うらを切りたるは竹毎にさながら花
會に生たるが如し尤此邊なべて村からも人も風雅にありけり、爰を打越して宇治の里に至り神社佛閣
悉く詣出て宇治橋の本にのみ四方の山々を見て

遠山の霞の中にははへるは

おほつかなくも櫻なるらめ

又

長閑さを霞の中に櫻哉

夫より菊屋に至りて宿る、明る八日薪舟に乗り伏見へ下り京都に歸る、十日出立して膳所の城下橋
本屋に宿る、此ふし御影参りにて海道筋混雜故西近江へ返り十一日坂本に宿る、十二日濱邊をたどり
榎津泊り、十三日東會津泊り十四日近道を山越へに鹽津浦永井重左衛門主に宿るりて逗留しけり。此
大修身齋家の規則有り著述に出せり、二十日長濱に宿る、當所凡千軒有りといへり六七分は縮緬織る

職人とぞ、二十一日此處より案内をとり横さまに山道をたどりて伊吹山五合め松尾寺に至る

(松尾寺の記事は事蹟にあるを以て尋す)

二十三日關ヶ原迄出て宿りぬ、明る二十四日出立して栗笠村彌三郎主し、鳥江村勘兵衛源之進の兩
主杯へ行きつ來りつ逗留しけり。四月八日問屋勘兵衛主に至れば彌三郎主來りて田植近く成りて御影
参りも静りし由なれば三人りひそかに参宮すへしといわれければ皆同意して明る九日鹿島の社に詣出
旅姿にて宿に歸り酒くみかわし未の下刻より舟に乗り十日辛の上刻桑名に着きぬ。此御城下を打過ぎ
八丁程たどり蛤を焼く茶店に休らひて

草の戸の都ともせむかきつばた

此處を立出て四日市の驛にて中食して追分に至れば是よりなを群集して歩行も難儀也けり、神戸宿
を越へ松原に休み白子宿を打過ぎ上野入口にて休み津のたはこやに泊り、十二日出立して雲津を打過
ぎ渡し場に休み松坂入口に休み、おは田宿を過ぎて田の中の茶店にて中食して宮川に至れば甚しき喧
嘩有り、此まぎれにとて渡を越へ山田に至り泊り、明る十二日荷物は宿に預け置き参詣の道なる宇治
橋を渡りて清めの水の處にておもしろき戯れ有り、此處より右へ入れば御子神樂あり、夫より内宮本社
に詣て末社を過る時彌三郎主戯て過ち有り巡り終りて天の岩戸といへる穴に詣出てより外宮へ詣出て
るとてあいの山にて又彌三郎主戯てしくじりけり、此ふし腰懸もなき茶店てて團子を食し或は焼飯一

つ限りの接待當るを幸ひに食して外宮に至り本社末社に詣出て磯部太神宮に詣出つれば鸚鵡石有り、此奥の太神宮に詣出て此邊り四方の中猿田彦の山とて御遷宮毎に此山より神の御柱出とる云へり猶此山猿田彦太夫の持也と云へり、少し歸り淺間山虚空藏に詣出て萬金丹杯買ひつゝ、二ツ見が浦へ出んとすれども日は西に傾きければ少し休らひ暮々山田に歸り泊る。十三日出立つ上野宿泊り、十四日四日市宿泊り、十五日桑名より津島迄舟に乗り爰に宿りける、十六日牛頭天王を拜し大垣の城下に至り大村藤左衛門主に宿り、十七日御祭禮を一見して申の刻垂井宿伊勢や泊り、明る十八日鳥江に歸る。是より鳥江、栗笠、大垣三所のうち往きつ來りつ遊びけり、或日栗笠に腹はやるとて村中日待して氏神の前に大さ巾六尺横九尺の懸行燈を拵へ是に彌三郎主墨繪にておゐらん縁臺に涼み居る圖を畫けり僕に讀すべしといへるに任せて

おゐらんは病拂てよすすみ

とはへりければゑんきよしとて村の老若男女悉く悦へり。五月廿三日鳥江栗笠の友人達に暇をこふて大垣に至り宿る、爰にも暇をこふて赤坂宿を打過ぎ熊坂長範物見の松といへるを見て

通り行く人な惱そ鬼あさみ

杯はへりゝ抗瀬川を渡り渡し舟の小家に休ひて

嘘して目をしはたゝく茨の花

此處より少したどりて在所道三里たどれば山路と成れり又一里程行きて流水清き谷川の邊りに出づ、此處にて鮎の魚をとるを見つゝ空腹なれば此邊に茶屋杯はなきやと問へば此邊に食事する處曾てなしと答ふよぎなく腹帯をしめて漸くにたどりく谷汲山門前の茶屋に至りて餅を食ふ、猶ほ觀音に詣出れば男女に限らず髪を切り國處名前をしるし納め有と幾千といふ數を知らず是れ西國三十三所の札の打止め故如斯といへり。此日門前なる山城屋に宿る、明る廿五日出立して元の道を歸り凡一里の間谷間を下れば所々に深き淵有り水底に浪の花とて白く光る、海の水の花は夜るは赤く光る是れ陽陰の自然なる事著述にしるし置たり。是を下り東をさして在所道を五里たどりて芝北原村津の國やと云へる酒造家に至り逗留しけり尤鳥江勘兵衛主の傳言をもて來りし故主にも心置きなく程よくに遊べり。此家にて先年因徹といへる碁打を仕立し由し其よしみにて碁所におゐては子孫始め弟子を仕立る規則有る由し悉く聞けり、著述にしるしあり。時に此逗留のうち圓鏡寺といへるに行きつ來りつよりく茶花杯の會有りて楽しみ深く遊べり。六月五日雅人達に暇をこふて六日出立して加納の御城下いはしや吉兵衛主に宿る、七日出立して岐阜やしま町島や吉兵衛といへる酒造家に至り津の國屋よりの傳言をさし出せば是亦心置きなく逗留しけり。此主に伴はれて織田信長公の古城跡稻葉山守護の郷士達木卯

右衛門主といへる方に至り御本丸二の丸杯の堀の跡迄悉く一見して昔物語多し略す

時に島屋ぬしも共に此家に宿りてよもすがら酒杯呑けり、此時より島々と此家と往きつ來りつ遊べり

二十五日達木主と島や主に伴はれて長良川鵜飼舟を見んとて申の刻より渡場上みの茶屋といへるに酒くみかわしその邊りの美景を楽しみ待居ければ暮て間もなく五艘の鵜舟追々に下るを見て

追々に山陰出る鵜の筈り

鵜舟のかゝり川瀬の浪のちらめくに移り五艘の筈り火連らなりて下る奇麗とやいはんわでやかとやいはん何國にもかゝる美なるは有るまじく思ふ而已、又鵜の鮎をとると鵜遣ふ人の早業は心を用ひて見つべきもの也。而して鵜舟の下る事早瀬なれば凡半里餘り下るうちに盃四五盃傾る間もある歎無き歎也、此川の源は飛驒の國也と云り、夜の深るまで酒汲かはし鮎一疋百三十目といへるを鹽焼にせしは高位貴人といへども珍し給ふならん終に此茶屋に宿りけり、明る廿六日備附てある鵜杯を見て又爰にて振舞れてゐるの戯れ多し、日の入る迄此家に遊び暮て此家を立出。岐阜の町を出離れて

とらまへてまた放しけり初盤

杯はへりつ達木主に歸りける、やしま町に友人多く出來にけれど市中故そふくしきとて多く達木

主に宿りけり、岐阜の町は尾張殿御領分にて南北一里餘東西廿六丁にして邊鄙のよふなれど十里四方の在村より諸買物に來る所にて富貴の家多く有て珍らしき吉き町也

七月十三日出立して凡三里程たどり木曾の中に七ヶ村有りて此處にて羽二重を織て渡世とす、此七ヶ村を川島と唱へる、此内笠田村の郷士笠田治郎右衛門と云るに宿り羽二重織を一見して種々の物語を聞けば此地至て飽食を常とす冬は酒の粕を食とするよし、雨天にて逗留十五日出立してかゝ美ヶ原に至り十七年以前此處の源彌といへる人に實意の世話にあづかりし事有る故に尋ねて立寄りければ、主死去して今は茶屋と成てありけり、此處に宿して先年報志の心にて種々物語りして出立つ

此野にて犬山の城見へ美景也、太田の驛より木曾川を渡り可兒山村吉田右近主に宿り、十七日出立つ復た太田の渡しを越へ左りへ山中に入りて黒瀬川の邊りを登り十一里にして黒瀬村月鏡寺に至り逗留、十九日出立つ復た本の道に歸り日暮れて中仙道伏見宿泊り、廿日出立つして御嶽、細久手、大久手を打過ぎ大井宿泊り、廿一日往還より三ヶ岩村御城下問屋六左衛門主に至り御家中大野氏に約せし事有りて尋れば去る丑年秋より江戸勤と成り則ち江戸へ尋來れかしと紙札を残してあり、僕俄に江戸見物せばやと思立ち出府の志を定め逗留して廿五日出立し。中仙道中津川宿に泊り廿六日落合馬籠を打過ぎ津まこ宿に泊り廿七日出立して凡一りたれば往還の右に伊勢兩宮御用水道と記したる棒杭有

り、此日或は雨降り或る時は曇り、空定りなし

流来るそのみなもと天照らす

かみの居ますや空晴てける

尤此邊に木曾殿古城跡ありと云ふ、夫よりあけるの山有り、えぼし岩、はね橋等名所多し、みとの宿泊り。廿八日野尻宿を打過ぎて關山とて古しへの關所也といへり難所也、今井四郎兼平の古城跡といへる有り、女瀧男瀧あり、須原の宿を越へ凡十丁程たれば往還端に小野の瀧とて大瀧有り、道廣けれど人水烟りを恐れて片寄り通る、此邊を寢覺の里といへり名物そば有り、諸人の讀み歌發句幾十といふ數を知らず、此茶店の裏へ廻り浦島太郎の古跡といへるを見んとすれば案内なくして入べからずといわれて

浦島の表は坊主寐もやらで

さめくしくも案内賃とる

觀音堂の前より谷底を見おろせば屏風岩、寐覺の松、獅子岩、腰懸岩、御釜山其外種々の岩あり峨々たる巖石の物尖き深谷にて流水清くして岩間々々を水の流るゝ風景筆に盡し難しことに川風そよ〜涼しければ

君達の免し給はば我もまた

こゝに寐覺の夢やむすばむ

とはべりければ最前より不興にありし堂守もほゝむ事に至りぬ、此處に長居せし故道を急ぎて彌生の茶屋といへるに至り名物の蕨餅を食ふて

夏も秋も冬も彌生の茶屋なれや

わらびの餅のあたゝかなり梟

此處を立出て一ヶ所の坂を越て七十五間の懸橋有り右は巖石屏風を立たるが如くにして數丈高く左りは深き谷にて恐ろしき所也、翁の碑有り

○懸橋や命をつなぐ藤かつら

此所より二丁程たどりはね橋有り木曾谷々の水此所に纏りて是より大河となるよし、夫より沓懸といへるを打越へ福島宿に至りて泊り足疲れければ逗留して三十日出立し御關所を越へ宮の越といへるを過ぐれば右に山吹御前、巴御前の墓所とて高さ四尺斗りの石塔有り、是より凡一りたどれば右に木曾義仲公鎮守南宮の社御手洗と記して有り

遊人に道を後るゝ清水哉

此御手洗といへるは空言也と云ふ人のあれば

いつはりのあればこそなを古しへの
君の御徳の高く知りぬれ

漸々たどりて蕨原宿を打過ぎ鳥井峠に至り休めば御嶽山手にとるが如くに見へて大山殊に山々の景色も亦一しほ也けり、烟草二三ふくくゆらせしうち曇りて見へず成ければ

御嶽山と見しより早く雲かけて
なごりおしさの雨と降りけり

夫より奈良井宿、費川宿此兩宿は木曾名物の細工物を造る所也、尾張殿御番所あり此坂を下りて櫻澤といふ人家三軒有り各々お六桶を賣る此所に小川の橋有り、尾州領松本領の堺杭有り此處より山至て悪敷成り白かんばと云ふ木斗りなり、松杉檜曾て無し甚だ淋しき野路なり、漸々たどりて本山宿を打過ぎ洗馬宿に休みけり、此所に左り善光寺道と記し有り。是より桔梗ヶ原といへるを越へ鹽尻宿に泊り、八月朔日出立して凡一り餘登り峠に休み諏訪の湖を眼下に見下し湖の向に城見ゆ、前の右に地蔵ヶ嶽、左遙に八ヶ嶽、眺望の美景にめで人の句を思ひ出して

○居直りて山幽なりほととぎす

幾度も吟じて楽しみ一思ひに此坂を下れば右に富士山見ゆ僕珍らしき餘りに湖の邊りの茶店に休み

て
旅衣 今日行末にふじ見へて
のこる暑さを忘れてそゆく

夫より下の諏訪伊勢やに宿り足つかれければ温泉入湯して逗留しけり、三日明神に詣出て湖の邊りを見巡し歩行し東の小高き山に登りて見れば湖に富士山移りけるが初めのうちは心もつかでありけるが人の教へに能く見れば水の中に富士の山有る

湖を鏡とやいわめするかなる
ふしの高根のかけの移れば

杯はへりつゝ宿に歸り、三日出立して凡十丁程たどれば古宿といへる古跡有り、次に大しらみ小しらみと云う山有り次に樋橋村を打過ぎ左りに天狗岩有り次に垂岩、次に西の餅屋小口屋といへるに休む、十四五丁もたどりて和田義盛の勇力を顯せし所有り漸々登りて大黒岩有り峠に登れば石の地藏有りてあわれなる處なり尤八方一覽の處にて美景多しといへど秋の空何となく心淋さはかりなり

奥山の山の奥なを山深き

山を深めて霧のむらたつ

喜

杯はべりつゝ九丁下りて東の餅屋に休み此所より二り下りて左りに馬のセツたいする小家有り又半り下りて和田宿に至れば彦根城主御泊りにて旅人をとめず、よぎなく長窪宿に至り越前屋に泊り此ふし足も疲れ路銀も盡たれば逗留しけり

九日出立して上田御城下横町大工やに泊り逗留しけり、友人多く成りぬ、時に十月廿日海野町小野澤六左衛門主の息辰三郎といへる者長病にて日々に衰へければ諏訪の名醫立木うしの療治をうけたく思ひ其父母僕に連行き吳よかしと頻りに頼り僕辰三郎なる者はしく思ひて其意に任せ連々と成りゆきけり

時に辰三郎ぬしは俳名三秋亭胡雀僕は此ふし錦江堂なりしか是を爰に至て改めてふらく齋遊なりけり此ふし二人ともに日記をまさごのつれくと題して出立しけり十月廿日未明上田を出出てちくま川の邊に至りて

○水鳥の静に成りし日の出哉

胡雀

此川橋を渡り長瀬村といへる處に至りて

○振向は二度めの寒さ野菊哉

胡雀

是より漸々たどり深山路に入て

松蔭の尖く成りし枯野哉

遊

夫れよりひさくり毛の眞似して行へしとて互ひに戯れつゝ長窪の驛に至り池田屋と云へるに加籠をかきいれさせ寒さの餘り炬達にもぐれば女中とも承りさまくに響應され困り果て

腰懸た儘を座敷へ揚屋ふり

なかくも居ると思ひけるかや

遊

としるし雀子に見せければ雀子又筆とりて

○かわぬなら早いけさやといふ顔も

知らぬ鼻毛のなかくもある哉

雀

ハ、ハ、ハ、と笑へば女中ども臆を潰して勝手へ引けり、ぶしやうく此宿を立出て和田の驛永井鐵五郎主に至りて宿る

○鶴鶴松のよわいをたよるか南

雀

十一日此宿を立出て和田時へ行く中程にて

凧に吹出されたる雀か南

遊

夫より東の餅やに休み蘆の箸にて飯を食て

○枯蘆カカを折たる箸や海苔の飯

此茶屋を立出九丁登り峠の風はけしければ

寒からむ和田峠に地藏尊

つれをもなしに一人りそむ

と云つゝ下れば雲助曰く旦那方はよほど情の深そふなことをおしやる御衆たが石の地藏に情をかけるより生た此地藏になさけをかけておくれはよい杯と戯れけるに

地藏にも今日は成たく思ふらん

ゑんまのような顔して居ながら

遊

ハ、ハ、ハ、ハ、雲助曰く困たハ、ハ、ハ、ハ、ハ、相方笑ひ思ひ出しては又笑ひつゝ西の餅屋に至り籠を立る、雀子加籠の中より柿を見てさもほしそふなれば僕加籠より出て味ひ見れば澁くて々々唇をひつぱりよせるやふてはわれとわざと甘ひと偽りて雀子にあとふれば雀子は嬉しげにとるより早く喰ふかと思へしか一口喰て吐き出し又一口喰ては投出す僕おかしさ忍び兼てハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、雀子加籠にて

○甘ひとて呉たる柿の恨みさへ

いふことならぬ口の澁さよ

とこふ言うちはや加籠に杖をこふ僕コロマア待ちな茶菓子に成りそふなかきいてクンナ

口なりは巻せむへいにさも似たり

かき出す加籠の中のおかしくふ

遊

雲助までハ、ハ、ハ、雀子曰く人に澁ひ物をくわせて置いていゝつらのかわしやと一人言しければ雲助までハ、ハ、ハ、ハ、ハ、笑ひながら三丁ほど下れば垂岩あり、雀子戯れに紛れて病苦を忘れたる謝言にとて

○穂すゝきはなみ床しや垂岩

此處より五丁下りて右に天狗岩と云へるを

風のあら恐ろしや天狗岩の

たかき鼻から吹おろしけり

遊

夫れより漸々たどれば一ツ橋有り一丁程向に村有僕曰くコラ雲殿此村は何と云歟雲助曰くハイとよはし村と申します僕ナンダイ此寒ひのにとよほし村とは雲助曰くどよばしじやアゴウシナイ樋橋でロ

ワス僕ハ、アそんならにをりをぬけばよい歟雲曰くニ、此旦那もわからない人だそれしやアはトはト
違やす合棒の曰くヤア手前今日はかなのちかつたを知て居るなそれしや雲助を止めて歌よみにても成
るかイ雀子曰くコチ遊サン今日はおまへゑらひもんダセ雀吉備大臣サ僕ナセおめへくもに教られたヒ
やネエ歟僕そふよ

しらざるをくもの助に教へられ

から／＼わらひ渡るとよはし

遊

笑ひ盡して樋橋村に至り休む、扱今日は笑ふと限りなし願の落ぬも不思議也云ひつゝ下の諏訪に至
れば日は西に傾きし故急ぎ上の諏訪に至り牡丹屋孫四郎方に逗留しけり

時に湖雀子は日々二度宛立木うしへ療治に通ふ跡は僕一人り宿に蹲踞^{ツツシ}り居ければ襖の外よりさも和
らかなる聲にて爰明け給へといふ僕何心なく明ける拍子に雀子ハツと大音に僕びつくりしてハ、ハ、
ハ、ハ、

やさしさにめのとなるかと出頭を

打てかわつたおそろしき顔

雀

或 日

はつ時雨湖を渡りて行し跡は

夢かとはばかり西日さし覺

遊

僕一人退屈して何にかなと思ふ折節雀子御屋敷より饅頭をもらい持來り茶杯せんして呑ながら即座
にからとなし其跡へ烟草を入れて雀子とりかへす

○饅頭のあまい顔しやとその跡は

たばこといふて辛きめにあふ

雀

日に々々心馴れふて唯心ちよく面白くくらしをることゆへ僕又其箱の蓋に

饅頭のあま味の箱をふたりして

たばこと入るゝ文はこにせむ

遊

杯とたはごつしつゝ伏床に入り明る冊日雪ふり積りてあれば

あり／＼と見へつゝ遠し富士の雪

遊

と云ふをきゝて雀子出て見て

○朝の間に手本のふじや諏訪の湖

雀

杯互ひに楽しみ居ける處へ當家の主と來りて各々風流の御樂み我等も加へ玉ひといへりければ夫れよ

大空は月の都かほととぎす
何かは足にまかす様さき
大松の枝はその儘したよりて
新綿とつてまつわけて見る
深^まけし夜をなほ深くする秋の客
礎^{たもと}の音に足かたはつく
杯はへりける處へあるとて用事有とてゆきければ是にて止みぬ又或日主來りて尻り三字と云へることを
侍へりける僕初めて聞し事故しるし置也

文 湖 遊 雀 吾 遊
雀 吾

しりさんじ

さんしを呼は金の事
のことらしさの文をはよこし
よこし松茸九年ほら
うほう寶はさんりやくの

吾 雀 吾 雀

りやくな浮世を苦勞に暮す

吾

數多有りにつれと意味同じ事故しるさす、十一月十四日さんまといふ魚を食て僕其骨を咽に立困り
果けるが首の筋をもみぬけば忽ち抜るとして給仕の女もみくれけるを雀子わる口に

○先生かさんまの骨を咽に立て

雀

わんまさはきをするそおかしき

とこうするうち骨もぬけやれく御くろうといへば女僕が顔を見て笑ひ出さば雀子いよくおかし
く成けん食事を止めてわらひ出せば女もこけつ轉びつ笑ひけるに

胸さする顔するめする難儀する

遊

とはべればなほく笑ひけり

雀子六日四日五日の間養生の爲めに鱧を食ふとて宿の主にも振舞ければあると筆とりて

○口本は草びれるほど食ふうなぎ

吾

おれいはたつた一口ですむ

其外種々の戯れ言あれとさす、時に雀子病氣全快に趣きしとて立木うしに暇を乞ひ謝儀して十

一月十五日此宿を立出で湖の邊りを通る時

魚舟は氷の諏訪の海

遊

杯はへりつゝ下の諏訪明神に詣出當所脇本陣に宿る、夕刻に至れば針箱といへる年まの女中給仕に出
でしやれるを見て雀子筆とりてとしまの女と前文して

○花ぬりにゑりまで塗しおしろいの

いまはけかゝるよふなはり箱

雀

と云て僕に見せけり僕おかしさ忍びて讀で居れば女中はそれとも知らぬと見へて笑みを含みけるを雀
子いよ／＼こらへかねてハ、ハ、と笑ひ出せば彼の針箱女中も心よからぬ體にて勝手へ行きけり、
跡はいよ／＼笑ひ盡して伏床にいりぬ、明る十六日早朝出立せんとすれば宿の主曰く此山ふところさ
へかく雪深し況や和田峠の前後雪深く加籠にて然るべしといへり故に和田宿迄二人りともに加籠に乗
りけり此宿を立出で五丁程たどりて御作田といへる有り左に木曾御嶽山見ゆ雲助相手にたわむれつゝ
西の餅やに休みければ此茶屋小口屋といへり時に下女らしき者袖口の屋根のうらこをくはへ物思ひ居
るさまを見て

小口屋の下女か口こそ大きけれ

屋根をくはへて物思ひ居る

遊

としるし雀子に見せければ雀子も又筆とりて

○はらはるゝつらさ思へば今さら

屋根か敵の世の中しやナア

雀

と云てひそかに僕に見せけり互ひにおかしさこらへつゝ立出で和田義盛の古跡にて

○古しへを思へば今日の寒さ哉

雀

雪深けれど暖かなり、雲助曰旦那方は何か面白ひことをおつしやる様子だが何ぞ出させんかといは
れて僕思ふに此坂を下る時は雲助を闇魔杯とわるくちつゝ下りけるが今日とりわけ暖か殊に此きう
なる坂を加籠に乗り登る心ちよさと雀子が病ひ全快して歸る嬉しさに

下りには地獄咄もしつれとも

雲に乗られ登る極樂

遊

杯たわむれつゝ峠に登り東の餅やに休み此所より漸々下るとて

遠近のから白たへの目映ゆさに

みるさへならぬ雪の山路

遊

又

雪深しから白たへの目映ゆさに
めもあけかねつ山路たとれば

遊

又

雲の山につゝまれてこそ雪見哉

遊

又

谷底は雉トリなるらん雪の骨

遊

○鳥も今日は雪見のそぶり哉

雀

杯はべりつゝ下りて和田の驛永井主に宿る、十七日出立して二人りともに歩行にてたとり漸く青原と
いへる處に至り僕腹痛みければ

○胸はらをこふはらそふに抱へても

それはひへ腹此所は青原

雀

其返し

あははらや唯出任せに言口の

我がこふ腹を知らぬ奴はら

遊

夫れより腰越を打過ぎふけ村明神の下に小倉屋といへる茶や有り空腹忍びかね食するもの有やと問
へばとうふばかりにて何もなしと答ふ雀子聲高らかに

○小倉屋の見世のばア殿心らあは

雀

うま一なべのにやきまたなむ

と待ればばア殿大笑ひしつゝ急きとうふを煮て出しけりこれにて酒杯呑み明神の地景をめぐりければ
紅葉散て一葉なし、されど流れ水清く奇麗なる細川あり

大和路を思ひ出しけり枯紅葉

遊

杯はべりつゝ長瀬村に至れば日はや傾きし故足を早めて上田に歸りけり

辰三郎主し病氣平癒して父六左衛門主限りなく悦はれて僕をどこへもやらして是より此家を宿と
定め日々方々へ行つ來つ語らひぬ、時に蔦屋早之助なる者當節分の夜脚半を盗まれゑんきあしきとて
商ひにも出ぬよしなれば祝ひ直して

節分の豆に打れし鬼こそは

きやはんをばいて遁て行きけり

としるしまいらせければ氣色直りて商ひに出られける、其外はへりし事多けれど此地の友人稽古はけ
しく多用故しるさねは忘れけり

天保二卯年

元旦

門松の静りて夜は明にけり

當日辰三郎、浮丸、半月の三人り學ひの法則を定められけり、九日より入門の者多く愈々稽古はげ
しく成りぬ、二月十八日辰三郎主しと連々にて上田を立出ち田中驛を打過て

蟹一葉ちからに積る春の雪

遊

又

蟹一葉ちからに積る春の雪を

遊

あへなく踏むそうたてかりける

申の刻小諸の御城下與良町翁屋嘉吉主に宿る、十九日十二人入門有り稽古勵しく少しの中に道たる
所以を知れる者多く僕悦ひの餘りに

此宿に今日長居の櫻かな

三月十四日出立して上田に歸る、十五日休み十七日二十一人新加入有り稽古愈々勵しく僕疲れ甚し
ければとて友人のすゝめに任せ保養の爲め善光寺へ詣出るとして原町八朔主はしめ五人連々にて四月六
日上田を出立して柳驛に至り酒くみかわし杯して此驛を立出ち凡五丁程たとは左り千隈川右は巖石
峨々として道せまく危き所也此難所凡五丁程たとりて人家有り左りは姥捨山右はさくまく院を見つゝ
矢代驛に至りて休み又凡半里程たどりてちくま川の渡しを越て追分といへる間の宿に泊り明る七日出
立して川中島の内北原村町田歩一郎主へ立寄休らひぬ、夫れより丹羽川を渡りて善光寺町入口右にか
るかや堂あり是れより大門町本陣藤屋平五郎泊り廻禮巡して宿に歸る、翌八日友人は此所に逗留しけ
るが僕一人り戸隠に詣出るとして巳の刻出立して凡二里行て穢き茶屋あり又一里たどりて小家あり又三
十一丁たどりて鳥居有り此處より中院へ五十丁といへり、鳥居本より三丁下りて奥の茶屋といへる有
りなを穢し又十八丁行て棒杭有り右中院道左寶光院道と有り、此處より右へ入り中院の正智院に至れ
ば燒失して十輪院に至り宿を定め置き二丁行き本堂に詣出れば雪有り梅の花盛なれば

戸隠に眞春殘して梅の咲

杯はべりつゝ四丁目に至れば丘石尾有り其前に從是内女人結界としるしてあり、此所より右北國道と
有り、九丁目右に和尙火城の處とあり、十五丁目鳥居有り是より漸々に物すさき風情と成る也、二十